

太宰府市の文化財 第38集

成屋形古墳

太宰府インターチェンジ

—— 拡幅に伴う埋蔵文化財発掘調査 ——

1998

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財 第38集

成屋形古墳

——成屋形遺跡第6次調査——

1998

太宰府市教育委員会

序

成屋形遺跡は太宰府市の北西部で、大野城市との市境にあたります。

今回ここに報告いたします遺跡は、太宰府唯一の前方後円墳として早くから知られるものでありますが、九州縦貫自動車道の過密は日々増加の一途を辿り、さらに福岡都市高速道路の合流でさらなる台数増が見込まれるとのことで、一部が削平を余儀なくされたことによる事前の発掘調査であります。

本古墳はそのインターチェンジのすぐ脇に所在しており、古くは隣接するエーザイ株式会社のご理解で削平を免れ、九州縦貫自動車道建設に際しても辛うじて原形を維持してきた古墳です。今回の拡幅事業ではややもすれば消滅への道を辿らざるを得なかった古墳が、一部分は道路として消滅いたしますもののその大半は現地に残されることとなるに至った背後には、関係各位のご理解とご協力があってのことと信じております。現地保存に際してご理解いただきました多くの方々に、まず感謝申し上げます次第であります。

今後はこの古墳を太宰府市だけでなく国民の貴重な歴史的遺産として語り継ぎ、大切に保存してゆく所存であります。多くの方々のご理解が得られますことを念じて止みません。

平成10年3月

太宰府市教育委員会

教育長 長野 治己

例 言

1. 本書は太宰府市水城2丁目555-1に所在する成屋形古墳の発掘調査報告書である。調査は2年次にまたがって行われたため、初年度を6-1次、2年目を6-2次調査として実施した(第1章参照)。
2. 遺構の実測には、国土座標法第Ⅱ座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.(座標北)を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は6-1次は狭川真一、6-2次は宮崎亮一が行い、調査区全景の空中写真は(有)空中写真企画が行った。また遺構全体図は、写真測量による図面作成をアジア航測株式会社に委託した。
4. 遺物の実測及び浄書、写真撮影は宮崎が行った。
5. 本書に掲載した遺構図のうち、太宰府市教育委員会が調査を行っていないものについては福岡県教育委員会から原図及び第二原図を借用し、再トレースした。遺物は資料を借用し、宮崎が実測、浄書、撮影を行った。
6. 本書の執筆は1と4の(2)の一部を狭川、その他は宮崎が行った。
7. 編集は、狭川の助言を得て、宮崎が担当した。

目 次

1、調査経過と調査体制	1
2、遺跡の位置と環境	5
3、成屋形遺跡の調査略歴	8
4、調査の成果	
(1) 旧形と現況	10
(2) 検出遺構	10
(3) 出土遺物	25
5、第3次調査について	
(1) 検出遺構	59
(2) 出土遺物	63
6、調査まとめ	74

1、調査経過と調査体制

成層形遺跡及び古墳群は、第2章にも記載したとおりこれまで数次にわたる発掘調査が実施されてきている。しかしながら、高度経済成長を象徴する高速道路建設をはじめとする大規模事業の犠牲となり、そのほとんどは姿を消してしまった。しかしながら当時の関係諸氏の努力で前方後円墳1基については現地に保存されることとなり、現在に至ったわけである。ところが遺跡が未指定で公有地化されないうまま歳月が流れ、その位置が不明確になりつつあったところに、再び開発の手が及ぶこととなり、急遽その所在を明確にする必要が生じたのである。

開発は現代の道路事情を如実に反映したもので、福岡北九州高速道路公社によって計画された福岡都市高速道路の九州縦貫自動車道接続に伴う太宰府インターチェンジ拡幅によるものである。現状でも夕方の時間帯には大渋滞となる太宰府インターチェンジに、さらに都市高速道路が接続することから今以上の交通量の増加が見込まれるところとなった。したがって当初の案は、この地が古墳（前方後円墳）でない場合は全面カットという計画案であった。

しかしながら過去に協議を行って現地に保存したことは確実であり、今になってその当時の努力を無にすることは許されるわけではなく、古墳の所在が特定されれば再度協議を行って出来る限り現地保存をする方向で協議が進み、まず当該地を伐採し現況測量を行って前方後円墳か否かの確認を行うこととなった。その後、それを確定するために最小限のトレンチを設定し、形状と規模を確認する小規模な調査を実施した（第6-1次調査）。

その結果、1968年度に所在が確認された成層形古墳そのものであることが判明し、現地保存と開発の両面から再度、協議が持たれることとなった。

協議の結果、現状のままでは太宰府インターチェンジの飽和状態が解消できないどころか、接続に伴うさらなる交通量の増加が見込まれる点で少なくとも料金所で数車線の拡幅は避けられず、測量結果で一部崩落していることが明らかとなった現況道路に面した部分を3m程度切り取る案が提示され、両者の合意を見るに至った。なお、残地については現状保存することで合意している。

さて、この結果に従い開発で削平される部分を全面調査することで協議を行い、調査は太宰府市教育委員会が行い、それに伴う環境整備と調査費用は福岡北九州開発公社がすべて負担することで合意した。この時の協議において、古墳の主体部の位置を再確認する必要があったことと、第6-1次調査で手が及ばなかった墳頂部の調査も併せて行うこととした。

現地での調査は第6-1次調査が平成7（1995）年3月6日～25日まで実施し、第6-2次調査は平成8（1996）年10月11日～12月16日まで実施した。また、太宰府インターチェンジを挟んで成層形古墳と対面の位置にある谷部分も拡幅対象地であったため、試掘調査を実施した。調査は平成9（1997）年2月17日に行ったが、谷地形に土砂が深く堆積しているのみで、遺構や遺物は確認されなかった。

なお、これらの調査に伴う整理作業は、太宰府市文化ふれあい館において平成9（1997）年度に行った。調査及び整理の関係者は以下のとおりである。

(平成6/1994年度) 成屋形遺跡第6-1次調査

総括	教育長	長野 治己			
庶務	教育部長	白木 三男			
	文化課長	花田 勝彦			
	文化財保護係長	高田 克二			
	文化振興係長	大田 重信			
	主任主事	岡部 大治	川谷 豊		
	主事	今村江利子			
調査	技術主査	山本 信夫			
	主任技師	狭川 真一 (調査担当)			
		城戸 康利	山村 信榮	中島恒次郎	重松麻里子
	技師	井上 信正			
	技師 (囑託)	田中 克子 (~7月31日)		下川可容子	

(平成8/1996年度) 成屋形遺跡第6-2次調査

総括	教育長	長野 治己			
庶務	教育部長	小田 勝弥			
	文化課長	津田 秀司			
	文化財保護係長	和田 敏信			
	文化振興係長	大田 重信 (~6月30日)	田中 利雄 (7月1日~)		
	主任主事	岡部 大治	川谷 豊		
	主事	今村江利子			
調査	技術主査	山本 信夫			
	主任技師	狭川 真一 (調査担当)			
		城戸 康利	山村 信榮	中島恒次郎	井上 信正
	技師	高橋 学			
	技師 (囑託)	宮崎 亮一 (調査担当)			
	下川可容子	森田レイ子			

(平成9/1997年度) 整理報告作業

総括	教育長	長野 治己			
庶務	教育部長	小田 勝弥			
	文化課長	津田 秀司			
	文化財保護係長	和田 敏信			
	文化財調査係長	山本 信夫			
	主任主事	藤井 泰人			
主事	今村江利子				

調査	主任技師	狭川 真一（整理担当）
	技師	城戸 康利 山村 信榮 中島恒次郎 井上 信正
	技師	高橋 学
	技師（嘱託）	宮崎 亮一（整理担当）
		下川可容子 森田レイ子

・調査参加者

牛島イワヨ 城戸邦典 白水いせの 田中勝江 徳永モモエ 中島タキノ 原田経子 松島順子
 南美智子 高原改良子 増野芳枝 内野絹子 手塚久子 森由美子 藤榮 松本信行 田中幸子
 陶山よしゑ 陶山小春 藤宏栄 上原洋美 和田ハマ子 姪子谷好美 中村勝子 古賀せい子
 松本きみ子 原幸子 町巖 西村晴香

・調査補助員

谷由紀子 上村英士（現筑後市教育委員会）

・整理参加者

武堂年子 小西晴代 瀬戸口みな子 藤野由貴子 原野正子 吉田勝子 菊武淑子 中村房子
 林美和子 久保喜代香 相川寿美子

なお調査及び整理に際しては次の方々からご指導、ご協力があった。記して感謝いたします。

（順不同・敬称略）

小田富士雄（福岡大教授）松岡史（元九州歴史資料館）橋口達也 中間研志 小池史哲 秦憲二
 岸本圭（以上福岡県教育委員会）池辺元明（福岡教育事務所）横田義肇 石丸洋 小田和利（以
 上九州歴史資料館）吉留秀敏（福岡市埋蔵文化財センター）澤田康夫（那珂川町教育委員会）
 宮田浩之（小郡市教育委員会）舟山良一 徳本洋一 石木秀啓（以上大野城市教育委員会）

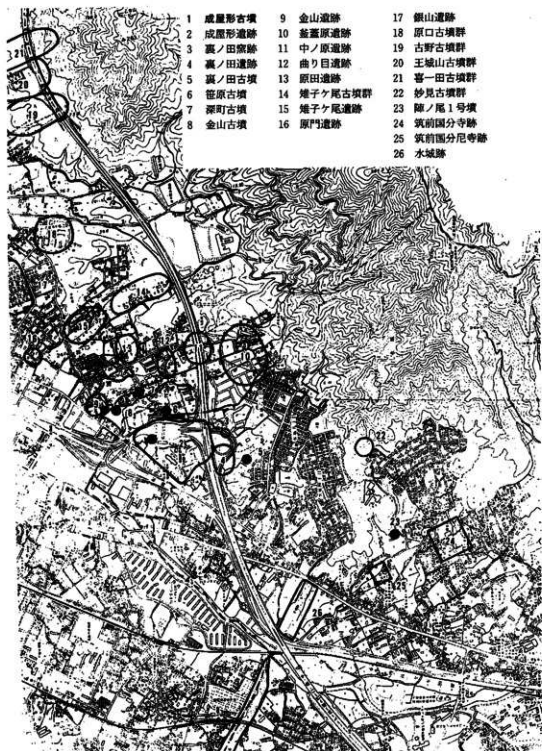


Fig. 1 成屋形遺跡周辺遺跡分布図 (1/20000)

2、遺跡の位置と環境

成屋形遺跡は大城山（通称、四王寺山）から西側に派生する丘陵群のひとつに位置し、古墳（標高37m）と東側の谷部との比高差は約10mである。現在は九州縦貫自動車道太宰府インターチェンジを降りて、下り車線左側の約40m地点に位置する。現在周辺は旧来の地形を全く留めておらず、古墳築造時の立地を知ることは困難であるが、九州縦貫自動車道建設直前の地形図により辛うじて築造時の状況を知ることができる。

さて、御笠川西岸が奴国の中心地といわれ、弥生時代の著名な遺跡が展開しているのに対し、御笠川東岸の成屋形遺跡周辺は目立った遺跡こそないが、重要な遺跡が丘陵ごとに広がっている。特に成屋形遺跡やそのひとつ谷を隔てた鍾ヶ浦池周辺の金ヶ浦遺跡、釜蓋原遺跡からは旧石器時代の遺物が出土することで知られている。

縄文時代になると遺跡は成屋形丘陵北側周辺一帯に広がるが、この丘陵群では早期の押型土器や前期甕式土器が釜蓋原遺跡、雫子ヶ尾遺跡、裏ノ田遺跡で発見され、後期の南福寺式や福田K2式土器が裏ノ田遺跡で見つかっている。また、扇状地状の台地に位置する中ノ原遺跡は以前から多くの石鏃が採集されていた。

弥生時代に入るとさらに遺跡は広がり、原田遺跡で早期の夜臼式土器や石斧、石鏃、土製紡錘車等を伴う住居が確認され、釜蓋原遺跡では夜臼式土器や前期の土器が出土している。縄文早期の遺物が出土する雫子ヶ尾遺跡では、弥生早期の夜臼式土器や中期の城ノ越式土器、石器類も出土している。そして、成屋形遺跡のある丘陵では箱式石棺や石蓋土槨墓が、その南麓では後期の堅穴住居が検出されている。

古墳時代になるとこの一帯は活動が活発になり、各所で分布が見られる。曲り目遺跡では古墳時代の住居が確認され、土師器甕、甌、小型丸底甕、高坏等が出土し、釜蓋原遺跡や雫子ヶ尾遺跡でも土師器片など古墳時代の遺物が発見されている。そして、成屋形古墳から南東に向かって徐々に高くなり、古墳から約370m南東の最高点（標高52m）の東斜面に6世紀後半～末の須恵器窯2基を確認した裏ノ田窯跡があり、その南側の扇状地一帯は裏ノ田遺跡と呼ばれ、6世紀前半を主体とした方形の堅穴住居が25棟検出されている。その他に雫子ヶ尾遺跡で2基（6世紀後半）、喜一田古墳群で2基（6世紀末～7世紀初頭）、王城山古墳群で1基（6世紀末）の須恵器窯跡が発掘されている。

また、古墳時代になるとこの周辺は造墓活動が活発になっていく。成屋形遺跡の丘陵は北西端を中心に比較的古い段階に古墳群が営まれている。北西端の緩やかな西斜面に古墳時代初頭前後の方形周溝墓2基と前期の堅穴式石室2基が検出されている。方形周溝墓の内部主体は1号墓、2号墓共に箱式石棺であった。丘陵北西端付近にあった成屋形遺跡1号墳は、5世紀末から6世紀初頭の径11.2mの円墳で、内部主体は単室の横穴式石室であった。以前に内部から細根鉄鏃が3本見つかっている。その南西部の2号墳は破壊されていて石材のみ残存していた。また、2号墳から東へ約40m地点に古墳らしきもの1基、さらに南東約60m地点に径約20mの円墳1基が確

認められている。前者についてはその後の調査の範囲内にあったが、古墳と特定するまでには至っていない。後者は位置的に今回報告する帆立貝式前方後円墳のことを示している可能性がある。さらに前方後円墳の東側でも古墳が確認されている（第5章参照）。

成屋形古墳と谷を挟んだ北東約200mの丘陵端に5世紀前半の笹原古墳があった。この古墳は径30m、高さ3～4mの円墳で時期は異なるが、成屋形古墳から見える位置にある。また、この丘陵には釜蓋古墳群が所在し、深町古墳、金山古墳、野観音山古墳（径20m以上の円墳）、御太師塚古墳（墳丘径20m）、御薬師塚古墳、丸山古墳、銀山古墳などを含む5m前後の円墳が10基散在していたと言われているが、現在は深町古墳のみ集落の中に残り、墳丘上に神社の社殿が建っている。これらは、6世紀後半～7世紀代の群集墳と考えられる。

また、釜蓋古墳群の北400m付近に雉子ヶ尾古墳群があって、6世紀後半から7世紀初頭の横穴式石室を有する円墳が6基確認された。さらに北600mの小谷の両岸に原口古墳群があって、5基の古墳が存在していたが、乙金浄水場建設によって消滅した。そのすぐ西側に銀山古墳群があって、横穴式石室を有する円墳が4基あったと言われている。その西にウド古墳があった。それからさらに北の丘陵部では6世紀後半～7世紀代の円墳13基で構成されている古野古墳群、6世紀後半～7世紀代の円墳34基があった王城山古墳群、6世紀後半～7世紀代の円墳が16基あった喜一田古墳群などの群集墳が点在していた。

成屋形古墳から2.5kmとやや離れた位置であるが、4世紀中頃～5世紀前半と6世紀中頃～7世紀の二時期の方形墳や円墳で形成されている御陵古墳群がある。今まで述べてきた古墳群とは大きな谷を挟んで全く異なる丘陵に所在する。

そして、成屋形遺跡丘陵より太宰府方面をみると、水城が接続する丘陵に3基の円墳からなる妙見古墳群と一辺9.5mの方墳と円墳3基からなる陣ノ尾古墳群がある。陣ノ尾1号墳は6世紀末の径12m前後の円墳で、内部主体は長さ6.6mの複室の横穴式石室であった。この古墳は太宰府市の史跡に指定され保存されている。2号墳は横穴式石室であるが残りが悪い。そのほか、妙見古墳群を含めて未調査のため明確に古墳であると言い切れないものも含まれており、この地区の詳細は未だ明らかになったとは言えない。

さらに平野部に近い古墳としては、大宰府政庁の後背地や来木丘陵に後期の古墳が散在している。また、君ヶ畑古墳群でも同様に6世紀後半から7世紀にかけての古墳群がみられるが、群集墳という程までに群は形成されていない。

高雄地区にある葛蒲浦1号墳と下高尾古墳は、割竹形木棺を内部主体とする前期古墳で、その後かなり時期が下がって、6世紀前半から7世紀前半にかけて今王2号墳、池田古墳群、吉ヶ浦古墳群など古墳時代後期のいわゆる群集墳が形成される。

御笠川を挟んで対岸の丘陵上に位置する宮ノ本遺跡は、奈良・平安時代の墳墓群としても名高いが、方墳を中心とした3世紀後半から4世紀中頃にかけて古墳群が形成されている。その後の墳墓は奈良時代まで待たなければならない。

宮ノ本丘陵から南東1kmの微高地に位置する剣塚古墳群には、6世紀中頃の前方後円墳があり、

その真下に4世紀中頃～後半の方墳群が確認された。さらにその南東2.2kmには4世紀前半の最古級の前方後円墳である原口古墳が所在する。

参考文献

- 三野章『成屋形遺跡調査概要』福岡県教育委員会・エーゼイ株式会社 1968
 酒井仁夫ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XVII』福岡県教育委員会 1977
 酒井仁夫『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告IX』福岡県教育委員会 1977
 舟山良一『笹原古墳』大野城市文化財報告書第15集 大野城市教育委員会 1985
 太宰府市史 考古資料編 1992
 石松好雄ほか『太宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報』九州歴史資料館 1978
 森田勉『葛瀬浦古墳群の調査』太宰府町の文化財第1集 太宰府町教育委員会 1976

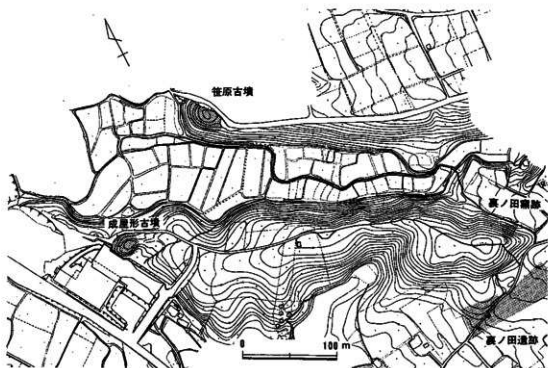


Fig. 2 成屋形丘陵周辺主要遺跡位置図 (1/4000)

3、成屋形遺跡の調査略歴

成屋形遺跡は今回を含め過去に7回の調査が行われた。過去の調査をまとめると次の通りである。以下調査年代順に概要を紹介する。

- (1) 1930年 10月 山本博 山本嘉蔵

小封土の河原石積竪穴式石室3基調査。甕棺2基確認。

A号……鉄剣1、細根鉄鏃30 B号……乳文鏡1 C号……珠文鏡1

(山本博 山本嘉蔵「福岡県成屋形の古墳について」『史淵』2 1930)

- (2) 1968年 8月11日～9月11日 福岡県教育委員会

エーザイ株式会社福岡支店発送センターの建設に伴う事前発掘調査

石蓋土壇1基 箱式石棺1基 古墳2基 竪穴住居2基

石蓋土壇……副葬品なし 赤色顔料床面に残存。

箱式石棺……副葬品なし 赤色顔料床面に残存。石棺横で弥生後期?土器片出土。

古墳……1号墳 径11.2mの単室の横穴式石室の円墳、5世紀末～6世紀初 細根鉄鏃3

2号墳 赤色顔料付着石材のみ残存。

竪穴住居……1号住居 約2.7mの方形プラン(弥生後期) ガラス製丸玉1、小玉2、黒曜石片

2号住居 2.7mの方形プラン(弥生後期) 黒曜石片

周辺からサヌカイト製のスクレイパー2個のほか黒曜石片、サヌカイト片を採集。

他に2号墳から東へ約40mの地点に古墳らしきもの1基、さらに南東約60m地点に径約20mの円墳1基が確認されている。前者はその後の調査で古墳ではないことが判明し、後者は位置的に今回報告する帆立貝式前方後円墳のことを示している可能性がある。

(三野章『成屋形遺跡調査概要』福岡県教育委員会・エーザイ株式会社 1968)

- (3) 1969年 2月～3月 福岡県教育委員会

エーザイ株式会社福岡支店発送センターの建設に伴う事前発掘調査

方形周溝墓2基 箱式石棺1基 竪穴式石室6基

帆立貝式前方後円墳(径40m、高さ3m)、前方部、石室確認。

短い羨道の横穴式石室。羨道閉塞部の前面にベンガラを詰まった土器器坏が置かれていた。

前方部に大形の朝顔形埴輪・馬形埴輪が据えられていた。前方部より須恵器甕2点出土。

(報告書未刊)

- (4) 1969年 10月30日～11月10日 福岡県教育委員会

エーザイ株式会社福岡支店発送センターの建設に伴う事前発掘調査

竪穴住居3基 7世紀後半～8世紀後半

(亀井明徳『成屋形遺跡 古代住居址発掘調査報告』福岡県教育委員会 1970)

- (5) 1972年 10月3日～10月6日 福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道太宰府インターチェンジ建設に伴う事前調査

箱式石棺 2基 旧石器・縄文遺物

(酒井仁夫ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XVII』福岡県教育委員会 1977)

(6) 1995年 3月6日～3月28日 太宰府市教育委員会

九州縦貫自動車道太宰府インターチェンジ拡幅に伴う事前確認調査

帆立貝式前方後円墳の本調査の事前確認調査 1969年調査分、葺石・埴輪確認。

(7) 1996年 10月11日～12月16日 太宰府市教育委員会

九州縦貫自動車道太宰府インターチェンジ拡幅に伴う事前調査

帆立貝式前方後円墳本調査。葺石、埴輪列検出。石室再確認。

以上が調査の概要であるが、1969年10月の福岡県教育委員会の調査が成屋形遺跡第4次調査と報告されていることから、それをもとに(1)を第1次調査、(2)を第2次調査、(3)を第3次調査、(4)

を第4次調査、(5)を第5次調査とし、今回報告する(6)は本調査(7)の事前確認調査のため第6-1次調査とし、本調査(7)を第6-2次調査とする。古墳群に限って言えば、今回の報告分は第5-1・2次調査ということになる。

その他に成屋形遺跡周辺では、昭和22(1947)年11月以前に果樹園造成で古墳が数基破壊されて石が放置され、その石の間よりその古墳の副葬品(刀子・矛・直刀・鋤造鉄斧・熊形鉄斧・ガラス玉等)が出土したとの記録がある。

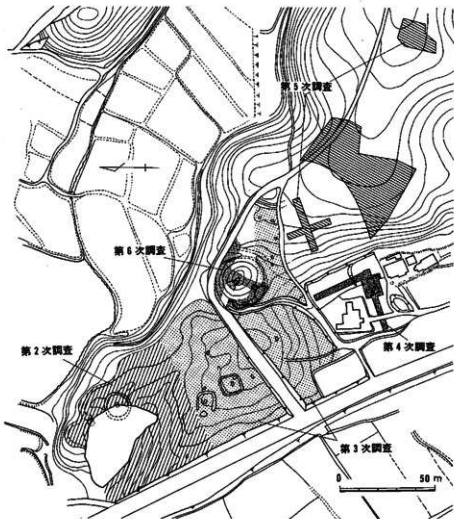


Fig. 3 成屋形遺跡調査地点及び旧地形復元図 (1/2000)

4、調査の成果

(1) 旧形と現況

現在の地形から古墳築造時の立地を述べるには、かなり困難であるが、九州縦貫自動車道太宰府インターチェンジ建設前の地形図や以前の調査測量図で旧形を知ることができ、それらをもとに古墳の立地環境を考えていきたいと思う。

成屋形古墳のある丘陵は、もともと南東から北西に延びる長さ約600m、最大幅約160m、最高点標高52mの丘陵で、その北西端の標高37m～32mのやや傾斜がなだらかになった付近に古墳群が形成されている。前方後円墳はその途中のやや突出した所であり、古墳の北側や南側は墳丘がそのまま丘陵斜面につながるような状況を示していることから、その方角からは測量値以上に大きな古墳に見えたに違いない。当時南東方向の丘陵側以外は周囲の平野を見渡すことができたであろう。

また、第3次調査当時の古墳周囲の状況は、雑木林に覆われ、西側県道から古墳の北側を通り、尾根伝いに続く道と南側の民家から古墳前方部に続く細い道が見られる程度であった。成屋形遺跡第2次、第3次調査の写真を見るとなだらかに下ってくる丘陵の森がやや平坦になる位置に古墳があることがわかる (Pl. 35～37)。

現在は、古墳西側の一部を削り地下げしてエーザイ株式会社福岡支店発送センターが建ち、南側も日本道路公団の建物が建ち、東側も古墳の一部を削って太宰府インターチェンジが建設され、この古墳だけが三角形をした飛地のように残された。太宰府インターチェンジ建設後も古墳周辺のみ雑木林のまま放置され、第6-1次調査を行うにあたって伐採したところ、26年ぶりにその姿を現した。

(2) 検出遺構

第6-1次調査は、調査の性格から前方部の確認と墳丘規模の確認が主であったため小規模なトレンチを設定したにすぎない。第6-2次調査では消滅を余儀なくされる範囲については全面調査を実施し、第6-1次調査で確認できなかった課題について若干のトレンチを設定した。各トレンチには次のとおり記号を付し、以下に解説を加える (Fig. 4)。

- A トレンチ・・・前方部 (第6-1次調査)
- B トレンチ・・・後円部南西裾 (第6-1次調査)
- C トレンチ・・・後円部、周溝南東部 (第6-1次調査)
- D トレンチ・・・後円部墳丘頂部盗掘痕 (第6-1次調査)
- E トレンチ・・・後円部東側道路拡幅部分 (第6-2次調査)
- F トレンチ・・・後円部墳丘頂部 (第6-2次調査)
- G トレンチ・・・石室とその前面 (第6-2次調査)

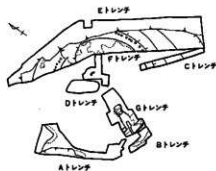


Fig. 4 第6次調査トレンチ位置図

【1】墳丘

古墳は周囲が削平されたこともあり、一見巨大な円墳のような様相をしているが、南西部にわずかな張り出し部を持つ帆立貝式前方後円墳である。

前方部・くびれ部 (Fig.5, Pla.4・5)

前方部は第3次調査時点ですでにその端部が、南側の民家から前方部に続く細い道によって破壊されていた。その後さらにエーザイ株式会社福岡支店発送センターの建設によって葦石が存在していなかった一部分が削平されたが、同社のご協力によって擁壁構造を一部改変することにより、同社の敷地に張り出すような形で辛うじて前方部の形状が判別できる程度に保存され現在に至っている。

雑木林伐採後、写真測量による地形測量を実施し、西側に張り出した部分が確認されたことから、その部分を中心にトレンチ (Aトレンチ) を設定することとした。また地形に残る段から第3次調査のトレンチの跡が確認されたこともあり、調査範囲を再調査するような形で前方部とくびれ部付近の確認調査を行った。その結果、両くびれ部と前方部北側を巡る葦石を検出した。

前方部の規模は、若干削平を受け、前方部からそのままならかに等高線を描いているため明確ではないが、葦石現存長2.5mを測る。先端の幅は削平により不明だが、くびれ部は後述するとおり葦石が明瞭に残存していたことからその幅は5.8mを測る。高さはくびれ部で0.6m、端部

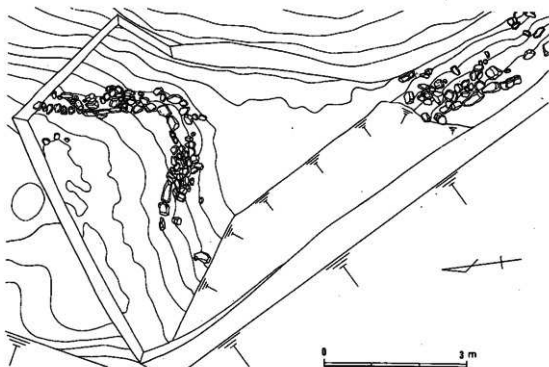


Fig.5 前方部実測図 (1/80)

で0.65mを測るが、旧地形がなだらかに下がり、前方部もそれに合わせて、前方部端がくびれ部より標高で0.3m低くなっている。

〈Ⅰ段斜面葺石〉(Fig.5, Pla.4・5)

前方部は第3次調査で葺石が転落した状態で検出され、葺石の巡ることが確認されていた。今回の調査ではその調査当時の状態で検出されたことから、正確な形状、規模を知る必要性から転落と判断できる石はすべて除去し、原位置を保つもののみ残すことにした。その結果、基底部を中心として葺石が原位置を保っていたため明確なくびれ部を確認することができた。

北側くびれ部から前方部にかけての葺石は基底石に10~45cmと大きさに差が見られるが、およそ20~30cmのやや小振りな石を用いている。北側コーナー部分は明瞭に折り曲げられ、前方部ではわずかに外方へ開き気味に並べられているようであるが、端部付近は葺石が消失しており、抜き取り痕跡も確認できなかった。なお、明確ではないが部分的に偏って同じ大きさの石が使われていることから、配石作業に何らかの区分があったと考えられる。また、葺石消滅部分には前方部のような等高線を描いているが、残存状況からその全てが前方部とは言い切れない。

南側くびれ部も同様の石材を用いているが残りが悪く、コーナー部分は前方部側に折り曲げられた基底石が1個のみ残り、後円部側に基底石が6個残っている程度である。基底石から上は不規則に積まれ残りも悪い。

後円部

〈Ⅰ段斜面葺石〉(Pla.23)

Bトレンチで検出された石は、Ⅱ段斜面葺石からの転落石もしくはⅠ段斜面葺石の上部分と考えられる。これを明確にするためにBトレンチを墳丘残存部際まで設定したが、Ⅰ段斜面葺石の基底部は検出されなかったことから、現状の地形を見る限りすでに残っていない可能性が高い。

Eトレンチ北側では墳丘裾を確認し、付近一帯で多量の石と埴輪片を検出したが、それらは墳丘裾より下がった平坦面を中心に散在し、ほとんどが上段の葺石と埴輪片から転落したと考えられるものであった。このような原位置を動いているものを除去していったが、明確に墳丘裾を巡っていると断定できるものはなかった。しかし、墳丘裾よりやや上方で転落石と異なり、墳丘に貼り付けたような状態で検出された石があり、一部に粘土のような土で固くしまった部分も確認された。墳丘裾の葺石の存在については今後の課題として残る。

なお、東側については削平され不明である。

〈Ⅱ段斜面葺石〉(Pla.11~13・18・19・21~23・29)

Ⅱ段斜面の葺石は今回の調査でC・E・Gの各トレンチで確認され、古墳を全周していることはほぼ確実とみられる。全体的に基底石として40cm前後の大きな石材を一様に使い、2段目からは基底石より小さな石材を用いている。詳細が観察できるEトレンチについて以下に詳述するが、一部攪乱で途切れていることから、その攪乱を境に便宜上北側と東側に分けて述べていく。

Eトレンチの北側葺石は、腐食土を含む表土を除去すると旧状を保っている葺石とテラスに転落した葺石が検出され、転落石はちょうど埴輪列で止まっている状況であった。やや粗雑であっ

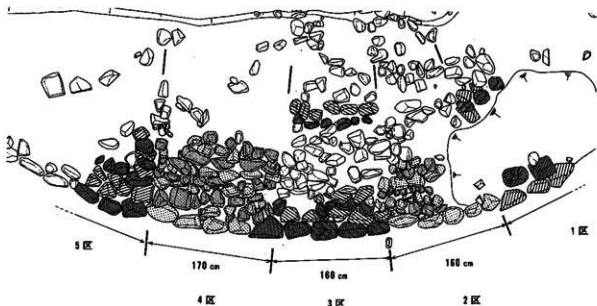


Fig. 6 Eトレンチ東側Ⅱ段斜面葺石区割り図 (1/50)

た東側葺石と異なり堅固なつくりをしている。北側葺石の基底石は35~50cmの大きな石を用い、その上の2段目から5段目までは30cm前後のやや横長の石材を用いている。6段目からは一部に大きな石が見られるものの20cm前後のやや小振りの石を横長に用いている。東側葺石に比べ全体的に均一した石材を横長に用い、安定感のある状態を残している。明らかに東側と北側ではその積み方に相違が見られることから、ちょうど攪乱で崩壊した部分に明確に分かれる箇所があったのかもしれない。

Eトレンチの東側葺石は詳細に観察すると約1.6m毎に大きさの若干異なる石材を使用していることがわかる (Fig. 6)。そのうち残りの良い約6.5mの間について見てみると、15cm前後の石材を中心に積み上げた区間と25cm前後の石材を積み上げた区間が交互に並んでいることが看取され、この範囲が5区に分けられることが理解できる。

これを北から順に1区から5区の名称を付し見ていくと、1区については残りが悪いが基底石の3個目までと4個目からは石の大きさと並び方が若干異なり、また2段目の石の大きさが30cm、34cmと大きめであることから、3個目の基底石までが1区と考えられる。上部に3段分確認できる。

2区は1区と異なり15cm前後の石を中心に整然と積み上げている。まず基底石は20~40cmと大きさの異なる石をやや不揃いに並べ、2段目は15cm前後の石を並べ、3段目はやや不揃いであるが10~15cmの石を積んでいる。4段目は10cm程の小振りな石を並べ、その上の5段目に20cm程のやや大きな石を積み、そして、6段目に15cm前後の石を積んでいる。7、8段目も不揃いだが20cm前後の石を積んでいる。3段目から5段目までは一見してその規則性ある積み方が理解でき、石の大きさから隣の3区との差は明瞭である。また、2区と3区の境界延長上のテラス部分には

長さ16cm、幅6cm、高さ10cmの平らな花崗岩があり、境界を示す石と考えられる。

3区は基底石に40cm前後の大きな石を用い、2段目に25~35cmのやや大きな石を積みんでいる。3段目と4段目はやや不明確だが、20~40cmと大きめの石が使われている。5段目より上は積み方が粗雑で残りも悪く、明瞭に段として捉えることはできないが、やや離れた上部で2段分が確認できる。

4区では5区との境界は15cm前後の石を1列に7段積み上げられ、その上にも直線的に葺石が見られる。基底石は35cm前後と3区より若干小さめの石を用い、2段目は15cm前後の小振りな石で基底石の間を埋めている。3段目も2段目の間を埋めている。そして、4段目から8段目までは、やや粗雑な積み方ではあるが15~20cmの石を積み上げている。9段目は約30cmと大きめの石を並べ、10段目は35cm前後のさらに大きな石を使用している。11段目は再び20cm程の石が積みまれている。3区は段をほとんど捉えることができないのに対し、4区はやや粗雑ながらも積み上げの段が確認できることからその違いは明確である。

5区の基底石は4区とさほど変わりがないが、2段目に25~30cmの石を用いているものの、一部が他の積み方と異なり石材の平坦面を描いているため、石を積み上げているというより貼り付けていると言った方が適当な状況を示している。そして、4区の境界に平行して25~30cmの石を1列に8段積み上げている。

5区の南側の基底石はきれいに残っているが、その上段の残りは悪く埴輪周辺のテラス部分に転落している状態で検出された石が、これに該当するものとみられる。同様に埴輪片も散在していることから、葺石の転落によって埴輪が崩壊し周辺に散在したと考えられる。また、基底石より埴輪側でも埴輪片が多く見つかるが、これは埴輪頂部の埴輪が転落してきたものと考えられる。

Cトレンチで確認された葺石は、Eトレンチと近接しているため、状況は殆ど同じである。トレンチのため区割りなど詳細は不明である。

Gトレンチの石室前面部の状況は、北側が残りが悪いため葺石と即断するには問題があるが、35~45cmの石を2~3段積み上げているものの基底石が未確認であるため詳しいことはわからない。反対に南側は保存状態も良好で高さ1.15m分がきれいに残っている。約9段分が確認でき、使用石材は10~35cmと差はあるが、平均的にみれば25cm前後のものを用いている。Eトレンチ北側葺石と同様に安定感のある積み方を示している。墓道部分は崩壊しているが27cm程の石が数個残存している。その南隣は整然と縦1列に10段積み、2~3段目と10段目は15cm前後の小振りの石を用いている以外は25~33cm前後の石を積み上げている。この列は前庭部右側壁の延長上に位置する。

さて、葺石と埴輪盛土との関係であるが、盛土の積み上げ状況から葺石に関連した層位はなく、埴輪盛土を完成させた後に葺石を積み上げていったと考えられる。東側の葺石は、上部になるに従って雑な積み方になり、転落していることから明確に上端部とわかる部分は確認できなかった。しかし、ちょうど葺石が途切れる辺りから、盛土が赤色土に1cm弱の小石を混ぜ突き固めたように固くしまっていたことから、この辺りから表面を固くし葺石は施さなかったものと考えられる。

つまり、葦石は基底石から墳頂部までの高さ2.9mのうち、高さ約1.9mの位置まで施されていたと推定される。

〈I段テラス埴輪列〉

(Fig.7~9, Pla.11・14~25)

Cトレンチで葦石の前面に小規模なテラスがあり、そこには埴輪列が巡る可能性が考えられた。それは原位置を移動しているものの、正位置を保った底部片が葦石近くに存在したことで、テラス部分が粘質土を固めて面を形成している可能性が考えられたことによる。

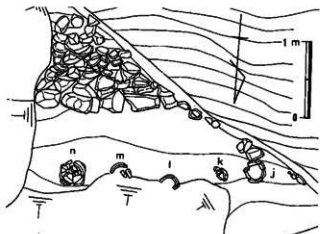


Fig.7 Eトレンチ北側I段テラス埴輪列実測図(1/50)

これらの状況を踏まえて設定したEトレンチでは、埴輪列は葦石と対応するように北側に5基、覆乱と削平部を挟んで南東側に9基が確認され、先述のCトレンチで約1基、そして石室前のGトレンチで9基が検出された。

さて、Eトレンチは先の葦石の項でも説明したように覆乱を挟んで北側と東側に分かれて残存している。ここでは調査時に東側の埴輪列北端から順に右回りに埴輪取り上げ記号を付けたため、報告もそのまま踏襲し、個々の埴輪に東側の埴輪列はa~i、北側の埴輪列はj~nの記号を与えて説明することとする。

Eトレンチ北側の埴輪列は葦石基底部の前面約63~86cmの位置に並び、埴輪の心々距離はj-kは51cm、k-lは62cm、l-mは60cm、m-nは64cmである。埴輪間の距離はj-kは22cm、k-lは推定36cm、l-mは34cm、m-nは32cmである。jは埴輪前面の平坦面が僅かに残り、削平を免れていた。I段目タガよりかなり下の底部付近のみ埋められていた。kは残りが非常に悪く、lとmも半分が墳丘と共に流出し斜面上に辛うじて残っている状態で検出された。n付近は表土除去後に大量の埴輪片が散乱し、他と違いすぐに基底部を確認できない程であった。また、nはやや前方に傾いていた。また、基底部内からは花崗岩の石が検出されたが、他で全く検出されてなく人為的かどうかの判断は困難である。

また、葦石と埴輪の間のテラスには厚さ8cmの灰黄褐色土が赤茶褐色土の地山の上にあつて、それが埴輪を安定させていたものと考えられる。埴輪を挟んだ反対側に関しては、削平されているためテラスの状況等は確認できなかった。また地山と判断した赤茶褐色土には葦石がのっているが、その土に砂利や礫を含んでいることから人工的に築いた可能性も捨てきれない。

北側埴輪列の設置方法は、埴輪と葦石の間に厚さ8cm程の灰黄褐色土を入れ埴輪を押さえている。埴輪列より外側は削平されており明らかにはできなかったが、埴輪の安定を考えると灰黄褐色土は埴輪を取り巻いてテラス先端まで存在したものと考えたい。

Eトレンチ南東側の埴輪列は葦石基底部から約90~110cmの位置に並び、埴輪の心々距離はa

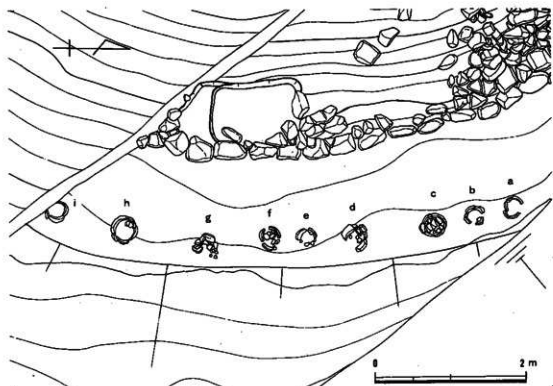


Fig. 8 Eトレンチ東側I段テラス埴輪列実測図 (1/50)

-bは53cm, b-cは54cm, c-dは106cm, d-eは64cm, e-fは50cm, f-gは86cm, g-hは110cm, h-iは93cmである。埴輪間の距離はa-bは29cm, b-cは29cm, c-dは73cm, d-eは30cm, e-fは26cm, f-gは60cm, g-hは75cm, h-iは62cmである。これらを見ていくと30cm前後の間隔とその約2倍の60~75cmと幅の広い間隔のものがあるが、gとhの間の方で見つかった埴輪が原位置からズレたものと考えられる。その他c-d間に1基、f-h間にもさらに2基の埴輪が存在した可能性がある。さらに後述するGトレンチでの状況もこれらとは異なっており、埴輪列の間隔に関しては全体を調査し検討をする必要があるだろう。a, b, cは全く原位置からの移動はなかったが、腐葉土のほほ直下で埴輪が確認され、a, bはタガよりやや下まで埋められていた。d, eは周囲の埋土の殆どが転落石を含んだ崩壊土で、僅かに埋められていた程度であった。fはタガよりやや下まで埋められていた。gは、かなり崩壊し、その出土状態から基底部ではない可能性も考えておく必要がある。hはタガ直下まで埋められ、安定した状態で出土。iは切り株の下で確認され、転落石除去後に安定した状態で確認された。この埴輪は道路拡幅部分から外れていたため現状のまま保存した。

また東側埴輪列の設置方法も北側と同様で、埴輪と葦石の間に5~10cmの赤茶褐色土を入れ、テラスを作り埴輪を押さえている。埴輪列の外側については土が流失し、不明確であったが、埴輪底部付近まで崩壊した埴輪片が散在していたため、内側と同じく10cm前後の盛土で僅かに押さえていた程度のものであったと考えられる。

なおGトレンチでは、確認調査のため保存を前提に調査を行ったため、きれいに円筒埴輪を確認できなかったが、9基が密集して並び、トレンチ際を除いた7基が240cmの間に並んでいる。円筒埴輪の直径は他と変わらず、およそ28cmを前後するよ

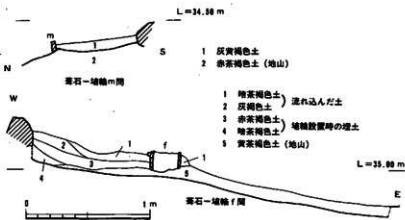


Fig. 9 I段テラス埴輪列設置状況土層観察実測図 (1/30)

うで、単純に計算すると埴輪は7cm前後の間隔で並んでいることになる。埴輪列はほとんどがタガの部分まで葦石の転落石や埴輪片で埋没していた。これもEトレンチの状況と同じく、埴輪列で葦石転落石が止まっている状態で検出された。

墳頂部 (Pla. 26)

墳頂部については道路拡張による削平は受けないが、葦石と墳頂部との関係を確認するためトレンチを設定し調査することにした。しかし、墳頂部には、北側から掘り込んだ幅2.5m、長さ6.5mの大きな盗掘痕と思われる攪乱があり、また、石室上の盛土の流出が著しいことから墳頂部の状況を把握することは困難なものと予想された。そこで残存状態が良好と考えられる部分にトレンチ (Fトレンチ) を設定し墳頂部の状況を確認することにした。

墳頂部は、僅かに平坦面を残し、薄い表土を除去するとすぐに固くしまっていた面があり、円筒埴輪の基底部と埴輪片が僅かに残存していただけであった。

なお調査前の観察で、黒色土の表土に混じるように20cm前後の石がかたまっている部分があったが、古墳に伴うものや別遺構と認めるものではなかった。

〈墳頂部埴輪列〉 (Fig. 10, Pla. 26)

表土除去後まもなく盛土にすわっている埴輪を4基検出したが、残りは悪く埴輪の底部付近がどうにか残っている状況であった。その中の1基については転落したものの可能性がある。埴輪の直径はI段テラス埴輪列のものとした違いは見られない。各個体間の隙間は3cm前後と近接して並んで出土している。埴輪の

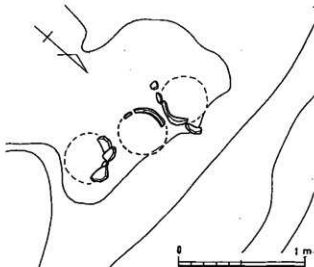


Fig. 10 墳頂部埴輪列実測図 (1/30)

周囲にそれらを押さえたような特別な構造は確認できなかったが、墳頂部が全体的に盛土に1cm弱の小石を混ぜ突き固めたように固くしまっていた。墳頂部は、今回削平を受けないこと、周囲の埴輪が盗掘や盛土の流出によって残存が期待できないことから、現地保存を重視し、確認のみで現地にそのまま埋め戻し保存した。

墳丘の築成 (Fig. 11~14, Pla. 6・33・34)

後円部の盛土の状況を知るために、盗掘坑を利用して調査を行ったのがDトレンチである。ここでは新たな掘削は避け、坑内に堆積した土だけを除去するに留めた。なおこの坑の外側で墳丘プランが乱れているのは、ここからの排出土がそのまま放置された結果と考えられる。

さて、そのDトレンチの土層観察の結果、堆積は概ね横方向で幅約20~40cmの厚さを有するもので、決して細かなものとは言えない。ただ人工的に積んだと見られる土の高さは約3mにも達し、かなりの規模の作業を想定することができる。なお地山と判断される明赤褐色粘土層の直上には旧表土と考えられる薄い淡灰色土層が確認できた。

またEトレンチでは、道路拡幅にかかる部分の後円部盛土状況や旧地形を調査した結果、東側は丘陵を分断し、周溝部分を作り出しているが、墳丘部分については若干平坦に整地している以外、地形をそのまま利用したと考えられる。盛土は底面近くに厚さ5~15cmの炭混じりの淡灰色土が一面に広がり、その層から焼土塊が検出された。部分的にしまっている層はみられるが規則性は感じられない。南側が平面的な層で築成されているのに対し、北側になるにしたがって層が細かく分かれている。そして、最終段階で暗茶褐色土を一気に盛り、墳丘を整形している。

【2】6 SX025 (Pla. 27)

前方部の直線上に位置する後円部東南裾のⅡ段斜面葦石基底より高い地点で、多くの円筒埴輪片が散在している箇所が確認された。そこには墳丘盛土のかなり内部まで埴輪片が検出され、墳頂部の埴輪や裾まわりの埴輪の転落と考えるには不自然な状態であった。その埴輪片を除去すると1.4×0.8m、深さ0.2mの土坑状遺構が検出され、埋土は炭混じり暗黄赤褐色土で構成されていた。土坑上面には葦石が見られず、土坑の周囲は葦石が取り囲んでいるようにも見える。ただ葦石の遺存状況が悪いため偶然の結果とも考えられる。また、埋土中からは焼土塊が多く見つかったが墳丘断ち割り後、墳丘底面近くに炭混じりの淡灰色土が一面に確認され、その延長上にこの遺構があることから、焼土塊は土坑掘削から埋め戻しに際して埋土中に混入したものと考

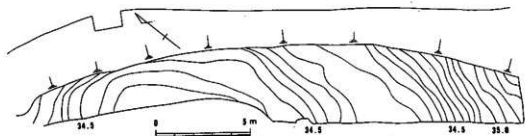
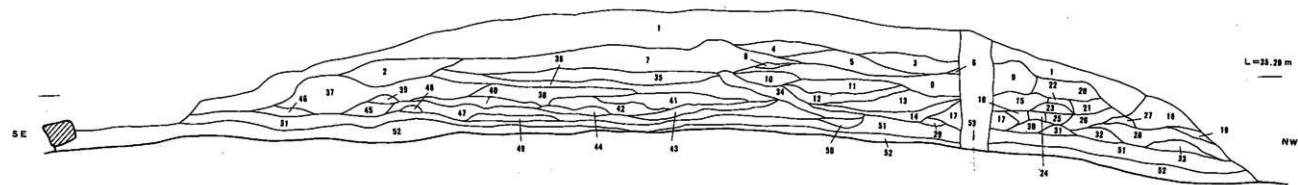
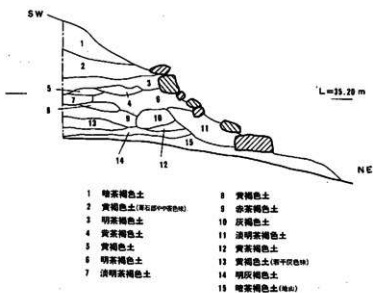


Fig. 11 墳丘盛土前旧地形図 (1/200)



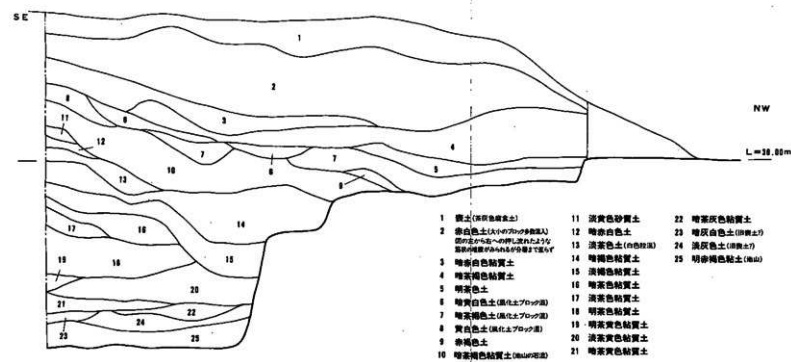
- | | | | | | |
|-----------------------|------------------------|----------------------|------------------|----------------------|---------------|
| 1 暗茶褐色土 | 11 黄褐色土(やや黄褐色を帯び、しよって) | 21 暗灰茶褐色土(しよって) | 31 明灰褐色土(ややしよって) | 41 やや暗い黄茶褐色土(ややしよって) | 51 淡灰土(砂質) |
| 2 やや明るい暗茶褐色土 | 12 黄茶褐色土(淡褐色を帯び、しよって) | 22 明茶褐色土 | 32 灰茶褐色土(しよって) | 42 黄味がかった茶褐色土 | 52 黄褐色土(やや暗い) |
| 3 淡黄褐色土(少砂を帯び、しよって) | 13 茶褐色土(淡褐色を帯び、しよって) | 23 明黄褐色土 | 33 明黄褐色土 | 43 灰茶褐色土 | 53 木の腐れ層 |
| 4 淡黄褐色土(ややしよって) | 14 淡黄褐色土 | 24 灰黄褐色土(淡色を帯び、しよって) | 34 暗黄褐色土(しよって) | 44 灰黄褐色土 | |
| 5 茶褐色土(やや黄褐色を帯び、しよって) | 15 反黄褐色土 | 25 暗黄褐色土 | 35 明茶褐色土 | 45 灰茶褐色土(ややしよって) | |
| 6 黄茶褐色土(ややしよって) | 16 黄褐色土(少砂を帯び、しよって) | 26 明灰褐色土(しよって) | 36 淡黄褐色土 | 46 暗灰白土 | |
| 7 黄褐色土(淡褐色を帯び、しよって) | 17 淡灰土 | 27 暗灰茶褐色土(しよって) | 37 赤黄褐色土 | 47 赤黄褐色土(ややしよって) | |
| 8 赤黄褐色土(しよって) | 18 暗黄褐色土(ややしよって) | 28 暗灰茶褐色土 | 38 灰黄褐色土(ややしよって) | 48 黄褐色土 | |
| 9 黄茶褐色土(淡褐色を帯び、しよって) | 19 反黄褐色土 | 29 暗黄褐色土(砂質) | 39 黄味がかった黄褐色土 | 49 48と同じ | |
| 10 反黄褐色土(淡褐色を帯び、しよって) | 20 淡明黄褐色土(砂質) | 30 暗赤黄褐色土 | 40 やや明るい赤黄褐色土 | 50 反黄褐色土(砂質) | |

Fig. 12 Eトレンチ後部土層観察図 (東から 1/35)



- | | |
|--------------------|---------------|
| 1 暗茶褐色土 | 8 黄褐色土 |
| 2 黄褐色土(暗色を帯び、しよって) | 9 赤黄褐色土 |
| 3 明茶褐色土 | 10 反黄褐色土 |
| 4 黄茶褐色土 | 11 淡明黄褐色土 |
| 5 黄褐色土 | 12 黄茶褐色土 |
| 6 明茶褐色土 | 13 黄褐色土(やや暗い) |
| 7 淡明黄褐色土 | 14 明灰褐色土 |
| | 15 暗茶褐色土(砂質) |

Fig. 13 Eトレンチ後部土層観察図 (南東から 1/35)



- | | | |
|---------------------|---------------------|----------------|
| 1 黄土(淡黄色を帯び、しよって) | 11 淡黄赤粘質土 | 22 暗茶黄色粘質土 |
| 2 赤白土(少砂を帯び、しよって) | 12 暗灰白土 | 23 暗灰白土(砂質) |
| 3 赤黄褐色土(少砂を帯び、しよって) | 13 淡黄赤土(少砂を帯び、しよって) | 24 淡灰土(砂質) |
| 4 暗灰白土粘質土 | 14 暗黄赤粘質土 | 25 明赤黄赤粘質土(砂質) |
| 5 明黄赤土 | 15 淡黄赤粘質土 | |
| 6 暗灰白土(少砂を帯び、しよって) | 16 暗黄赤粘質土 | |
| 7 暗黄赤土(少砂を帯び、しよって) | 17 淡黄赤粘質土 | |
| 8 黄白土(少砂を帯び、しよって) | 18 明黄赤粘質土 | |
| 9 黄褐色土 | 19 暗黄赤粘質土 | |
| 10 暗黄赤粘質土(砂質) | 20 淡黄赤粘質土 | |
| | 21 暗黄赤粘質土 | |

Fig. 14 Dトレンチ後部土層観察図 (北東から 1/35)

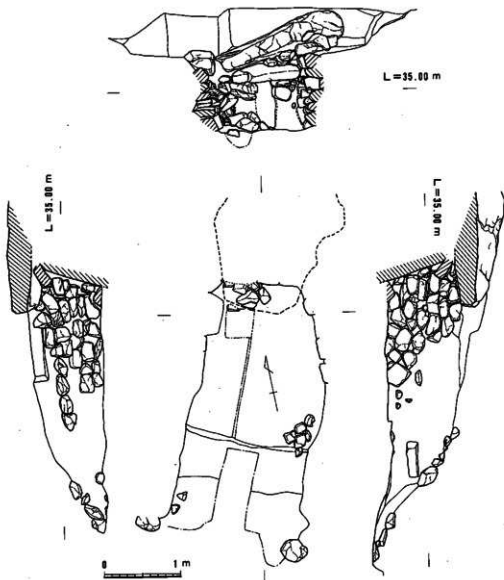


Fig. 15 石室前庭部実測図 (1/50)

ておきたい。つまり、円筒埴輪設置の事実是否定できないが、炭混じり暗黄赤褐色土と円筒埴輪は全く関係がないものと考えられる。

【3】石室 (Fig. 15~18, Pla. 28~31)

石室の位置は、第3次調査の成果が未報告のため『太宰府市史』に使用されている写真をもとに現地踏査を行い、調査区を設定した。作業開始間もなく、写真に見える石室らしき大石(天井石)が見えはじめ石室の位置は確認された。また、周囲の墳丘盛土が明黄褐色土に対しこの大石の西側のみ方形形状で暗茶褐色土のプランが検出され、その埋土を掘り下げていくと床面近くで20 cm前後の花崗岩塊石がいくつか見られ、さらにそれを除去すると厚さ1~2 cmの真砂土が敷かれ

ていた。この真砂土は閉塞石と前庭部両側壁直前で終わっていることから、真砂土が敷かれている範囲が第3次調査の範囲であることが確認された。

今回の調査は、石室位置の確認のための調査であったため石室内部の調査は行わず、第3次調査区域と石室前面を調査するに止めた。

〈内部主体〉

石室は全体の調査を行っていないため明確なことはわからないが、南南西に開口している横穴式石室である。玄室は天井石を確認した範囲で幅1.7m、長さは1.8mあり、長さに関しては全てを検出していないため、さらに大きいものと推測される。そして、玄室部分の天井が前庭部と同じ高さで続いていると推測される。

また、天井石は前庭部に向かって約0.6m突き出している。天井石の盛土を覆っていた表土中から小型手捏ね土器が出土した。墳頂部に置かれていたものが転落したのであろう。また、主体部上面のトレンチには掘り方と考えられるプランは確認されなかった。

〈閉塞部〉

閉塞部は、中央に閉塞石として玄室側に17.2度傾いた高さ80cm以上、幅約57cmの花崗岩を用いている。その両側は閉塞石検出段階で石組み等は確認されなかったが、ピンボールで閉塞石両側の埋土内部を確認したところ、その埋土から10cm前後の所で石に当たることからその位置に袖石らしき石材が存在することを確認できた。しかし、その詳細については閉塞部崩壊の危険があったため、発掘し確認することは行わなかった。

閉塞石の上には90×30cmの柱状の花崗岩が重くのしかかり、西側から23cmの位置で亀裂が生じている。この石はその位置や形状から榴石と推測され、当初、閉塞石上にあったものが天井石が傾いたことにより前に押し出され一部に亀裂が生じたと考えられる。

また、閉塞石前面では30cm前後の花崗岩塊石を数個検出したが、閉塞に関係するものか天井石が傾いた際の転落石なのか断定することはできなかった。また、この付近まで第3次調査の痕跡

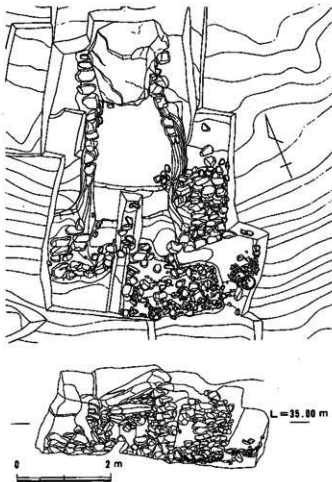


Fig. 16 石室前面実測図 (1/80)

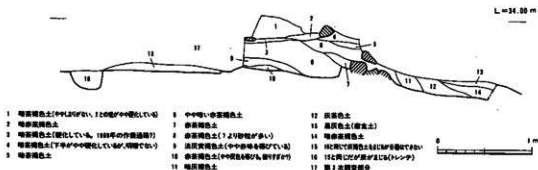


Fig. 17 石室前庭部及び墓道土層観察図 (1/40)

が確認できたことから、その調査後の埋め戻しの際と一緒に埋め込まれた石も含んでいる可能性も考えられる。しかし、閉塞石に接して確認された塊石は閉塞に伴うものと考えられる。

〈前庭部〉

前庭部(天井石が架されていないため本報告ではこの用語を用いる)はハの字形に開き、主軸はN-12°5'-Eを向いている。石組みがある範囲で左側壁長1.95m、右側壁長1.4m、主軸線で約1.9m、幅は玄室側が一番狭くて1.05m、最大幅は1.55m、高さは左側壁が0.9m、右側壁が1.0mを測る。右側壁の積み方が左側壁に類似していることから、当初は左右対称で両側壁とも同様の長さであったと考えられ、最大幅も約2.1mあったと推定される。石材は全体として15×30cm前後の花崗岩を用いている。

左側壁の石組みは6列5段積みで西側へ徐々に低くなっていく。石材の積み方は隙間が開いていることから少々粗い感じも受けるが、最下部から約80度というやや外開きの勾配で整然と積み上げ、いわゆる重箱積みの様相を示している。

右側壁は床面から50cmのレベルまで雑然と積まれているが、その上3段は整然と重箱積みされている。全体が90度に近い僅かな外開きの勾配で積まれている。

〈墓道〉

石組みが途切れた所から続く表掘りの部分を、前庭部と区分し墓道として報告する。葺石基底石まで約1.7mを測る。前回調査されていたため床面構造の違い等は不明である。右側壁側の床面の一部に敷石6個が確認されたが、他の地点で全くその痕跡すら確認されなかったことから、全面に敷石があったかの判断は難しい。

墓道の入口部分では以前の調査範囲が明確でなく慎重に作業を進めた。まず、表土除去後すぐに墓道上のみに20cm前後の石が集積していた。閉塞石もしくは追葬時にかき出したものではないかと考え、慎重に検討していった結果、葺石ラインより集石がはみ出ていること、比較的新しい腐植土上の上のっている石も多いことなどから、これらの石は第3次調査時のものもしくは新しい集石であると判断した。

そして、墓道の入口つまり葺石が途切れる部分について、次の所見が得られた。

- ・葺石基底石が入口部分のみ切れている。
- ・入口両側の葺石がきれいに積まれている。前庭部右壁の延長上にある。

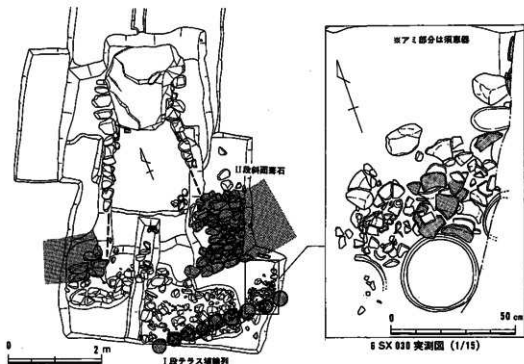


Fig. 18 石室前面配置図及び6 SX030実測図 (1/80, 1/15)

- ・墓道埋土に壇輪片がほとんど含まれない。
- ・墓道入口の両壁（黄灰土）が埋土（黄色土）と土質が異なる。
- ・入口部分に葺石の転落石が多い。
- ・前庭部埋土最下面が黄灰褐色土で、葺石上に流れ込んでいる崩壊土に見られるものと同様である。
- ・前庭部に残したベルト土層中の硬化面は葺石斜面ラインよりはみ出る。
- ・石室に向かって右壁の葺石下でみられた方形状の石は、葺石の下になるため葺石が置かれる前に設置されていたということになる。

下2つで述べた硬化面は、第3次調査当時の写真などから調査中に踏み固められたものとみられる。

【4】6 SX030 (Fig. 18, Pla. 32)

須恵器甕と無蓋高坏各1個、土師器高坏約10個体分が、石室前面にあたる墳丘裾近くで壇輪列の背後に集中して出土した。この一群をここでは6 SX030と呼称して報告する。

須恵器無蓋高坏は、若干移動はしているものの坏部がそのまま割れたような位置関係で出土した。土師器高坏は南側を中心に脚部が集中し、破片は円筒壇輪内まで散らばっているものの出土レベルはテラス面より僅かに浮いた状態であるが、ほぼテラス面の上に散らばっていると言え、墳丘側から壇輪列に向かって傾いたり、倒れたりしている。土師器高坏破片の下には葺石の転落はみられなかった。しかし、須恵器甕片のみ転落石上から検出された。

須恵器の一部がトレンチ壁際にみられることから、Gトレンチのさらに南東にもこの土器集中

範囲が広がるものと推定される。

【5】周溝

周溝は調査前でも一見してわかる状態を保っていたが、周囲が削平され南東側に周溝が残り、その他では確認できない状況になっていた。しかし、第3次調査当時の遺構図には南東の丘陵尾根を長さ約35mにわたって切断するように巡っている様子が描かれ、その他の周囲は旧地形のままであることから、北側には当初から周溝は巡っていなかったと考えられる (Fig.55)。また、周溝の南東丘陵上では、第3次調査で竪穴式石室が4基確認されている (Fig.56)。

今回周溝は、Cトレンチで幅約1mとEトレンチの幅約4mの計約5m分を調査したにすぎない。周溝は丘陵をなだらかに掘り込んでいるため明確にその幅を捉えることはできないが、埴輪列までの幅は約10m、深さは丘陵端から約1.2m、埴輪列から約0.75mである。周溝の最深部より埴輪側に埴輪片が集中していたが、埴輪設置後かなり風雨に晒されていたとみられ埴輪片の風化が目立っていた。

(3) 出土遺物

【1】土器

6 SX030出土土器 (Fig. 19~21, Pla. 43・44)

須恵器

無蓋高坏 (1) 口径17.5cmで坏の深さは中心で9.2cmを測る。口縁端部内面には僅かな沈線が巡り、端部はナデで丸く仕上げている。体部には凹線によって作り出された突帯が2条巡り、その間に拂描き波状文 (10本) が施されている。この文様体をまたぐように装飾つまみと粘土粒を付けている。この装飾つまみは波状文を描いた後、下方を貼り付け輪を作りながら上方を貼り付けている。底部外面の下方の突帯付近までヘラ削りを施している他は内外面とも回転ナデを施している。欠損しているが、僅かに残った脚部は0.6~1.2cmの幅の透かしを4方に開けている。内面には焼成時に付いたとみられる付着物がみられる。胎土は0.1cm程の砂粒を含むがよく精製されており、焼成は良好で、外面が黒灰色、内面が黄灰色を呈している。

直口壺 (2) 口径18.6cmに復元できる。口頸部は直線的に伸び、端部外面は外方につまみ出され、口縁上面は平坦面を成す。調整は内外面ともヨコナデで、胎土は0.1cm未満の砂粒を少量含むが、精製されている。焼成は良好で、灰黄色を呈する。



Fig. 19 6 SX030出土土器実測図1 (1/3)

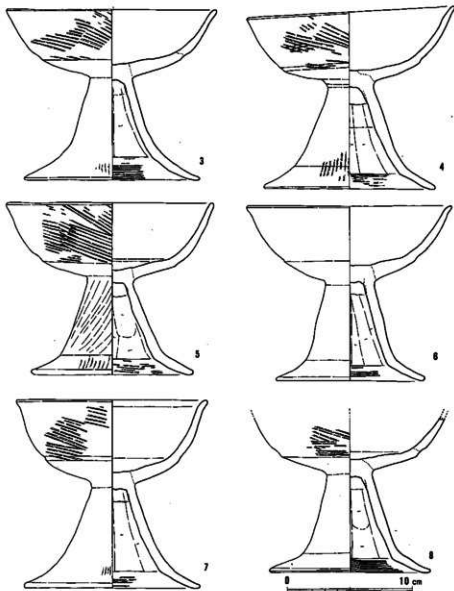


Fig. 20 6SX030出土土器実測図2 (1/3)

土師器

高坏 (3~8) 僅かな違いはあるがすべてにおいて共通した作りで、坏部が残存するものは、坏部中位外面に口縁部分との接合痕跡と考えられる凹線が巡っている。口縁端部は僅かに外反している。坏部外面の調整は凹線より上部が粗いナメハケのあと簡単にナデを施し、下部がヨコナデされている。内面はほとんど風化している。脚部外面はヘラ工具のようなものでナデられ、端部近くにタテハケが僅かに確認できる。脚部内面は明瞭な屈曲を挟んで、上部はヘラ削り、屈曲以下はヨコハケのあとナデを施している。また、坏部と脚部が接続する内面には僅かに段が付くが、最後に粘土を押し詰めて整形した痕跡であろうか。胎土は0.2cm未満の砂粒を含み、焼成は不良で、色調は黄茶色を呈する。個別の特徴については個々に示す。

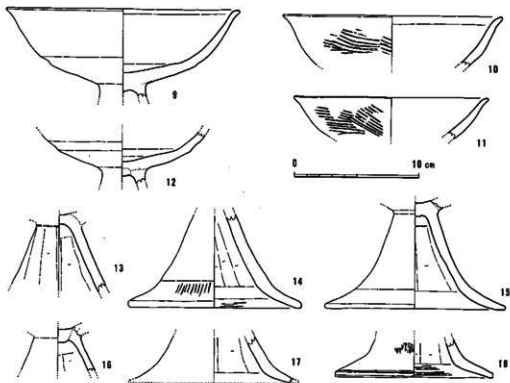


Fig. 21 6SX030出土土器実測図3 (1/3)

3は口縁部、脚部とも一部欠損しているが、口径16.9cm、器高13.75cm、脚部底径14.1cm、坏の深さ4.45cmに復元できる。4は一部欠損はあるもののはほぼ完形で、口径16.75cm、器高14.3cm、脚部底径14.2cm、坏の深さ4.4cmを測る。口縁部は全体が傾いている。坏部中位は接合部分で破損していた。坏部内面はヨコナデされている。5も一部欠損はあるもののはほぼ完形で、口径16.65cm、器高13.8cm、脚部底径13.0cm、坏の深さ5.4cmを測る。口縁端部はほとんど外反せずに立ち上がっている。脚部の屈曲は内外面とも他に比べ明瞭で、屈曲上部外面は右上がりに工具によるナデが明瞭に確認できる。また、全体の約1/4が一次焼成で黒灰色を呈し、坏部下部外面に赤色顔料が残存している。坏部内面は風化で部分的にしか確認できないが、ヨコナデを施しているようだ。6は坏部が1/4しか残っていないが、脚部はきれいに残る。復元口径16.5cm、器高14.2cm、脚部底径11.8cm、坏の深さ4.8cmを測る。脚部中位がやや膨らんだ形状をしている。口縁部近くの外面に赤色顔料が付着している。7は坏部が1/2程欠損している。復元口径15.4cm、器高15.2cm、脚部底径14.2cm、坏の深さ5.85cmを測る。坏部は深く、やや内湾気味に立ち上がり、口縁端部が外反する。また、坏部外面底部付近から脚部外面そして脚部内面屈曲部にかけて、赤色顔料が残存している。8は口縁部が欠損しているが、それ以外はほぼ残っていて、脚部底径12.9cmを測る。坏底部外面と脚部上部に僅かに赤色顔料が残存している。9は坏部と僅かに脚部が残っているのみで口径18.8cm、坏の深さ5.1cmを測る。坏部は他より外開きで、端部は僅かながら外反する。内面はヨコナデで、外面は風化が著しく調整は確認できないが、赤色顔料は凹縁付近に残存している。10は口縁部が2/3程残存し、下部は丁度坏部中位の凹縁部分で欠損していて、

口径17.7cmを測る。外面の一部が一次焼成の段階で黒灰色を呈している。外面と内面口縁端部に赤色顔料が残っている。内面調整は部分的にナデが残る。11は1/7程しか残存していないが、復元口径15.6cmを測る。一次焼成で一部が黒灰色を呈している。12は坏部の下部で内外面共にナデのあとに僅かに赤色顔料を残している。13は脚部上部で、上部部に幅0.5cm程の坏部剥離痕が通っている。14は脚部で1/2が残存し、脚部底径は14.0cmに復元できる。外面に僅かに赤色顔料が残る。15は脚部で1/5が残存し、脚部底径は14.5cmに復元できる。外面は赤色顔料のような痕跡もみられるが明確にはわからない。16は脚部上部の製作工程がわかる破片で、脚部が粘土を輪積みして、2.5cm程の穴を粘土で詰めている。17は脚部屈曲部分。18は脚部端部で1/4程残存し、底径は12.7cmに復元できる。端部外面は僅かな段が残っている。

後円部表土出土土器 (Fig. 22, Pla. 44)

須恵器

甕 (1~3) 1, 2は外面が格子状叩き、内面には同心円当て具痕が残る。胎土は砂粒を少量含み、色調は内外面とも暗灰色を呈している。3の外面は平行叩き、内面はナデと考えられる。胎土は砂粒を少量含み、色調は内外面とも灰色を呈しているが、一部外面が黒灰色を呈する。

弥生土器

複合口縁壺 (4) 口縁屈曲部である。胎土は0.2cm前後の砂粒を含む。焼成は不良で、色調は黄白灰色を呈し、表面はかなり風化している。

土師器

甕 (5) 内外面とも細かいハケが施されている。胎土は0.1cm前後の砂粒を含み、色調は黄灰色を呈している。

小型手捏ね土器 (6) 口縁部が欠損しているが、底径は3.15cmで現存高4.2cmを測る。底部はつまみ出すように作り出され、そのナデ痕跡が明瞭に残る。内面は左回りにナデられている。胎土は0.1cm前後の砂粒を僅かに含み、焼成は良好で色調は黄灰色を呈する。

坏 a (7) 口径13.0cm、器高2.35cm、底径9.0cmを測る。口縁部はヨコナデで、内面底部はナデ、底部外面は糸切りである。胎土は僅かに細砂粒を含み、焼成は良好で、色調は黄白灰色を

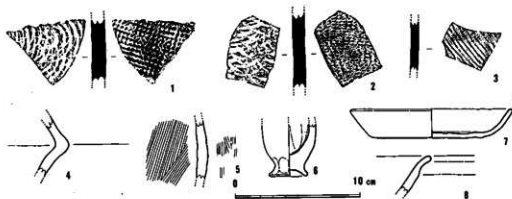


Fig. 22 後円部表土出土土器実測図 (1/3)

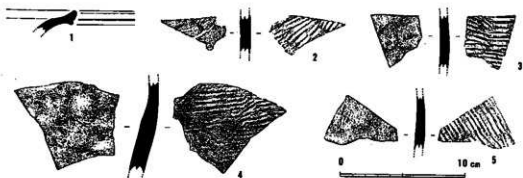


Fig. 23 前方部・くびれ部出土土器実測図 (1/3)

呈する。XVII期、13世紀前半～中頃。

(8)は口縁端部を強くナデで、外反させている。しかし、小破片のため器種等は不明。胎土は0.1cm未満の細砂粒を少量含み黄茶色を呈している。

前方部・くびれ部出土土器 (Fig. 23, Pla. 44)

須恵器

甕 (1～5) 第3次調査トレンチの再調査のため、遺物は須恵器しか残っていなかった。出土地点はくびれ部付近である。1は甕の口縁部である。口縁端部はヨコナデされ丸味をもち、端部外面は僅かに下方につまみ出し、凹線状を成している。焼成は良好で、外面は黒灰色、内面は明灰色を呈している。2～5は甕の体部である。全てが小破片のため形状はわからないが、調整は外面が平行叩きで、内面はナデを行っている。焼成は全て良好で、色調は2は内外とも明灰色、3は外面暗灰色、内面明灰色、4は外面黒灰色、内面灰黄色、5は外面暗灰色、内面暗灰黄色を呈する。4のみ叩き痕が弱く器壁が厚い。底部付近か。

また、第3次調査で出土した小型甕と接合する破片が1片出土している。

周溝出土土器 (Fig. 24, Pla. 45)

須恵器

高坏 (1) 高坏の脚部である。底端部が僅かに欠損する他はきれいに残る。底径10.1cm、現存高5.8cmで、三方に長方形の透かし孔が開いている。調整は全て回転ナデで、端部は屈曲して

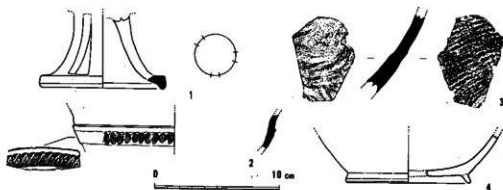


Fig. 24 周溝出土土器実測図 (1/3)

いるが丸く仕上げられている。胎土は僅かに細砂粒を含む。焼成は良好で、色調は外面が灰黄色で一部黒灰色、内面は黒灰色を呈する。

無蓋高坏（2） 坏部の文様帯部分である。1/5が残存し、中央突帯部分で径16.3cmに復元できる。中央部は突帯状につまみナデを行い、段差を付けて文様帯を作り、そこに襷掻き波状文を施している。口縁部はナデられている。胎土は細砂粒を少量含み、色調は外面が黒灰色、内面は灰黄色を呈する。

甕（3） 外面に平行叩き、内面に同心円当て具痕が残るが、風化が著しく明瞭ではない。外面は灰黄色、内面は淡灰色を呈する。

土師器

坏c（4） 口縁部は欠損しているが、その他は約1/4が残存し、底径11.0cmに復元できる。やや外開きの高台が付く。胎土は0.1cm前後の砂粒を含む。焼成は不良で黄白灰色を呈する。

後円部盛土出土土器（Fig. 25, Pla. 45）

弥生土器

複合口縁壺（1～7） 全て口縁部である。胎土は0.2cm前後の砂粒を含む。焼成は不良で、風化が著しく表面は殆ど残っていない。色調は1、2がやや赤味のある茶色を呈する他は黄灰色を呈する。1、2は内外面ともヨコハケのような横線が残る。3、5は屈曲後すばまった後、端部が膨らんでいる。風化が著しいが、内面屈曲部に僅かに細かいハケ目が残っている。4は端部のみ。6は内面屈曲部に細かいナメハケが残っている。7は屈曲が目立ち、内面屈曲部が沈線状になっている。

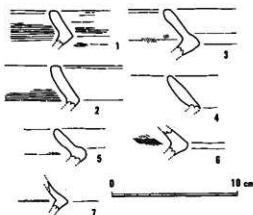


Fig. 25 後円部盛土出土土器実測図(1/3)

焼土塊

墳丘盛土の最下層近くの淡灰色土から出土。最大長約5cm、幅約3cmで、その他は3cm前後の大きさである。色調は黄灰色～茶黄灰色で一部黒灰色を呈する。全体的にヒビが入ったように風化し、何かの形を成しているようなものではなく、表面が残っているようなものも見られない。6SX025からも全く同様のものが出土している。

後円部表採土器（Fig. 26）

須恵器

甕（1） 外面は平行叩き、内面は同心円当て具痕が残る。胎土は細砂粒を少量含み、焼成は良好で、外面は灰褐色、内面は黒灰色を呈する。



Fig. 26 後円部表採土器実測図（1/3）



Fig. 27 普通円筒埴輪口縁端部の形態

【2】埴輪

今回の調査では円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の二種類しか出土していないが、破片が多くどちらの埴輪か判断が困難なものも多く、明確に円筒埴輪とわかるものを川西宏幸が呼称した名称を用いて普通円筒埴輪と呼び¹⁾、どちらとも判断がつかないものを円筒埴輪とし、報告していく。

普通円筒埴輪については口縁部の形態によって7分類でき、これに従って以下の報告を進めていく (Fig. 27)。

- 1類・・・口縁形態は端部外面が強くナデられ凹線状になるもの。
- 2類・・・端部が短く外反するもの。
- 3類・・・端部上面が平坦で、外面が僅かに突出しているもの。
- 4類・・・殆ど外反せず端部が平坦で、直口縁のような形態をするもの。
- 5類・・・殆ど外反せず端部が丸味があるもの。
- 6類・・・外反せず端部に向かって細くなるもの。
- 7類・・・僅かに外反しながら端部に向かって細くなるもの。

I 段テラス埴輪列出土埴輪 (Fig. 28~31, Pla. 46・47)

14基の円筒埴輪が原位置を保ち、そのうち13基を取り上げたが上部は全て欠損している。なお、実測図の右図は設置状況における透かし孔等の位置関係を示し、上が墳丘側である。

円筒埴輪 (1~13) 1は埴輪列aのもので、底部は欠損しているが、調整具合いからほぼ底部に近い部分と考えられる。直径の4/5が残存し、胴部最大径27.1cm、設置面は径24.9cmに復元できる。タガは幅2.0cm、器表からの高さ0.9cmを測り、見た目にはやや小さい感じを受ける。調整は内外面ともタテハケで内面底部付近に部分的にナデが行われている。胎土は0.1cm前後の白砂粒を含み、焼成は良好で色調は黄灰色を呈している。2は埴輪列bのもので、底部の1/2が残存し、胴部径25.4cm、設置面の径26.7cmを測り、残っている限りでは底部が大きい。調整は内外面ともタテハケであるが、外面は底部より2.5cmまではタテハケは施されず、軽くナデた程度で終わっている。内面はやや雑なタテハケが施され、その後部分的に施していることから凸凹した感じになっている。また底部はきれいに残るが、底部側面が剥落している。そして、ちょうど敷板または土台の端で成形を行ったのか底部の平坦部から粘土がややみ出している。胎土は0.1~0.2cmの白砂粒を含み、焼成は良好で色調は黄灰色を呈している。3は埴輪列cのもので、直径は残り胴部最大径28.8cm、設置面の径26.9cm、タガは幅2.5cm、器表からの高さ1.3cmを測る。円形透かし孔が2箇所ある。下部は外面から内面に下がるように欠損している。調整は内外面ともタテハケで、タガが接合する内面は僅かにナデられ、タテハケがうっすら消えているところが

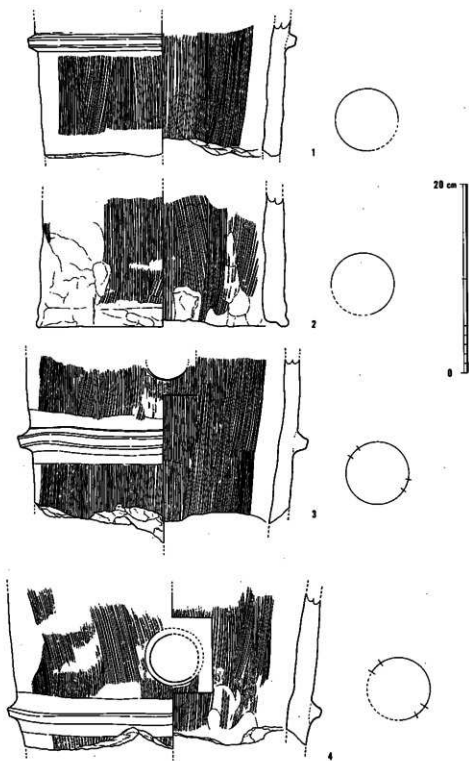


Fig. 28 I段テラス埴輪出土埴輪実測図1 (1/4)

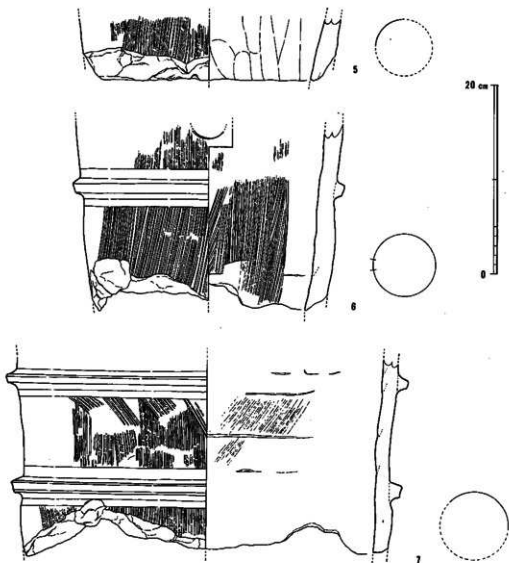


Fig. 29 I段テラス埴輪列出土埴輪実測図2 (1/4)

ある。胎土は0.1cm前後の白砂粒を含み、焼成は良好で色調は黄灰色を呈している。14基中最もしっかりした円筒埴輪である。4は埴輪列dのもので、底部はかなり欠損しているが、直径の3/4が残存し、胴部最大径33.0cm、設置面の径29.6cmに復元できる。器壁が14基中最も厚く最大幅2.3cmを測り、重量感がある。タガは上下が特に強くナデられ、タガの粘土を広く延ばし幅2.8cm、器表からの高さ1.2cmを測る。円形透かし孔が2箇所残り、共に右回りにヘラ削りされている。胎土は0.1cm前後の砂粒を含み、焼成はやや軟質で色調は黄灰色を呈している。5は埴輪列eのもので、直径の1/4が残存し、胴部最大径27.6cm、設置面の径26.6cmを測る。底部は外面を剥ぎ落とすように欠損している。外面はタテハケ、内面には強いナデが施されている。胎土は0.1cm前後の白砂粒を含み、焼成はやや軟質で色調は黄灰色を呈している。6は埴輪列fのもので、胴部最大径28.1cm、設置面の径24.7cm、タガは幅2.1cm、器表からの高さ0.9cmを測る。内外面と

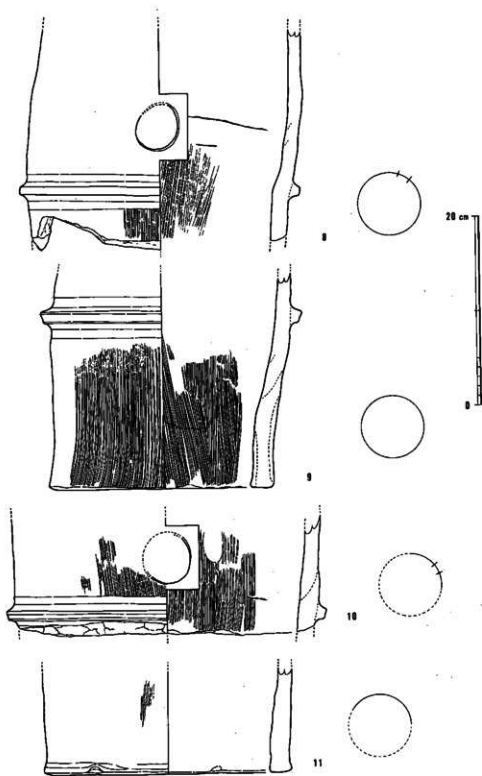


Fig. 30 I段テラス地輪列出土地輪実測図3 (1/4)

もタテハケで円形透かし孔が1箇所残っている。タガはきれいにナデきれず、下部の接合部分が明瞭に残っている。底部は外面から内面に下がるように欠損し、かなり凸凹になっている。胎土は0.1cm前後の白砂粒を含み、焼成はやや軟質で色調はやや茶色味がかった黄灰色を呈している。7は埴輪列gのもので、直径の1/3が残存し、胴部最大径40.2cm、設置面の径38.4cmに復元できる。上部のタガは幅2.1cm、器表からの高さ1.1cm、下部のタガは幅2.4cm、器表からの高さ1.3cmを測る。タガの上下、側面は強くナデられ、下部に布等を用いてナデたためか細いヨコハケのような線がみられる。調整は外面はタテハケで、上部タガ直下にナメハケがみられる。内面には僅かにナメハケが確認でき、明瞭に粘土の緊き目が残っている。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で色調は黄灰色を呈している。8は埴輪列hのもので、全体的に風化が著しいが、胴部最大径28.6cm、設置面の径26.7cm、タガは幅2.1cm、器表からの高さ1.0cmを測る。円形透かし孔が1箇所残っている。底部は欠損している。調整は殆どわからないが、内外面とも僅かにタテハケが確認できる。胎土は0.1~0.2cmの白砂粒を含み、焼成は軟質で色調は茶色味がかった黄灰色を呈している。9は埴輪列jのもので、底部は1/2が残存しているが、タガ付近では3/4が残存し、胴部最大径25.2cm、設置面の径23.7cmに復元できる。タガは幅2.4cm、器表からの高さ1.2cmを測る。内外面ともタテハケで特に内面底部のタテハケは強い。外面底部は粘土帯が剥落するように欠損している。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で色調はやや茶色がかった黄灰色を呈している。10は埴輪列kのもので、底部は大きく欠損し直径の1/4が残存し、胴部最大径32.4cm、設置面の径31.2cmに復元できる。タガは幅2.3cm、器表からの高さ1.0cmを測る。円形透かし孔が1箇所残り、右回りにヘラ削りされている。内外面ともタテハケが施されている。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成は軟質で色調は黄灰色を呈している。11は埴輪列lのもので、底部は1/2が残存し、胴部最大径26.3cm、設置面の径26.0cmに復元できる。内外面とも風化が著しく、外面にタテハケのようなものがうすうすと確認できる程度である。また、底部外面は粘土がはみ出している。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成は軟質で色調は明黄灰色を呈している。12は埴輪列mのもので、底部の1/2が残存し、胴部最大径33.5cm、残存する外面最下部の径31.2cm、設置面の径25.2cm、タガは幅3.4cm、器表からの高さ1.6cmを測る。外面下半は器壁の半分の厚さに剥落し、底部が僅かに残るが、ほとんど欠損している。外面にはタテハケの後、二次調整として、ハケの太さが大小2種類のヨコハケ（ヨコハケの分類は不明）が蛇行しながら施されている。内面はナデで底部付近には指頭圧痕が残っている。また、タガの剥落面には幅0.5cm程の浅い沈線が巡っている。そして、胎土は0.1cm前後の白砂粒を中心に僅かに0.3cm前後の砂粒を含む。焼成は良好で色調は黄灰色を呈している。13は埴輪列nのもので、今回の調査で出土した埴輪の中で最も上部まで復元でき、現存器高は38.8cmを測る。底部は1/2程欠損するが胴部は残り、胴部最大径27.75cm、設置面の径22.7cm、上部のタガは幅2.0cm、器表からの高さ0.9cm、下部のタガは幅2.3cm、器表からの高さ0.8cmを測る。円形透かし孔が1~2段目タガ間に2箇所、その上3段目タガまでには1箇所残存している。底部は自重により歪みが応じている。その外面に板状工具によってタテハケを消している部分が断続

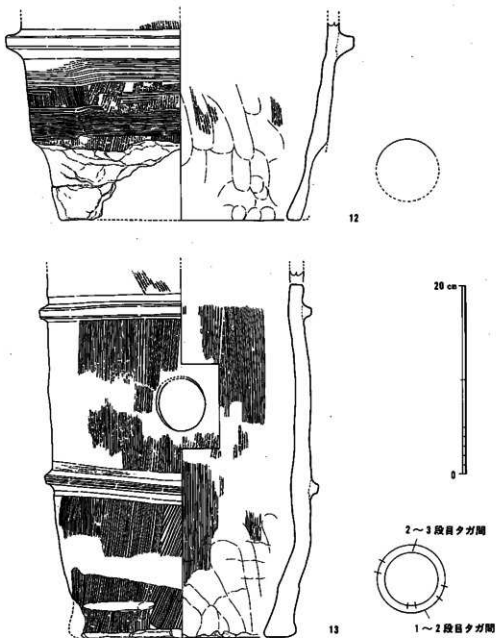


Fig. 31 I段テラス壇輪列出土壇輪実測図4 (1/4)

的に巡ることから、歪みを成形した跡かもしれない。調整は外面はタテハケ、ナナメハケで底面端部付近は未調整である。内面もタテハケであるが、外面よりやや雑な感じを受ける。また、底部付近は強いナデが施されている。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で色調は黄灰色を呈している。

I段テラス壇輪列周辺出土壇輪 (Fig. 32~38, Pla. 48~52)

葦石基底部と壇輪列間のテラス部分で出土した壇輪片である。出土地点はFig. 32の通りである。

普通円筒埴輪 (1~17)
 ほとんどが口縁端部で12のみが胴部付近まで観察することができる。ややばらつきはあるものの胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で黄灰色を呈している。口縁形態は1類 (1)、2類 (2~13)、3類 (14)、4類 (16・17)、5類 (15) に大きく分けられる。調整は全て端部がヨコナデ、外面はタテハケが施され、内面はヨコナデ(4

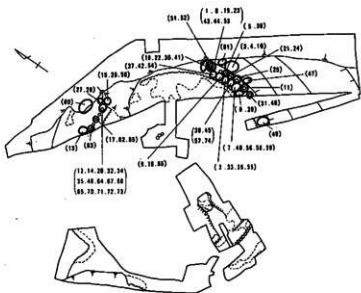


Fig. 32 I段テラス埴輪列周辺埴輪出土地点図

・7・8・13・17)、ヨコハケ (6・12・15) が確認できる以外は風化で不明である。10の端部内面にはヘラで付けたような刻みが施されている。11は1/8が残存し口径42.0cmに復元できる。端部のヨコナデによって押し出された粘土によって内面に僅かな段ができています。12は1/4が残存し口径36.8cmに復元できる。タガの調整には布等を使用したのか細かいヨコハケがみられる。16は胎土は0.1cm前後の白砂粒を含み、焼成は良好で、灰茶色を呈している。

朝顔形円筒埴輪 (18~37) 胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質でやや茶色味がかった黄灰色を呈している。

18・19は口縁部が直線的でゆるく外反している。外面がタテハケ、内面はタテハケの後ヨコハケとナメハケを小刻みに施している。18は1/3が残存し、下部が屈曲後すぐに欠損している。風化が著しいが下部の屈曲部分に突帯が巡っている。また、突帯から欠損部分の間はハケ目がうっすらと残っている。19は約1/4が残存し、下部がきれいに剥落し、剥落面にはハケ目のスタンプが明瞭に残っている。20・21は中位で屈曲し僅かに外反しながら、大きく外開きする口縁部である。20は1/4が残存し、口径53.8cmに復元できる。調整は外面がタテハケ、内面は風化が著しいが僅かにナメハケが確認できる。21は端部が欠損している。1/6が残存しタガの径で34.4cmに復元できる。調整は外面がタテハケ、内面は風化で不明。22~26は口縁端部で、端部が強くヨコナデされ、僅かに凹んでいる。全体的に風化が著しいが、外面がタテハケ、内面は26のみヨコハケが確認できる。

27~31は口縁中位の屈曲部で、27・28は風化が著しくタガは剥落し、一次口縁口唇部と思われる部分が露出した状態になっている。29は下部の剥落面にヨコナデと刻みのスタンプが明瞭に残っている。外面にタガが剥落したような痕跡が見られる。31は屈曲部分に丸味を帯びている。茶色味がかった黄灰色で軟質。風化が著しく詳細は不明。

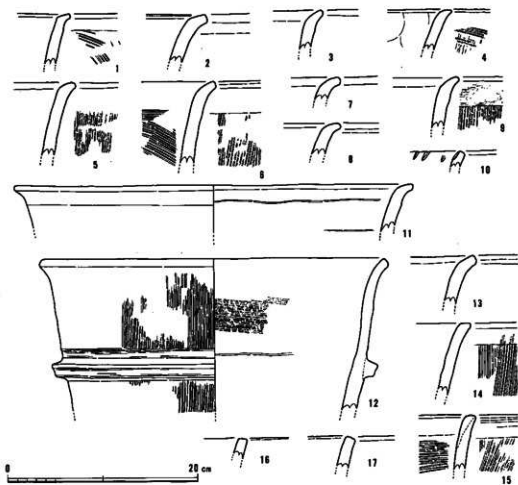


Fig. 33 I 段テラス地輪列周辺出土地輪実測図1 (1/4)

32~34は肩部で、32は1/5が残存し、タガ直上で径27.2cmに復元できる。外面タテハケ、内面はナデられている。33はタガが強くナデられ、直上が凹線状を成している。調整は外面タテハケで、内面には明瞭にヨコハケが施されている。また、約2.3~3.2cmの間隔で粘土帯の緊き目が確認できる。34は風化が著しいが1/5が残存し、頸部タガ直下で16.8cmに復元できる。

35~37は頸部の屈曲部で、外面はタテハケとナナメハケ、内面はナデである。36は風化はしているがタガの接合痕が明瞭に観察できる。37はタガが剥落した状態で、明瞭な屈曲が残る。

円筒地輪 (38~74) 胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で黄灰色を呈している。

38~46はタガが巡る胴部である。38は胴部径1/4が残存し、タガ直下で胴部最大径が30.8cmに復元できる。調整は外面がタテハケ、内面はタガ裏面がヨコハケで他はタテハケである。色調はやや茶色がかった黄灰色を呈している。39は胴部径1/5が残存し、胴部最大径が32.0cmに復元できる。タガ剥落面には幅0.4cmの深い沈線が巡る。外面はタテハケで一部にナナメハケが施されている。内面には粘土緊き目が2~4cm間隔で明瞭に残り、それを消すように斜めに当てた

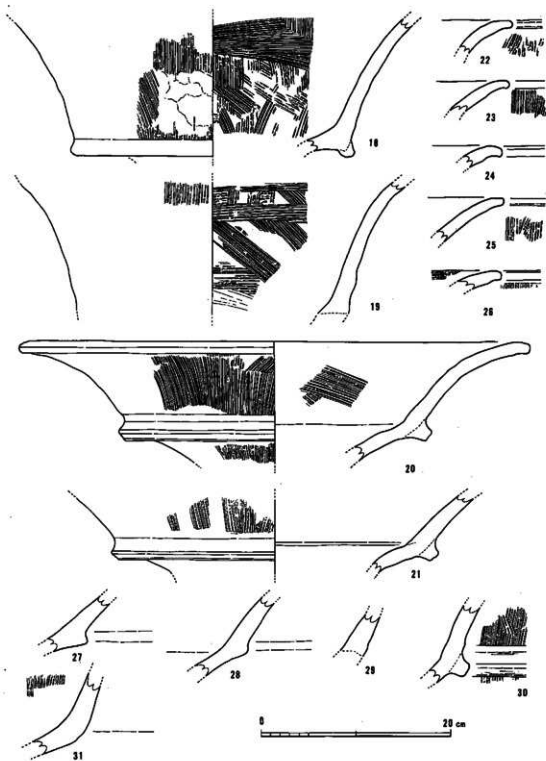


Fig. 34 I段テラス地輪列周辺出土地輪実測図2 (1/4)

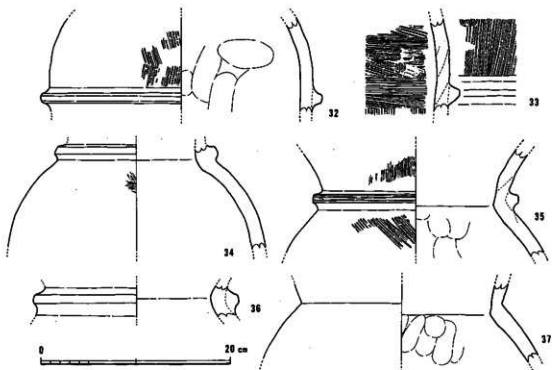


Fig. 35 I段テラス地輪列周辺出土地輪実測図3 (1/4)

ヘラ状工具によってナナメ方向に押しナデしている。40は胴部径 $1/6$ が残存し、胴部最大径が31.4cmに復元できる。タガは高くて幅2.2cm、高さ1.6cmで、布等で強くヨコナデされている。内外面ともタテハケであるが、タガが付く内面はハケ目が消えている。41は器壁の厚さが1.2cmであるのに対し、タガの高さが1.7cmと大きい。下部はナデされず接合部分が明瞭に残る。42は外面調整は風化で不明。内面はナナメハケが僅かに残るが、ナデ痕跡も残る。タガはやや細くて高いが、丁寧に接合されず、器面との間には隙間が開いている。43はタガ剥離面に外面調整のタテハケと幅0.45cmの浅い沈線が残る。44は器壁が1.0cmと薄く、タガも他より幾分小さく高さ0.9cm、幅1.8cmである。内面はナデである。タガ上部の接合部は強くナデられ凹線状になっている。45はタガがやや細くて高い。またその上下は強くヨコナデされている。46は焼成が軟質で、やや茶色がかった黄灰色を呈している。タガの下には透かし孔のようなものもみられるが風化が著しく明確にはわからない。

47~49は底部である。47は $1/3$ が残存し、底径が23.6cm、胴部最大径26.8cmに復元できる。タガは幅2.7cm、器表からの高さ1.1cmを測る。底部外面の一部が剥落している。調整は外面はタテハケ、内面は僅かにタテハケが確認でき、底部付近はナデ痕跡が見られる。色調はやや茶色がかった黄灰色を呈する。48は $1/4$ が残存し、底径17.6cmとやや小振りに復元できる。内面は風化しているが、外面はタテハケとナデが施されている。49は $1/2$ が残存し、底径23.4cmに復元できる。外面はタテハケ、内面には明瞭にナデが残っている。50は指紋が確認できるほど内外面

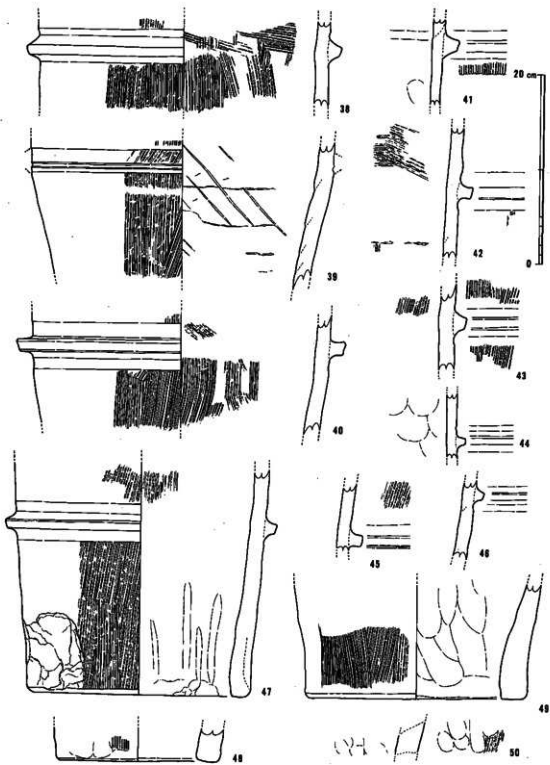


Fig. 36 I段テラス壇輪列周辺出土壇輪実測図4 (1/4)

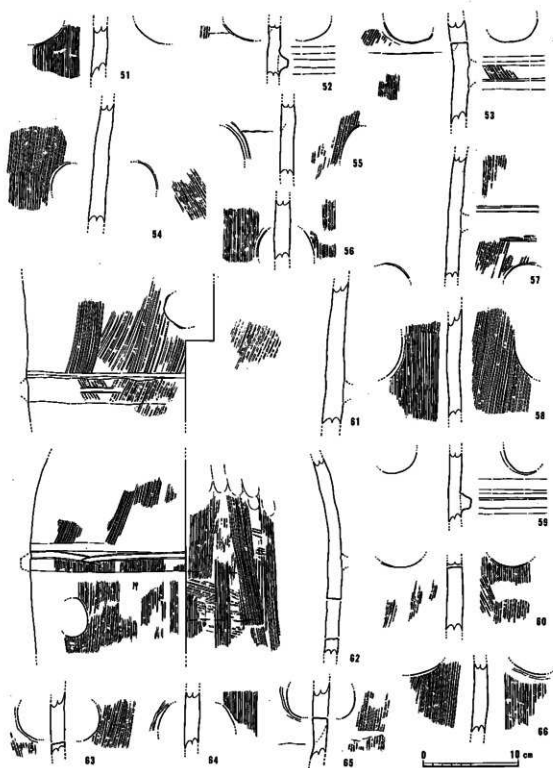


Fig. 37 I段テラス地輪列周辺出土地輪実測図5 (1/4)

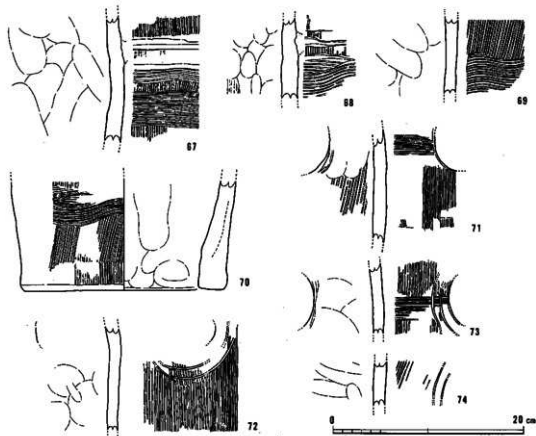


Fig. 38 I段テラス壇輪列周辺出土壇輪実測図6 (1/4)

の指頭圧痕が明瞭に残る。砂粒は少ない。

51~66は円形透かし孔を持つ破片である。外面は僅かにナナメハケがみられる他はタテハケ、内面もタテハケであるが一部風化で区別がつかないがナデ調整したような部分もみられる。51は内面タテハケ。52はタガの直上に透かし孔がある。53はタガが剥落、内面には粘土繋ぎ目が明瞭に確認できる。透かし孔は左回りにヘラ削りされている。54は破片がやや大きいが風化が目立つ。焼成は軟質で茶色がかった黄灰色を呈している。55は粘土帯の繋ぎ目が残っている。58は内外ともタテハケが明瞭に残っている。59はタガの上部接合部分に凹線が巡るが、タガのヨコナデ時に大きめの砂粒を引きずった可能性も考えられる。61は内外面ともナナメハケ、タガ剥落面も同様にナナメハケが施されている。62は胴部径1/5が残存し、胴部最大径が32.8cmに復元できる。タガの剥落面には幅0.6cm程の浅い沈線が右回りに付けられ、残存破片内で結合している。内面は同時にタテハケとヨコハケを不規則に施し、破片上部にナデがみられる。やや小さい円形透かし孔は右回りにヘラ削りされている。茶色がかった黄灰色で焼成は軟質である。63は右回りのヘラ削り。

67~71は外面にヨコハケ〔太いヨコハケ(3本/cm)、細いヨコハケ(5本/cm)]を伴う破片である。内面は71の一部にナナメハケが施されている以外は、ナデ調整されている。67はタガが

剥落しているが、タガ直下にハケ目の太いヨコハケ、タテハケを挟んだその下にはハケ目の細いヨコハケが施されている。68はタガ剥落面の直下に太いハケ目がある。太いハケ目についてはタガ接合部分を整形するために行われたのではないかと考えられる。69は細いハケ目である。70は底部で1/5が残存し、底径が21.0cmに復元できる。風化が著しいが蛇行するヨコハケがみられる。71は透かし孔の内面中央部に稜線があって盛り上がっていることから、ヘラ削りは最低2回は行っていると考えられる。

72~74は幅0.15cm程のヘラ描き沈線を持つ破片である。72はタテハケの後、透かし孔とその周囲に2条のヘラ描き沈線を設けている。73は風化も目立つが、タテハケの後、ヨコハケを施し、そのあと円形透かし孔とその周囲に2条のヘラ描き沈線を設けている。74は外面に僅かにナナメハケが残り、内面にはナダ痕跡のようなものが残る。

周溝出土埴輪 (Fig.39~42, Pla.52・53)

I段テラスと周溝の境界は明確でないが、およそ周溝と考えられる部分から出土した埴輪片である。出土地点はFig.39のとおりである。

普通円筒埴輪 (1~6) 口縁形態は1類 (5)、2類 (1~4)、7類 (6) に分けられる。全体的に風化が目立つが、調整は外面がタテハケ、内面が不規則なナナメハケ、胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で、黄灰色を呈する。1は1/5が残存し、口径36.4cmに復元できる。2は1/6が残存し、口径37.2cmに復元できる。5は軟質である。6は外開きが目立つため、朝顔形埴輪の可能性も考えられる。端部内面には沈線が巡り、ナナメに刻み目が施されている。調整は風化のため不明。

朝顔形円筒埴輪 (7~19) 胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含む。焼成はやや軟質で、全体的に風化が著しい。7は口縁部で、端部に僅かな凹みが巡る。調整は端部をヨコナデ、外面はタテハケで、内面は風化で不明。若干茶色を帯びた黄灰色を呈する。

8~15は口縁中位の屈曲部の破片である。8は1/4が残存し、口縁中位屈曲部タガ直上で径30.0cmに復元できる。タガは全て剥落し、タガ上部付近に一次口縁と二次口縁の接合痕があり、そこで剥離している。調整は外面にタテハケが確認できるが、内面は風化で不明。やや茶色がかった黄灰色を呈する。9は口縁中位の屈曲部で1/7が残存する。

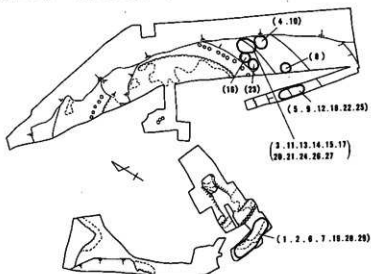


Fig. 39 周溝埴輪出土地点図

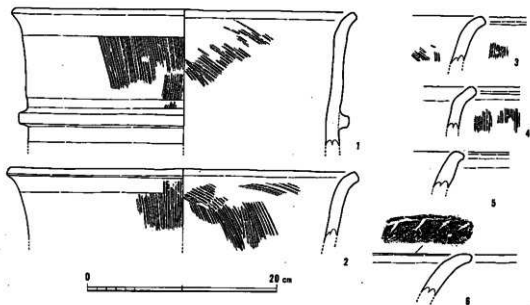


Fig. 40 周溝出土埴輪実測図1 (1/4)

外面には垂れ下がったようなタガがついている。また、上部は粘土繋ぎ目で欠損し、その痕跡を明瞭に残している。内外面とも風化が目立つが外面にタテハケが僅かに残る。焼成はやや軟質で、黄灰色を呈する。10はタガ上部にヨコナデの痕跡が僅かに確認できる。色調は茶色味を帯びた黄灰色を呈する。11はタガ剥落痕の下部にナデ痕跡のみ明瞭に確認できる。色調は黄灰色を呈する。12はタガの痕跡が僅かに残る程度で、調整不明。色調は黄灰色を呈する。13~15は軟質で、屈曲部のタガも殆ど削られ、色調は茶黄灰色を呈する。13は外面調整が不明であるが、14には僅かにタテハケが施され、タガには強いナデの痕跡がみられる。内面はそれぞれナナメハケが施されている。

16は肩部で1/5が残存し、タガ直上で径29.2cmに復元できる。焼成は軟質で外面に僅かにナナメハケ、内面の頸部近くにナデらしき痕跡が見られる。色調は茶黄灰色を呈する。

17、18は頸部で、17は1/5が残存し、タガ直上で22.0cmに復元できる。軟質で風化が著しくタガも丸くなっているが、内面にはナデ痕跡が確認できる。色調は茶黄灰色を呈している。18は1/5が残存し、タガ直上で20.6cmに復元できる。外面はタテハケ、内面は風化で不明。色調は茶黄灰色を呈している。

19は肩部で外面に僅かにナナメハケが残っている。胎土は1.5cm程の砂粒を含むほかは、0.1~0.3cmの白砂粒を含む。焼成はやや軟質で、黄灰色を呈する。

円筒埴輪 (20~29) 胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で、色調は黄灰色を呈する。20は1/3が残存し、胴部径が27.5cmに復元できる。タガ下部には接合痕跡が明瞭に観察できる。外面は一部にナナメハケでその他はタテハケ、内面は僅かにタテハケが残っている。上下は粘土帯繋ぎ目で欠損している。21は1/4が残存し、胴部径が36.2cmに復元できる。タガも殆ど欠損し、風化も著しい。外面調整は不明だが、内面にはタテハケが施されている。22は1/6が残存し、胴部径が30.1cmに復元できる。タガが他に比べ低く幅2.3cm、器表からの高さ

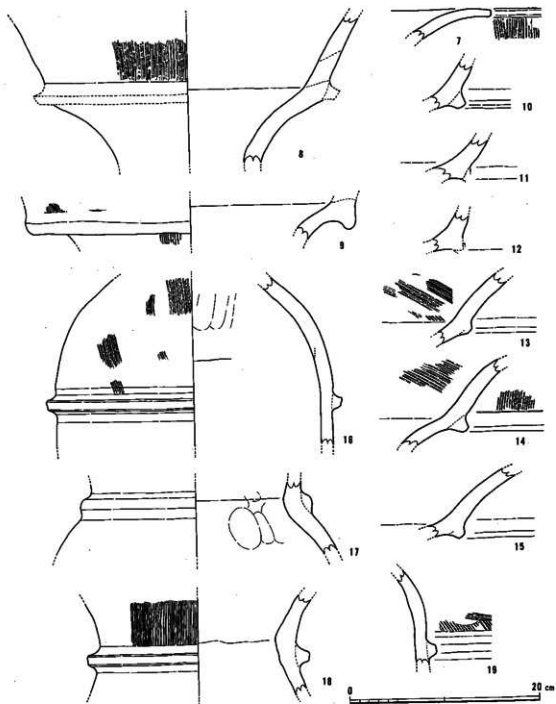


Fig. 41 周溝出土埴輪実測図2 (1/4)

0.7cmを測る。外面はタテハケ、内面は風化が目立つがナデられているようだ。色調はやや茶色がかかった黄灰色を呈する。

23はタガの上方に全体的にヨコハケが見られる。破片の中でヨコハケが切れている部分もある。

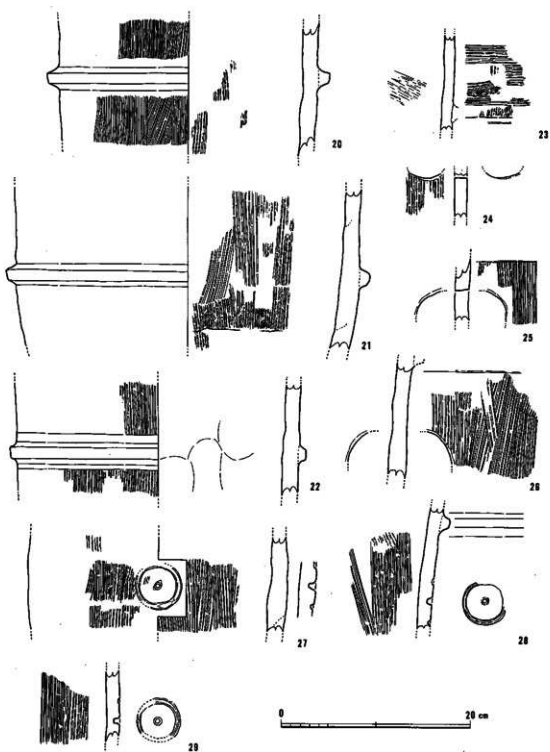


Fig. 42 周溝出土地輪實測圖3 (1/4)

内面は風化で不明。器壁はやや薄い。

24～26は円形透かし孔を有する破片である。24は内面タテハケが残る。25は外面タテハケで、破片上部は粘土帯の緊き目で欠損し、タガの剥落痕跡が僅かに残る。26の透かし孔は右回りにヘラ削りされている。外面にタテハケが残る。

27～29は同心円文様を有する破片である。27は1/4が残存し、胴部径27.3cmに復元できる。外面の風化が著しいが、外円は径4.8cm、幅0.5～0.7cm、深さ0.4cm、中央孔は径0.8cm、深さ0.8cmを測る。内外面ともタテハケが施されている。28は外面の風化が著しいが、外円は径4.8cm、幅0.5cm、深さ0.3cm、中央孔は径0.7～0.75cm、深さ0.7cmを測る。内面はタテハケとナナメハケが施されている。29は外面の風化が著しいが、外円は径4.5cm、幅0.3～0.5cm、深さ0.2cm、中央孔は径0.75cm、深さ0.7cmを測る。内面には強いタテハケが施されている。

墳頂部出土埴輪

(Fig. 43・44, Pla. 54)

墳頂部で原位置を保っていた埴輪とその周辺の平坦面で検出された埴輪片であるが、原位置を保っていた埴輪については、前述したように現地に保存したため、ここで掲載するものは基本的には平坦面で出土した埴輪片である。胎土は0.1～0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で茶色がかった黄灰色を呈している。出

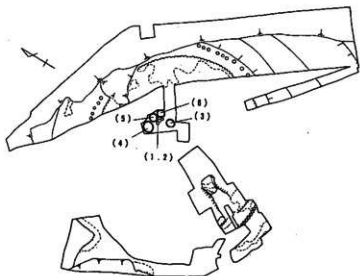


Fig. 43 墳頂部埴輪出土地点図

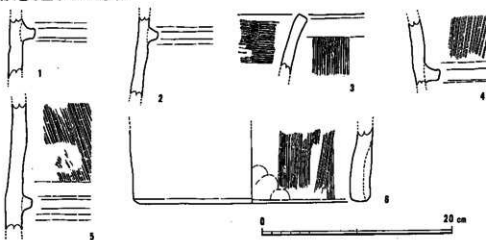


Fig. 44 墳頂部出土埴輪実測図 (1/4)

土地点はFig. 43のとおりである。

普通円筒埴輪 (3) 3は3類。調整は外面がタテハケ、内面はヨコハケを施している。色調は黄灰色を呈している。

朝顔形円筒埴輪 (4) 4は胴部から肩部に内傾する部分で、茶色がかった黄灰色を呈している。内面は風化しているが、外面にはタテハケが残っている。

円筒埴輪 (1・2・5・6) 1、2は風化が著しく上下の判断が困難であったため、逆さの可能性もある。1のタガは幅2.0cm、器表からの高さ1.3cmを測る。2のタガは幅1.8cm、器表からの高さ1.0cmを測る。調整不明。5は外面がナナメハケ、内面は風化で不明。タガは幅1.9cm、器表からの高さ1.0cmを測る。6は基底部で1/4が残存し、底径を25.0cmに復元できる。調整は外面が風化し不明、内面がタテハケで一部ナデを施したようなところがある。

後円部葦石表土出土埴輪 (Fig. 45~48, Pla. 54・55)

後円部の葦石を覆っていた表土から検出された埴輪片で、すべてI段テラス埴輪列より高いレベルで出土しているため、墳頂部の埴輪列から転落した可能性が高い埴輪である。出土地点はFig. 45のとおりである。

普通円筒埴輪 (1~11) 口縁形態は1類 (8)、2類 (6・7・10・11)、4類 (1~3)、5類 (9)、6類 (4・5) に大きく分かれる。全て端部はヨコナデされている。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、色調は黄灰色を呈し、焼成はやや軟質である。1は1/8が残存し、口径が27.2cmに復元できる。調整は外面がタテハケ、内面はヨコハケが施されている。2は外面タテハケ。3は端部外面までヨコハケが施されている。内面はナデられているようだ。4は小破片のため判断が難しいが、朝顔形円筒埴輪の口縁部の可能性もある。色調は茶色がかった黄灰色を呈し、焼成は軟質である。5は外面タテハケ、内面ヨコハケが施されている。6は端部が乱れている部分がある。調整は内面はヨコハケ、外面は不明。7は内面に僅かにナナメハケが残る。8は外面がナナメハケ、内面風化で不明。9の外面は端部は布等によってナデられ、ハケのような横線が残っている。その他はナデである。内面端部はナデでその下はヨコハケである。10、11の調整は風化で不明。

朝顔形円筒埴輪 (16~

26) 胎土は0.1~0.3cmの

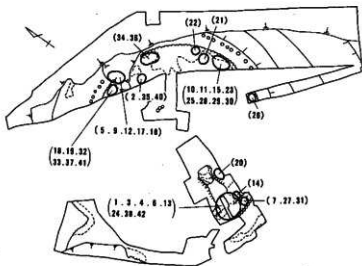


Fig. 45 後円部葦石表土出土埴輪出土地点図

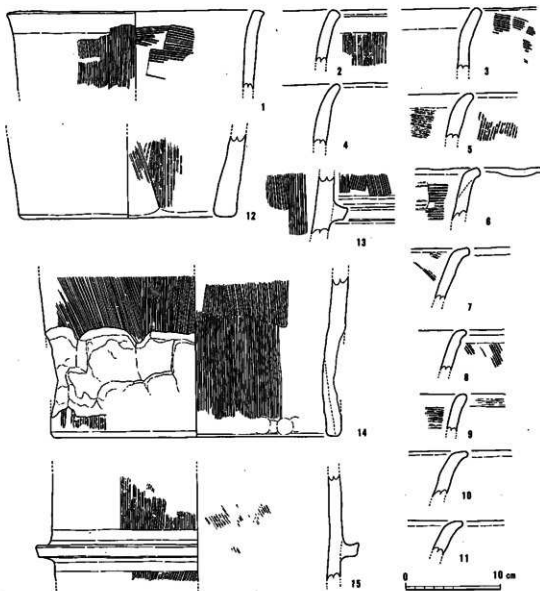


Fig. 46 後円部葺石表土出土地輪実測図1 (1/4)

白砂粒を含み色調はやや茶色がかった黄灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

16~20は口縁部である。風化が著しいが、端部はヨコナデを行っている。調整は外面がナメハケ、内面はヨコハケが施されている。16は1/10程しか残存していないが、口径が58.0cmに復元できる。端部のヨコナデがやや広く行われている。17は内面が布等を使ったヨコナデが広く行われている。18は端部を強くヨコナデしている。

21~25は口縁中位の屈曲部である。21は1/5が残存し、タガ直上で37.0cmに復元できる。タガは上下、側面とも強くナデられている。内面は風化で不明だが、外面はタテハケの後タガ下は小刻みにナメハケを施している。22はタガは欠損している。風化が著しく調整不明。23は屈曲

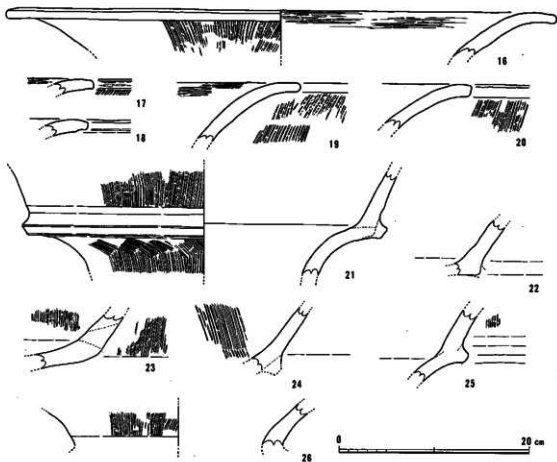


Fig. 47 後円部葎石表土出土埴輪実測図2 (1/4)

部分に丸味を帯びている。内外面ともタテハケが残る。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成は全体的にやや軟質で、色調は茶色がかった黄灰色を呈する。風化が著しい。同様の形態が9段テラス埴輪列周辺で出土しているが、同一個体の可能性がある。24はタガは風化し、内面に僅かにナメハケが施されているのが確認できる。25は風化が目立つが、タガは残存している。26は1/7が残存している。下部にヨコナデが巡り、タガが剥落した痕跡がみられる。径が小さいことから頸部に近い位置と考えられる。

円筒埴輪 (12~15、27~42) 胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、色調は黄灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

12は底部で1/4が残存し、底径が11.5cmに復元できる。外面調整は風化で不明。内面にはタテハケ、ナメハケが残る。やや茶色味を帯びている。13は安定感のあるタガを付け、内外面にはタテハケが施されている。14は底部で1/6が残存し、底径が34.4cmに復元できる。外面は一部意図的に欠損させたように剥落している。外面はタテハケ、ナメハケで、内面はタテハケを施している。15は1/7が残存し、胴部径23.6cmに復元できる。タガは高く幅2.3cm、器表からの高さは1.8cmを測る。外面はタテハケ、内面には僅かにナメハケが残る。やや明るい黄灰色

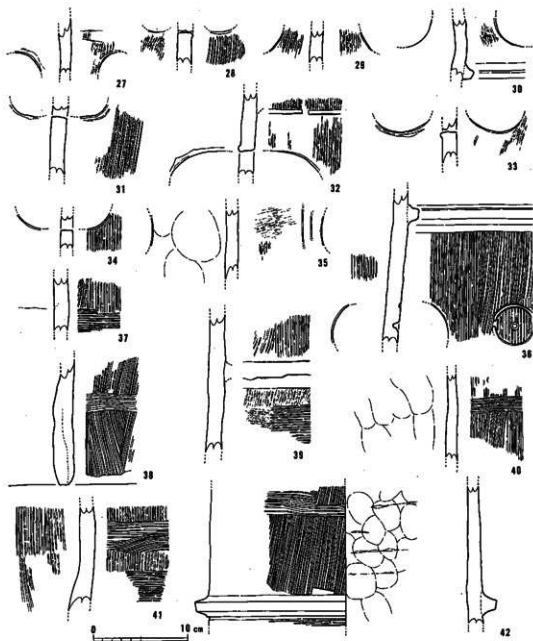


Fig. 48 後円部葺石表土出土埴輪実測図3 (1/4)

を呈している。

27~35は円形透かし孔を持つ破片である。調整は外面がタテハケもしくはナナメハケ、内面はナデもしくは僅かにナナメハケが確認できる。28、29は外面タテハケ、内面ナナメハケ。30はやや内湾した位置に右回りに透かし孔が開けられている。32と33は透かし孔の径や色調から、同一個体の可能性がある。透かし孔の作成によって内面に粘土が多くはみ出している。34は内面ナデ。35は円形透かし孔の周りに2本のヘラ描き沈線を施している。風化も目立ち、外面調整は僅かに

ヨコハケらしきものが確認できる程度、内面はナデである。

36は同心円文様を有する破片で、欠損しているため外円径は不明、幅0.4cm、深さ0.2cm、中央孔は径0.7~0.85cm、深さ0.6cmを測る。外円は途中で切れている。また、文様から約5cmの位置に円形透かし孔がある。調整は外面がタテハケ、内面には僅かにタテハケが残る。

37~42は外面にヨコハケが施されている破片である。37はタテハケの後に細いヨコハケを施している。内面はナデか。38は底部でタテハケとナナメハケのあと太いヨコハケがやや鉸行して施されている。39はタガの剥落痕の下にヨコハケがみられる。ヨコハケが重なり合っている部分があるが、風化が目立ち、ヨコハケの技法を特定するまでには至らない。40はタテハケの後に細いヨコハケを施している。内面はナデである。器壁はやや薄い。41は太さが異なる2種類のヨコハケが施され、上部にある太いヨコハケは丁度破片の中で終結している。また、欠損しているが太いヨコハケの上部はタガがあったと考えられる。内面はタテハケである。42は1/4が残存し、タガ直上で径28.8cmに復元できる。外面はタテハケのあと破片上部とタガ直下に太いヨコハケを施している。ヨコハケを行う際にタガの下部を削り込んでいる。内面には粘土繫ぎ目痕とナデ痕跡がみられる。

後円部北西裾出土埴輪

(Fig. 49・50, Pla. 55・56)

検出範囲は狭いが多くの埴輪片が出土した。埴輪片は朝顔形円筒埴輪、普通円筒埴輪で、埴頂部埴輪列及びI段テラス埴輪列の両方からの転落と考えられる。

普通円筒埴輪(1~3) 明確に普通円筒埴輪とわかるのは、口縁端部の破片のみであった。口縁形態は3類(2)5類(1)6類(3)に分けられる。

1は緩やかに外反し、端部が僅かに平坦になる。外面はタテハケのあとヨコハケを施している。内面は僅かにヨコハケがみられる。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で黄灰色を呈している。2は端部上面を平らにナデたためか、やや外側に突出している。その他調整は外面はタテハケ、内面は風化で不明。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で明黄灰色を呈している。3は端部に向かって細くなり、やや尖り気味に仕上げられている。調整は口縁端部がヨコナデ、外面が僅かにタテハケが残り、内面は浅く広いハケ目のヨコハケを施している。胎土は0.1cm前後の砂粒を含み、焼成はやや軟質で、明黄灰色を呈する。全体的にやや異質である。

朝顔形円筒埴輪(4~11) 頸部から口縁部にかけての破片で、胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成は全体的にやや軟質で、色調は茶色がかった黄灰色を呈する。4は頸部でくの字に屈曲し、そこに台形のタガが付いている。タガは上下、側面ともヨコナデされ、内面の調整は風化が目立つが、ナデを施しているようだ。5は口縁中位から口縁部まで残存し、この口縁形態を知

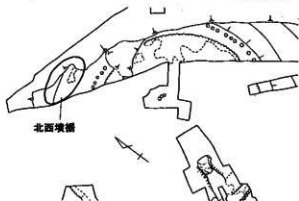


Fig. 49 後円部北西墳裾埴輪出土地点図

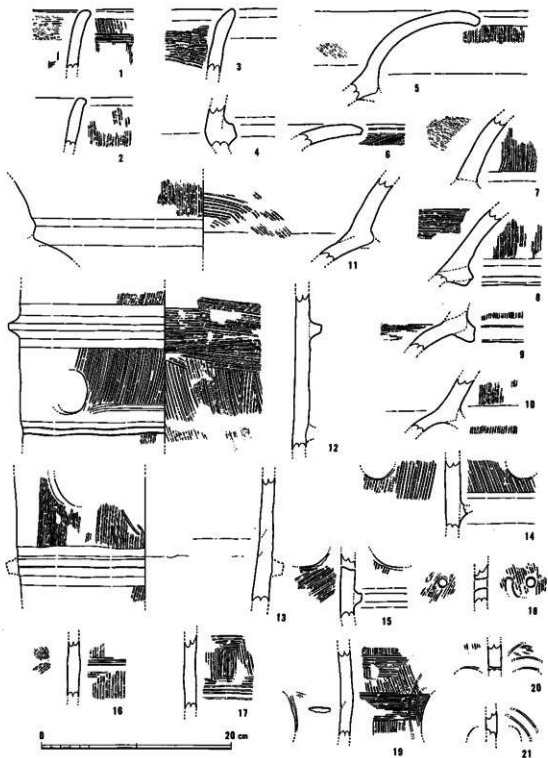


Fig. 50 後円部北西墳裾出土地輪実測図 (1/4)

ることのできる唯一の資料である。口縁部は大きく外反している。風化が著しいが、調整は外面がタテハケ、内面がナナメハケ。口縁中位のタガは剥落し一次口縁口唇部が露出している。口縁端部は強いヨコナデを施している。6は口縁端部で端部は強いヨコナデで僅かな凹みが巡る。外面はナナメハケ、内面は風化で不明。7は口縁中位のタガの直上で、タガに施したと見られるヨコナデが観察できる。調整は外面はタテハケ、内面はナナメハケである。8は一次口縁と二次口縁の接合面の一部欠損が見られる。その剥離面に刻み目のスタンプが僅かに見られる。調整は外面はタテハケ、内面はヨコハケである。9はやや大きなタガが若干下がりが気味に付いている。外面調整はタテハケ、内面は中位屈曲部付近が細かなナナメハケがみられ、その下はヨコハケを施している。10はタガが剥落し、一次口縁が露出している。調整は外面がタテハケ、内面は風化のため不明。11は1/4が残存している。風化が目立ち、タガは剥落し、一次口縁口唇部が露出している。調整は外面はタテハケ、内面は小刻みにナナメハケを施している。

円筒地輪 (12~21) 胴部の破片である。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質で黄灰色を呈している。

12は1/5が残存し、胴部径が30.6cmに復元できる。タガは2本巡り、その間に円形透かし孔がある。下方のタガは剥落し浅い沈線が巡っている。上方のタガはやや細身である。調整は外面はナナメハケ、内面はタテハケ、ヨコハケ、ナナメハケを施している。また、ハケの後ナデている部分がある。13は1/3が残存し、胴部径を27.4cmに復元できる。タガは剥落している。タガからやや離れた上方に円形透かし孔がある。ヘラ記号のような沈線がみられる。調整は外面タテハケ、内面は不明瞭であるが、内面に下がった粘土帯の緊き目が確認できる。14、15はタガの直上に円形透かし孔をもつ。16はタテハケの後、部分的に二次調整の細いヨコハケを施している。17はタテハケの後、ハケ目の太さが2種類のヨコハケを施している。18は内外面ナナメハケの後に1.0cmの円孔が開け、その周囲に幅0.8cm、深さ0.5cm、復元径5.2cmの太い沈線がみられる。今回の調査で唯一みられる文様である。色調は茶色がかった黄灰色を呈する。

19~21は透かし孔を有する破片である。19はタテハケの後にハケ目の太さが2種類のヨコハケを行い、円形の透かし孔を開けている。その周囲にはヘラ描き沈線が2本施している。20、21は小破片であるが円形と考えられる透かし孔の周囲に2本のヘラ描き沈線を施している。21は茶色がかった黄灰色を呈する。

6 SX025出土地輪 (Fig. 51, Pla. 56・57)

普通円筒地輪 (1・2) 口縁形態は1、2ともに2類である。1は1/7が残存し、口縁径は37.6cmに復元できる。タガが細身で台形というより、正方形に近い形をしている。風化が目立つが、僅かに外面タテハケ、内面ナデの痕跡がみられる。2は1/8が残存し、口縁径は35.0cmに復元できる。外面はタテハケと一部にナナメハケを施し、その後ヨコナデを施している。共に胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、色調は黄灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

朝顔形円筒地輪 (3・4) 3は頸部である。1/7が残存しタガ最大径で25.0cmに復元できる。外面にはナナメハケの後にタガを巡らせている。内面には小刻みにナナメハケを施している。

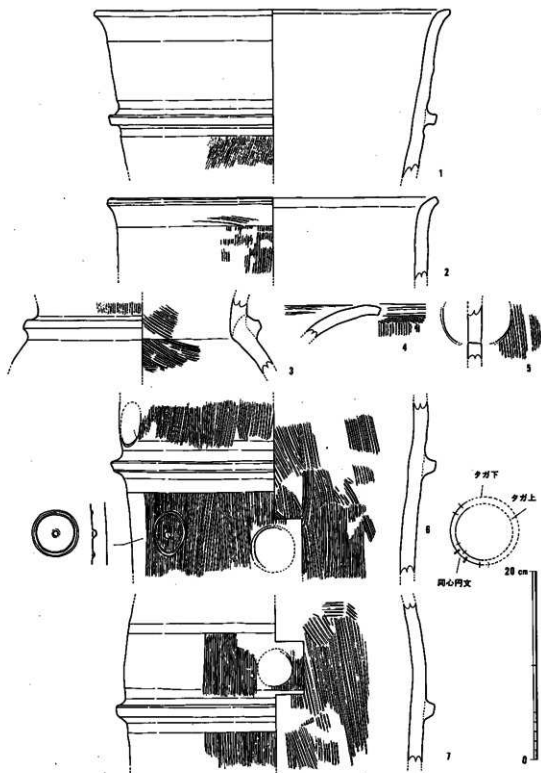


Fig. 51 6SX025出土輪実測圖 (1/4)

4は口縁部でタテハケと端部の近くにナナメハケが施され、その後には端部はヨコナデしているため僅かに細くなっている。端部側面は僅かに凹んでいる。共に胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、色調は黄灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

円筒埴輪(5~7) 5は透かし孔部分の破片である。6は1/2が残存し、胴部径32.6cmに復元できる。下部は意図的かどうかはわからないが、平坦に欠損している。タガより下には円形透かし孔が2箇所、同心円文様が1箇所ある。同心円文様は外円が径4.9cm、幅0.5cm、深さ0.2cm、中央孔は径0.6cm、深さ0.4cmを測る。タガより上部には円形透かし孔が1箇所みられる。外面はタテハケ、内面はやや不規則なタテハケが明瞭に残り、焼成は良好である。7は約1/5が残存し、胴部径は31.8cmに復元できる。円形透かし孔があり、タガの剥離面には浅い沈線が巡っている。破片上部に明確ではないが、タガが剥離したような器面の乱れた所があり、そこにタガが巡り、さらに頸部に向かって内湾し、朝顔形埴輪の形態を成すと推定される。内外面ともタテハケで一部内面に不規則なナナメハケがみられる。共に胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、色調は黄灰色を呈し、6以外の焼成はやや軟質である。

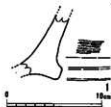


Fig. 52 前方部・くびれ部出土埴輪実測図(1/4)

前方部・くびれ部出土埴輪 (Fig. 52)

朝顔形円筒埴輪(1) 口縁部中位で焼成は軟質で風化が著しく、僅かにヨコハケが確認できる。色調は茶黄灰色を呈する。

【3】瓦 (Fig. 53, Pla. 57)

平瓦(1) 凸面の叩き目は格子で、明瞭ではないが格子内に線が見られる。凹面には分割突帯があり、そこにヘラ切りを行い、折っている。後円部北西裾から出土。



【4】石器 (Fig. 54, Pla. 57)

石鏃(1) 安山岩製で、タテ3.45cm、ヨコ1.6cm、厚さ0.4cmを測る。僅かに扶りが見られるが殆ど直線である。石室前表土出土。

石核(2) 黒曜石で原石面が残る。タテ3.25cm、ヨコ2.6cm、厚さ2.7cmを測る。規則的に打ち欠いた様子は窺えない。後円部北側攪乱出土。

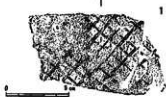


Fig. 53 後円部北西裾出土瓦実測図(1/3)

剥片(3~6) 3は黒曜石で表面の剥離は全体的に風化が進んでいるが、一部新しい剥離も見られる。原石面が残存。周溝出土。4は姫島産黒曜石である。I段テラス埴輪列周辺出土。5は針尾島産と考えられる黒曜石で、原石面が残る。後円部北西裾出土。6はチャート。

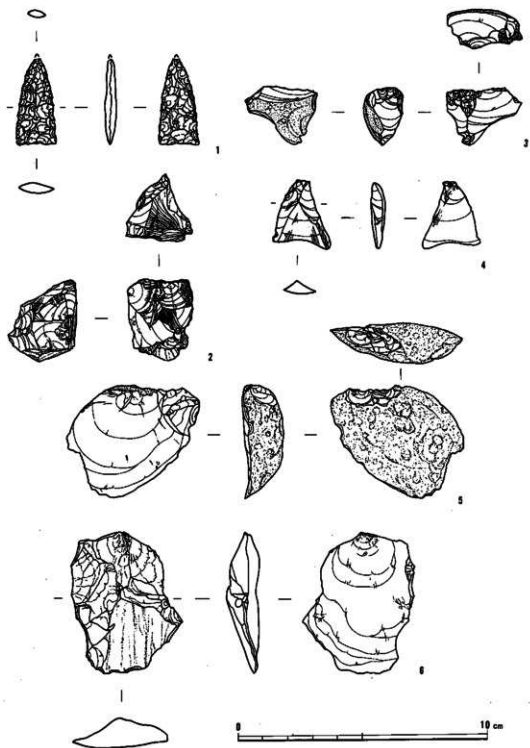


Fig. 54 第6次調査出土石器実測圖 (2/3)

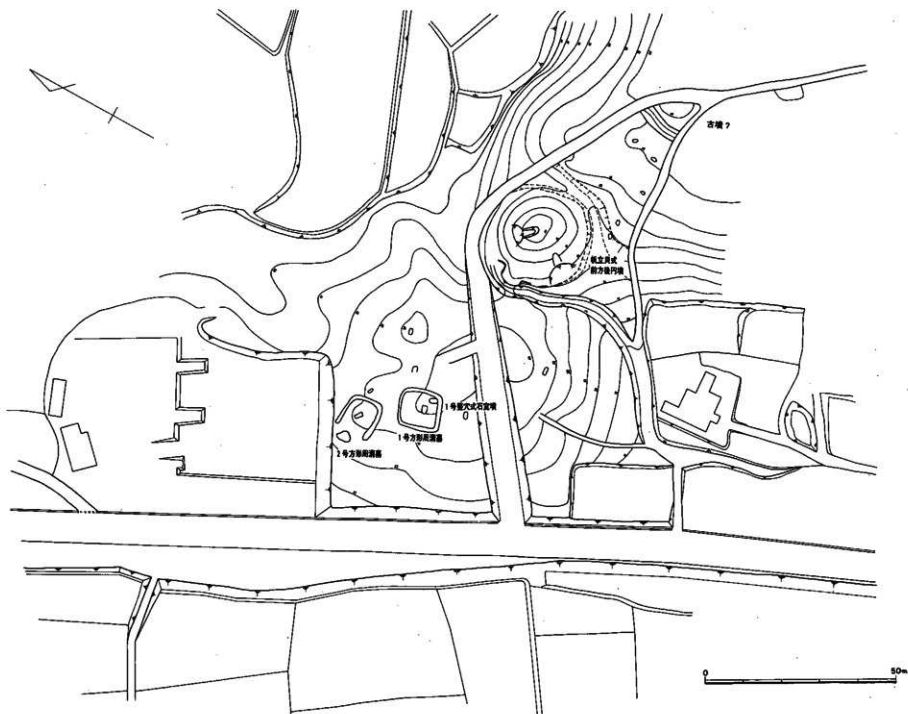


Fig. 55 第3次調査全体図 (1/1000)

5、第3次調査について

第3次調査は調査略歴で記したように、福岡県教育委員会がエーザイ株式会社福岡支店発送センターの建設に伴って、1969年2月～3月にかけて調査を行った。当初の計画ではエーザイ株式会社の建設場所は第2次調査区域であったが、高速道路の予定路線がその地点を通ることによって、エーザイ株式会社の建物が南にずれて建設されることになり、前方後円墳の一部及び西側一帯の調査が必要となった。第3次調査については報告書が未刊であったが、今回の調査報告書を作成するに当たり、当時の所見が必要不可欠となり、当時の資料を検討することになった。しかし、29年前と調査が古いので資料の所在が不明確なものも多く、今回はその一部を検討するに止まった。

なお、第3次調査の所見に関しては松岡史氏から御教示を受け、資料の提供を頂いた。また、横田義章、石丸洋、小池史哲、秦憲二各氏には資料の検索、借用等においてお手を煩わした。記して感謝いたします。

(1) 検出遺構 (Fig.55・56, Pla.38～42)

前方後円墳については保存を前提に調査され、一部削平が予想される前方部と後円部西側部分を、確認のため後円部南側と石室にトレンチを設定し調査が行われた。

まず、石室は第6次調査の所見のほか閉塞石から約1mの前庭部にベンガラを詰まった土師器坏が床面から30cm前後浮いた状態で出土している。追葬に伴うものか。前方部はくびれ部の状態が良好であったが、端部はすでに道によって削平を受けていたため葺石は残っていないかったが、前方部両側は第6-1次調査で確認された以上に残存し、北側葺石は基底石がさらに1個、南側葺石も基底石がさらに2個残っていたようである。また、前方部の盛土が僅かに残存しているものの、前方部も薄い表土でしか覆われてなく、盛土の流出が著しかったことを物語っている。しかし、前方部中央付近には大形の朝顔形円筒埴輪が置かれ、周囲に大小の甍、馬形埴輪、家形埴輪などの破片が散乱して確認されている。墳頂部盗掘痕からは土製勾玉が見つかった。当時はこの盗掘痕が石室背面に達し、内部は盗掘を受けているものと考えられていたが、第6-1次調査で石室には達していないことがわかった。

その他に方形周溝墓2基、箱式石棺1基、竪穴式石室6基が検出された。1号方形周溝墓は南北約11.5m、東西約11mの大きさで、内部主体は箱式石棺で中央よりやや南側の位置にある。主体部床面には40cm前後のピットが確認され、石棺石材除去後に安山岩製の石核が出土した。2号方形周溝墓は周溝を含め南北約10m、東西約10.5mの大きさで、西側は周溝が巡っておらず、その部分に夜白式土器を含んだ土壌が検出された。内部主体は箱式石棺で周溝の対角線を結ぶような方向を向いている。1号方形周溝墓の南側に位置する1号竪穴式石室墳は、石室を川原石によって構築し、頭部を南西方向に向ける。南壁は盗掘によって崩壊している。その他の竪穴式石室も同様の形態をしていて、内部からは鉄剣、刀子などが出土している。これらの遺構は測量図を

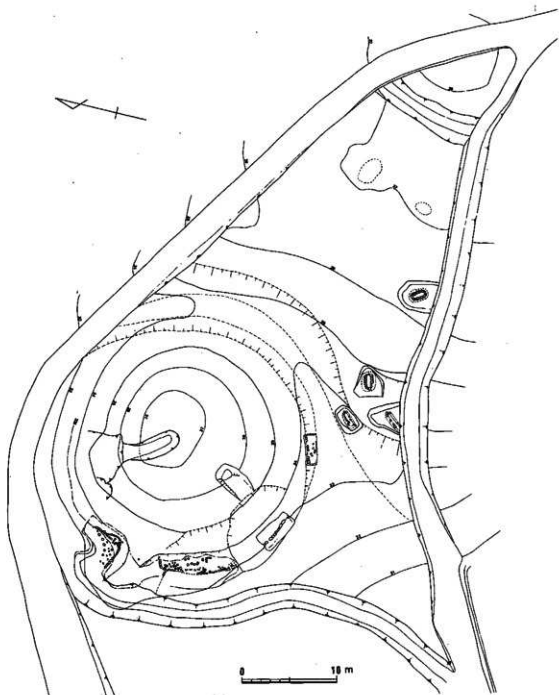


Fig. 56 第3次調査古墳全体図 (1/400)

見る限り、殆どが消滅したと考えられるが、竪穴式石室3基が現在も古墳南側周溝付近に残っている可能性がある。

また、後円部の南東約90m付近に盛土は流出しているが、周溝を含む推定径20m程の古墳が確認されていたが、すでに道路によって大きく削平されていた。その後、この古墳の調査や報告に

については未確認である。

(2) 出土遺物

【1】土器 (Fig. 57, Pl. 58)

須恵器

1、2は前方部に供献されていた。今回の前方部の調査で須恵器の破片が1片出土し、それが第3次調査の小型甕と接合することから、間違いなく前方部の出土であることが確認された。

大型甕(1) 口径12.7cm、器高15.8cmに復元できる。口縁端部はシャープに仕上げられ、口頸部にはシャープな突帯が巡る。口頸部と突帯の間には櫛描き波状文(9本)が施されているが、下方は自然釉がかかりうっすらと見える程度である。頸部はカキ目調整のあと櫛描き波状文(15本)が施されている。最大径は18.3cmでやや上方にあり、さらに上方に櫛描き波状文(8本)とそれを挟むように1条づつ浅い沈線が巡る。底部は指頭圧のあとタタキ調整が行われている。内部には頸部と体部の接合時の指頭圧痕が明瞭に残り、底部にも指頭圧痕が残っている。胎土は砂粒を僅かに含むが、極めて精製されている。焼成は良好で、色調は内面が黄灰色、外面は体部上半部は明灰色で下半部と頸部の一部が暗灰色である。

小型甕(2) 口径9.0cm、器高推定10cm。口縁端部は丸みがあり、口頸部には突帯が巡る。頸部にはシャープでない櫛描き波状文(14本)が施されている。増部は底部が欠損している。最大径は10.5cmでほぼ中位で、そこに櫛描き波状文(7本)が巡らされ、それを挟んでそれぞれ2条の浅い沈線が巡らされている。櫛描き波状文と上方の沈線を切るように円孔を穿っている。全体的に灰や自然釉がかかり、調整は明瞭ではないが口縁部に回転ナデが、底部付近に指頭痕のような僅かな凸凹が残っている。胎土は少量の白砂粒を含むが、よく精製されている。焼成は良好で、色調は全体的に灰黄色であるが、下半部が暗灰色である。

その他に甕の胴部片が収納され、前方部から出土したと言われているが、記録を欠く。

土師器

甕(3・4) 1号方形周溝墓の北側周溝内から出土したものである。3は周溝内でも、やや底より浮いた状態で出土している。甕の口縁部で口径の1/4が残り、口径7.8cmに復元できる。口縁中位がやや膨らみ、端部にかけて細くなりながら若干外反する。内外面とも回転ナデが施されている。胎土は0.1cm前後の砂粒を少量含み、焼成は不良で、色調は黄白色で外面が一部黒灰色を呈する。内面下部の丁度頸部屈曲部付近に僅かながら小豆色に近いベンガラが残っている。4は甕の胴部で、やや上部に最大径があるが、球体のような形をしている。また、胴部最大径付近がやや凹んでいる。底部外面は輪を描くように粘土が薄く貼り付けられている。調整は風化も著しいが外面全体に細かいハケ目が残存し、最大径付近に帯状にススが多く付着している。内面はヘラ削りが施されている。また、内面全体に0.2cm未満の小さな点でベンガラが散在している。胎土は0.2cm前後の砂粒を含む。焼成は不良で、色調は黄灰色を呈している。

【2】埴輪 (Fig. 58-62, Pl. 58-60)

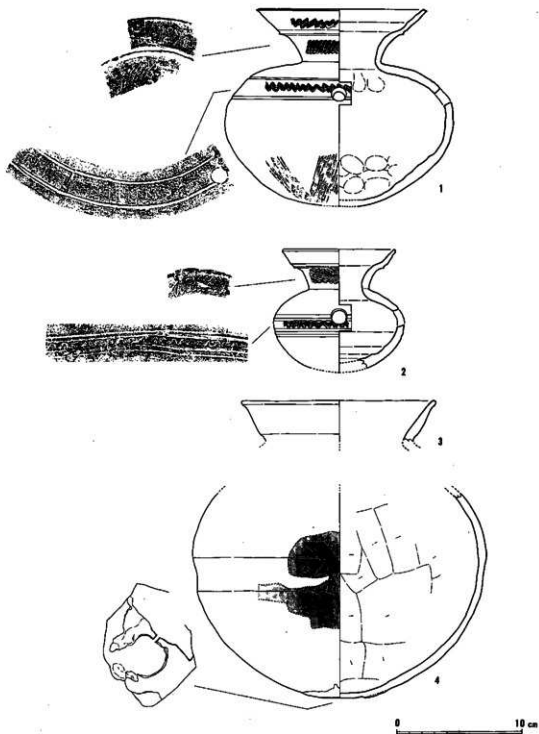


Fig. 57 第3次調査出土土器実測図 (1/3)

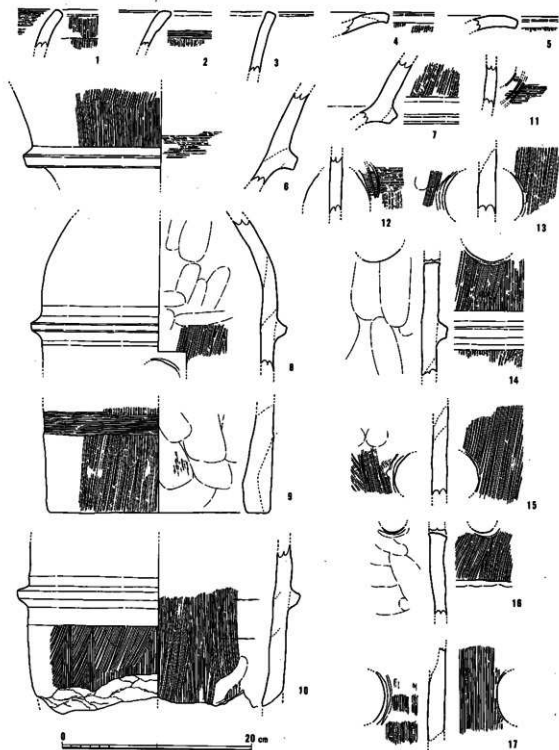


Fig. 58 第3次調査出土輪軸実測図1 (1/4)

普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪が認められる。全て帆立貝式前方後円墳からの出土である。

普通円筒埴輪(1~3) すべて普通円筒埴輪の口縁部である。口縁形態は2類(1)3類(2)4類(3)に分けられる。胎土は全体に0.1~0.3cmほどの白砂粒を含んでおり、焼成はやや軟質である。1は調整が内外面とも端部まで行われ、外面はタテハケ、内面はヨコハケを施している。色調は茶黄灰色を呈している。2は端部をヨコナデしているが、布等でナデたのか細かなハケ状の横線が確認できる。また、強いヨコハケを施しているため、口縁部が肥厚しているようにみえる。3は口縁端部内面が僅かに膨らみを持つが平坦である。調整は風化で不明。

朝顔形円筒埴輪(4~8) 全てが同質で、胎土は0.1~0.3cm程の白砂粒を含み、色調は茶黄灰色でほとんどが手に持つとすぐ汚れるほどの軟質である。

4・5は朝顔形円筒埴輪の口縁部で両方とも強いヨコナデを施している。4については口縁上端部をさらにヨコナデしているため、粘土が潰れたように外面にはみ出している。6は口縁中位のタガで最大径29.0cmに復元できる。口縁中位は僅かに屈曲する程度で口縁部に向かって外反している。調整は外面がタテハケで口縁端部に近い方はさらに小刻みにタテハケを施している。7は6に比べて中位の屈曲は明瞭である。その外面に貼付しているタガの側面部はやや凹みが目立つ。8は肩部で径の約1/6が残存し、胴部径で24.6cmに復元できる。タガの直下に円形と考えられる透かし孔がある。調整は内面がナデで一部タテハケが施されている。外面調整は不明。

その他に前方部中央で据えられていたと考えられる朝顔形円筒埴輪が出土しているという。

円筒埴輪(9~17) 前方部くびれ部から周溝にかけての後円部裾のトレンチから出土したものである。11、12を除く9~17は全体として、胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成は良好でハケ目は明確に確認できる。色調は黄灰色を呈している。

9は底部で底径の約1/5が残存し、底径23.6cmに復元できる。底部特有の側面に貼り付けたような粘土帯の繋ぎ目が確認できる。外面はタテハケの後、一部強いヨコハケを施している。内面は強いナデが施されている。10は上部が粘土帯繋ぎ目で欠損し、底部は今回の調査で検出した埴輪と同じく欠損している。外面はタテハケのあと小刻みにナメハケを施している。内面はタテハケで、約4cm間隔の粘土帯の繋ぎ目が確認できる。11、12は外面ヨコハケの後、透かし孔とその周囲に2本のヘラ指き沈線を施している。

13~17は円形透かし孔が残る破片で、すべてハケ調整の後、外面からヘラ工具による削りを行い、穿孔している。胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含み、焼成はやや軟質である。13は透かし孔の製作によって、内面側に約0.3cmほど粘土がはみ出している。上部は粘土帯の繋ぎ目で欠損している。14はタガの風化が少なく、旧態をよくとどめている。高さは約1cmでがっちりとした台形をしているが、側面がやや窪み、上下とともに強くナデられている。親指、人差し指、中指でナデたようにみえる。内面は風化しているがナデと考えられる。15は透かし孔は断面でみると一部中央部がやや膨らみ、内外面に向かって下がっているところがある。そのためかその部分のみ内面にはみ出している粘土量が多い。調整は外面がナメハケ、内面が不規則なナメハケである。

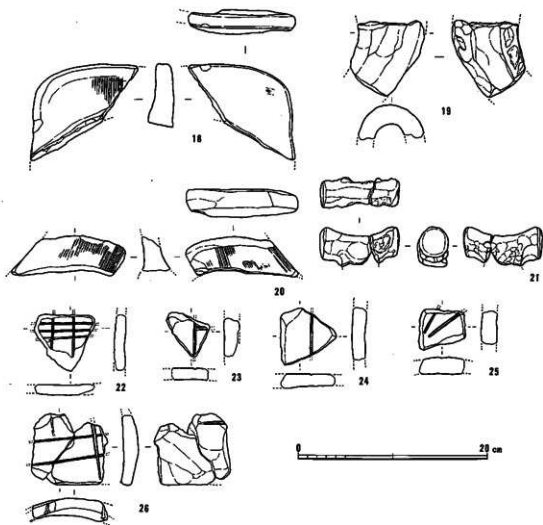


Fig. 59 第3次調査出土埴輪実測図2 (1/4)

第3次調査出土埴輪の中で、ハケ目が一番明瞭に残っている。16は透かし孔を開けた際に内外面に粘土がはみ出している。また、その下4.6cmまではナナメハケが施されているが、その下は器面が乱れたようになっているため、タガが剥落した痕跡かもしれない。17は内外面ともタテハケ調整。上下とも粘土帯の繋ぎ目で欠損。

形象埴輪 (18~56) 全て前方部からの出土。18、20は馬形埴輪の鞍の部分ではないかと推測されるが明確には言い切れない。18は欠損しているが、僅かに湾曲した器体から剥離したような接合面が残る。風化も目立つが一部表面にタテハケが確認でき、端部はヨコナデがみられる。焼成はやや軟質で、色調は黄灰色を呈している。厚さは1.1cm~2.6cmである。20は表裏はハケ目が施され、二側面は欠損し、一側面は剥離面で、もう一側面はナナメに傾き、ナデ調整している。焼成はやや軟質である。19は動物埴輪の脚部もしくは腕部と考えられる。半円状にしか残存していないが、径6.8cmに復元できる。残存している上端部が一部外反し欠損しているため、脚部で

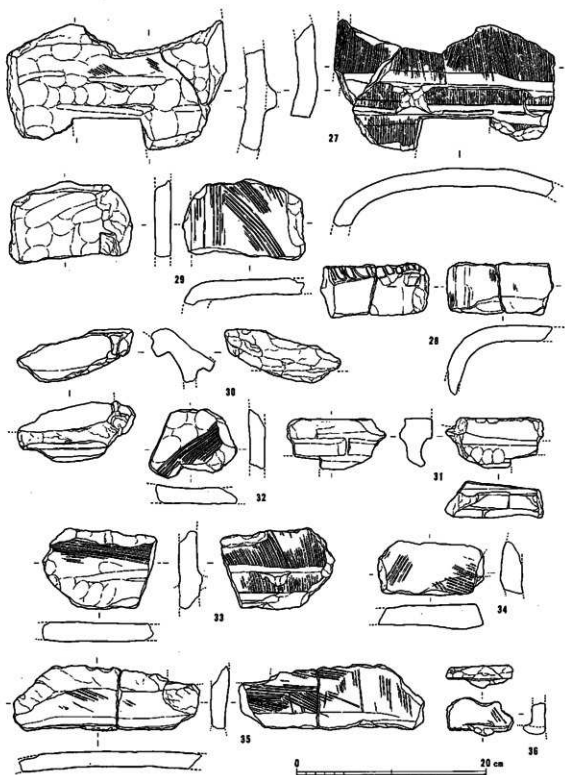


Fig. 60 第3次調査出土土埴輪実測図3 (1/4)

も付け根に近い部分と考えられる。調整は風化が著しく不明。焼成は軟質で、色調は茶黄灰色を呈している。

21~26は家形埴輪の屋根の一部と推測される。全体として胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含むが、他の埴輪に比べて砂粒の量は若干少ない。21は鳥居のように上方に反っている。下面には剥離痕があり、その付け根にはしっかりしたナデが施されている。その形状から罎木と推測される。胎土は精製され、砂粒は極めて細かい。22は格子状にヘラ描き沈線があり、図面上で言えば、横線のあと縦線を施している。調整は風化のため不明。焼成は軟質で、色調はやや茶色がかった黄灰色を呈している。23・24はナデのあとにヘラ描き沈線を施している。焼成は良好で、色調は黄灰色を呈する。25はヘラ描き沈線を施しているが、他と異なり格子状にはなっていない。異なる箇所の可能性もある。焼成はやや軟質で、色調はやや明るい黄灰色を呈している。26は屋根の端部と考えられるが、端部に向かって細くなり、横方向に湾曲しているため、他の埴輪の可能性も考えられる。横線のあと縦線を施している。調整は内外面ともナデである。焼成は良好で、色調は黄灰色を呈する。

27~36は家形埴輪の壁と床の破片と考えられる。特に明記してない限り全体として胎土は0.1~0.3cmの白砂粒を含む。焼成は良好で、色調は黄灰色を呈している。27~29は家形埴輪の角の部分で、丸味を持って屈曲する。27は屈曲は緩やかで、右回りのヘラ削りで幅7.8cmの方形の窓を開けている。窓の上に突帯が巡っているが剥離し、僅かに残存している。普通の家形埴輪としては、この突帯は裾回りの突帯と考えたいが、粘土緊ぎ目の傾きからすると、窓の上に突帯が巡るようになる。また、屈曲部以外も全体的に僅かながら湾曲しているため、長方形に近い家形埴輪の短辺の可能性もある。このことから推測するとタガ直下で屈曲部間が23.6cmに復元できる。調整は外面が不規則にタテハケとナメハケを施し、内面はタガ接合時に押さえていたとみられる指頭圧痕があり、ヨコナデと一部にナメハケが確認できる。また、突帯が剥離した器面はタテハケと幅0.7cmの沈線が施されている。また、類例からすると上下逆になる可能性も考えられる。28は27と異なり強く屈曲している。その屈曲部外面に明瞭ではないが、突帯状のものが剥離した痕跡がある。内面端の剥離面には刻み目のスタンプが明瞭に残る。調整は風化しているが外面にはハケ目が僅かに残り、内面はナデである。29は破片の端が丸味を帯びながら僅かに屈曲し、その他の面は平面的である。しかし、その屈曲部分に何か剥離したような痕跡もみられることから、違う種類の埴輪の可能性も否定できない。調整は外面の風化が著しいがタテハケとナメハケ、内面は明瞭にナデが残る。焼成はやや軟質である。30は庇と考えられる。外面には斜めに張り出した庇状の突帯が残存し、内面に壁の一部が丸味を帯びながら90度に屈曲している。屋根の部分は風化し剥離しているようである。屋根の内面の調整は判別が難しいがヨコナデである。庇の下もナデ調整されている。31は上部がきれいにナデたようにみえるが、焼成の度合いから剥離面と考えられる。側面上部はヘラ状工具によるナデと言うべきか磨いたような平坦面がある。その下は抉るように内湾し、ヨコナデが施されている。その内湾部下半には窓のように切り込んだ部分が残る。その脇は現状では張り出したようにみえるが、欠損によるものと考えられる。ま

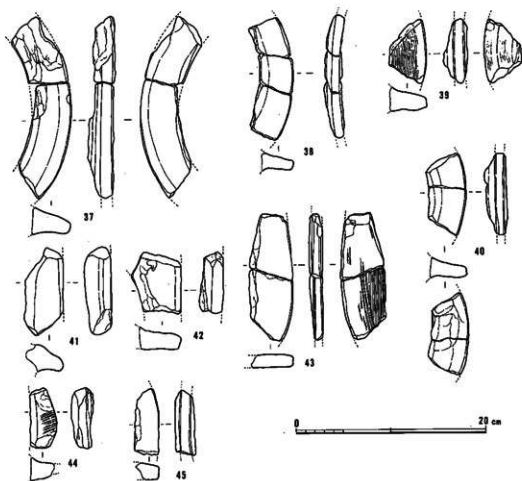


Fig. 61 第3次調査出土埴輪実測図4 (1/4)

た、その部分には明瞭に指頭圧痕が残っている。内面は何かが剥離したような溝状の凹みと欠損部分がみられる。しかし、明確に家形埴輪のどの部分に当たるかは不明。あるいは他の埴輪の一部かも知れない。焼成は良好である。32は平面的で家形埴輪の長辺の壁片と考えられる。調整は外面がナアのあと一部ナナメハケ、内面は風化で不明。焼成はやや軟質である。33は平面的で家形埴輪の長辺の壁片と考えられる。裾回りの突帯とみられる突帯の剥落痕がある。突帯の直上に欠損している剥離面の一部に、ヘラ削りしたような整形した面がみられることから、窓の一部の可能性がある。調整は外面及び突帯剥離面がナナメハケ、内面はヨコハケと突帯の真裏に指頭圧痕が残る。また、27と胎土や器壁の厚さ等が同じであるため、同じ個体と考えられる。34は僅かながら丸味を帯び、側面欠損部分に窓と考えられるヘラ削りした箇所が残っている。調整は外面が不規則なナナメハケ、内面はナアである。焼成はやや軟質である。35は平面的な破片のため家形埴輪の長辺の壁片と考えられる。破片の下部に窓のように切り込んだ部分が残る。また、窓状の切り込みと反対側の剥離面にハケ状工具で付けたような浅い刻みが確認できるが、その刻みに粘土が焼き固まっている部分もあることから、文様というより他の器体と接合をよくするための

工夫と考えられる。調整は外面がヨコハケのあと小刻みなナナメハケ、内面は風化しているが一部にナナメハケが残存している。焼成はやや軟質である。36は屈曲部で内外面の判断が難しい。屈曲部分は剥落しているが、接合をよくするためか剥落面に刻みが施されている。調整はナデで一部にハケ目がみられる。

37～45はタガのように三面が整形され、一面が別個体から剥離した痕跡が残る破片。厚さは一部僅かに肥厚している部分があるが、剥離面から側面に向かって薄くなる。または、それに近い形状をした破片である。胎土は0.1～0.3cmの白砂粒を含んでいる。色調は一部茶色味があったものもみられるが、全体として黄灰色を呈している。

37～40は全体が弧を描くように湾曲しているため、鞍を思い浮かべるが、18のような鞍と考えられる破片も出土していることから、他の埴輪の可能性も十分考えられる資料である。37、39は同一個体であろう。僅かに下方に傾いた状態で湾曲している。三面とも布等を用いてヨコナデしたようで、ハケ目のような浅く細い線が明瞭に残る。剥離面はタガ接合箇所によくみられる幅0.45cmの沈線のスタンプがみられる。焼成は良好である。38は37よりひとまわり小さいが、同様の形状で下方に傾いた状態で湾曲している。剥離面にはタテハケのスタンプがみられる。上面と考えられる面は風化が著しいが、側面と下面は強いヨコナデが残る。焼成はやや軟質である。40は風化かも知れないが、下面が剥離したように表面が乱れた部分があり、何か接合されていた可能性も考えられる。図面では下面になっているが、破片のため上下の判別はできない。焼成はやや軟質である。

41～45は湾曲しない破片である。全体として胎土は0.1～0.3cmの白砂粒を含み、色調は黄灰色を呈する。41は上下側面とも布等を用いた強いヨコナデが行われている。焼成は良好である。42は側面が直線的で、剥離面が側面に対しややナナメ方向にみられる。剥離面にはハケ目のスタンプが残っている。上下、側面はヨコナデであるが上面の一部が風化し凸凹になっている。焼成は良好である。43は他に比べ厚さに変化がなく破風板の可能性もある。外面はハケ目、内面も細かい線は確認できるが、ハケ目というより布等を用いたヨコナデと考えられる。側面は僅かに凹面が巡っている。焼成はやや軟質である。44は剥離面は若干凸凹である。調整はハケ目が僅かに残っている。焼成は良好である。45は一見円筒埴輪のタガのようにみえるが、どのような埴輪かわからない。調整は布等を用いたヨコナデで、焼成は良好である。

46～56は形がよくわからない形象埴輪の破片である。全体として胎土は0.1～0.3cmの白砂粒を含む。焼成はやや軟質で、黄灰色を呈している。46は全体が丸味を帯び、一部外側に向かって壺等の口縁部のように屈曲している部分があるが、外面が欠損しているため外反しているのか穿孔なのか判別できない。色調は茶色味を帯びた黄灰色で、19の動物埴輪に近い色調を呈しているため動物埴輪の一部の可能性も考えられる。外面調整は不明、内面はナデが施されている。焼成は軟質である。47は丸味があるため動物埴輪の一部か。調整は外面に一部ハケ目が確認でき、内面はナデである。48の調整は外面にハケ目が残存している。風化も目立つが部分的なハケ調整と考えられる。内面はナデ。色調はやや茶色味があった黄灰色を呈し、全体が湾曲しているため馬形

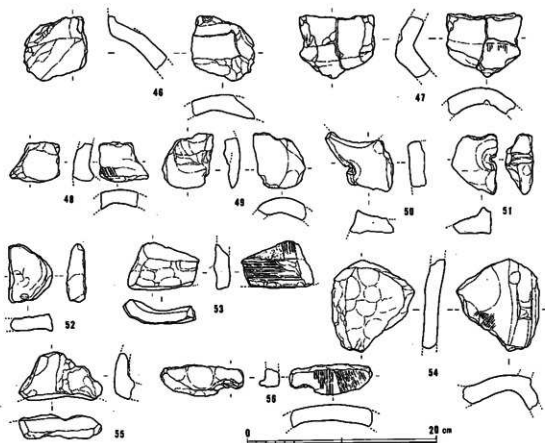


Fig. 62 第3次調査出土埴輪実測図5 (1/4)

埴輪の一部か。49は図面の下に向かって細くなり完結している。しかし、風化が著しく表面の観察が困難なため粘土帯の縞目剥離面の可能性も考えられる。また、茶黄灰色で19に似た色調と胎土をしているため、動物埴輪の一部か。50は上面にヘラ削りを行い、いわゆる透かし孔のような穿孔を開けている。また、破片の左側にもヘラ工具で外面から雑に抉ったような穿孔が開いている。調整は外面が風化し、内面は剥落している。51は50と同様にヘラ状工具により抉ったような穿孔が開いている。そして、穿孔周囲が器表より約0.7cm盛り上がっている状態であるが、穿孔過程で粘土がはみ出した感じではなく、一部に粘土を継ぎ足したような剥離面もみられることから、意図的に盛り上げたものと考えられる。表面は風化し調整は不明。52は全体的に風化が目立つが、湾曲している面は焼成具合から剥離面と推測される。53は外面にタテハケとヨコハケが交差するように施され、その交差する所に僅かに粘土が残っている。ハケ目以外は敲打の凹凸のような風化をしている。タガのような突帯部分のみにハケ目が残存したのではない。内面調整はナデである。54は一見家形埴輪の角の部分に見えるのだが、屈曲部外面にタガ状の突帯が僅かに残ることや、さらに立ち上がっていく様子が窺えることから他の埴輪の可能性も考えられる。外面には一部ハケが施され、内面はナデによって粘土が波打っている状況が明瞭にわかる。55は

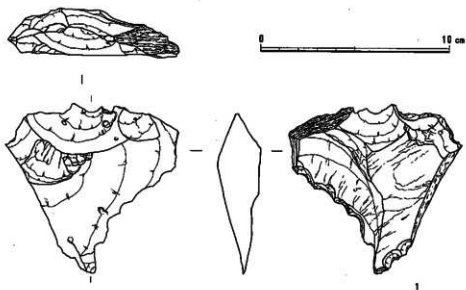


Fig. 63 第3次調査出土石器実測図(1/2)

屈曲部である。外面調整はナデ、内面は風化で不明。56は破片のため不明確であるが、円筒埴輪の透かし孔の部分である可能性がある。調整は外面がタテハケ、内面がナデである。

その他にまだ多くの破片があるといい、その中に明らかに馬形埴輪とわかる破片が出土したと言われている。

家形埴輪に関しては2個体分の破片が確認され、床もしくはベット状の床が付されていたと推定されるが、破片数が少ないため詳細は不明である。周辺で家形埴輪が出土した古墳は井尻B1号墳、博多1号墳、貝徳寺古墳、カクチガ浦遺跡群第10号墳など多く知られ、2個体以上の家形埴輪が出土する古墳も博多1号墳があり、5個体分が出土している。しかし、床構造を持つ家形埴輪は少なく、極めて珍しい。

【3】石器 (Fig. 63, Pla. 61)

石核(1) 1号方形周溝墓の主体部下から出土。安山岩でタテ9.0cm、ヨコ9.2cm、厚さ2.3cmを測る。打面調整し、横長剥片を打ち欠いた後、細かな打ち欠きを行い、再利用している。

6、調査まとめ

(1) 古墳の規模と築成 (Fig.64、表1)

今回の調査によって、改めて前方部が極めて短い2段築成の帆立貝式前方後円墳であることがわかった。方位はN-84°-Wを向き、古墳の最高位は標高37.6mである。

前方部に関しては第3次調査当時から道によって削平されていたが、その道を越えた所にはそれらしい遺構は確認されてないことから、最大見積っても前方部長は道までの約7.3m以内に納まることになる。そして、道によって削平を免れている長さは下端で約5.2m、上端で約4.1mであるが、盛土の残存状況が不明確なため、それがそのまま前方部の残存部分とは言い切れない。当時の写真から分析する限りでは、前方部長は約5m前後と推定される。さらに福岡県内にある御塚古墳(久留米市)⁹⁾、高野1号墳(若宮町)¹⁰⁾、石並古墳(行橋市)¹¹⁾、廻渡古墳(福岡市)¹²⁾など同形の帆立貝式前方後円墳を検討し、それらの数値を参考に復元を試みた。本古墳が後円部の直径とくびれ部の幅のみが明確なため、後円部の直径を8等分し検討したが¹³⁾、そのままその数値を復元値とするには疑問が残るため、その数値でくびれ部の幅を割り、比較検討した結果、御塚古墳が本古墳に最も近い形であることが分かった。この数値を参考に成層形古墳の前方部を復元すると表1及びFig.64の通りである。

表1 古墳規模計測表

	全長	墳丘長さ	後円部径	後円部高	くびれ部幅	前方部長	前方部幅	前方部高
1段目	36.5 (測溝含む)	31	26.5~27.5	3.75 (測溝から) 4.0 (くびれ部から)	5.8	2.5 (現存) 4.8 (復元)	1.5 (現存) 6.8 (復元)	0.65 (現存) 0.75以上 (復元)
2段目	—	—	18~19	2.9	—	—	—	—

後円部と前方部の高低差3.6m (単位 m)

また、前方部の方向については、両くびれ部を結んだ線の二等分線によって推定した。しかし、その方向は後円部の中心を向かず石室に向いている。

墳丘築成に関して特記すべき事として、下層一面にみられる焼土塊や土師器が出土する淡灰色土、6SX025の炭混じり暗黄赤褐色土が掲げられる。これについては、祭祀もしくは地山整形時の混入の二通りが考えられる。祭祀に関して言えば、鬼の枕古墳のように墳丘下部から焼石や炭が混じった祭祀土塊が検出された例がある¹⁴⁾。地山整形の段階で古墳築造以前の遺物が混じる例は畠山古墳等にある¹⁵⁾。前者が古墳と同時期の遺物であるのに対し、後者が古墳築造以前の遺物であることが特徴である。このことから、今回の調査で出土した遺物の時期が弥生後期と古墳築造時よりかなり遅れていることから、後者の地山成形時に混入した遺物と考えられる。

I段斜面の葦石は第3次調査の所見と今回の調査から、前方部と後円部の石室前面付近までしか葺かれてないことがわかった。また、南東部の周溝部分では全く確認されていないことから、東側や周溝部には存在していなかったと推測される。つまり、古墳西側は2段の葦石が葺かれていたことになり、西側御笠川方面の平野部からの景観を意識した造りをし、その反対側については、いわゆる手抜きをした構造であったと考えられる。

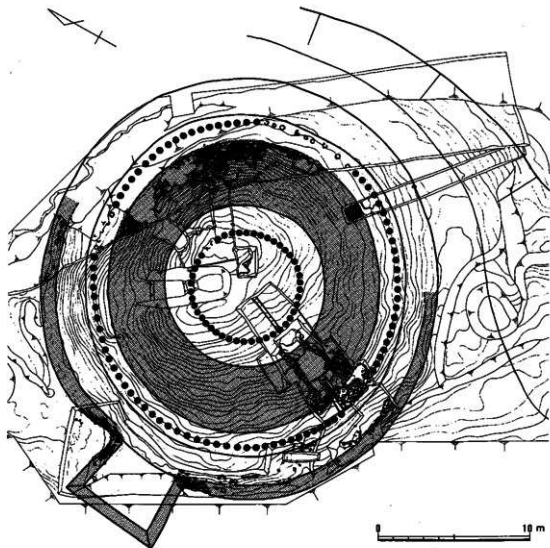


Fig. 64 成屋形古墳復元図 (1/250)

Ⅱ段斜面葺石は雑ではあるが区割りを設け、作業を行った工程が確認できた。しかし、石室前付近は堅固な造りをしていたことから、西側はより明確な区割り等が確認できる可能性がある。

(2) 石室

今回石室内部は未調査であったが、初期の形態を残す横穴式石室であることが分かった。この形態は以前言われていた壜穴系横穴式石室のⅢ期A型に位置づけられるものであるが⁽⁹⁾、明らかに横穴式石室として確立した形態を示している点などから一般的な横穴式石室とした方が妥当である⁽¹⁰⁾。そして、前庭部構造や支室部分の天井石が前庭部と同じ高さで続いていることなどから、初期的な横穴式石室の様相を残しているものの、塊石積みであることや石室に対し斜め方向からではなく水平に前庭部が接続する構造などから、本石室が横穴式石室として定型化に向かう過渡

期にあることが窺える。また、前庭部が明瞭にハ字形に開く形態として佐賀県の関行丸古墳¹¹⁾や那珂川町のカクチガ浦遺跡群第10号墳¹²⁾等があり、成屋形古墳もこれらのような内部形態をしているものと考え、閉塞石を取り除くと一段下がって単室構造の玄室が存在しているものと考えられる。また、天井石が前庭部に約0.6m突き出している構造は、ほかに釜塚古墳で天井石が約1.2m突き出している例が見られるが¹³⁾、使用石材や構造上異なる点も多く、釜塚古墳に何らかの影響を受けたというには、内部構造が不明である現段階において言及することは困難である。

(3) 6SX025

この遺構に関してはその性格の判断が難しいが、調査の所見を列記すると以下のとおりである。

- ・ 基底石より高い位置でまともな円筒埴輪の破片が出土している。
- ・ 後円部中央を中心として前方部と対称の位置にあること。
- ・ 円筒埴輪が墳頂部から転落したと考えるにすれば、墳丘のかなり深くまで埴輪片が検出されること。
- ・ 円筒埴輪が設置した状態では検出されていない。
- ・ 円筒埴輪の基底部は検出されていない。
- ・ 葺石が取り囲んでいるようにも見える。
- ・ 円筒埴輪には同心円文様が付けられている。

以上の所見から円筒埴輪がこの場所に存在していた可能性があると考えた。基底部が検出されない点については埴輪列でも同様であったため問題はなく、また、水平に欠損しているため人為的な打ち欠きを行ったことも考えられる。しかし、設置状態を確認できなかったことなど肯定できない面もある。また、その他の古墳において埴輪列以外の場所で、それも墳丘の葺石中に円筒埴輪を立てた例を聞かないだけに、遺構かただの偶然か、その結論は今後の調査研究を待たざるを得ない。

(4) 6SX030

石室前庭部もしくはこの場所で祭祀を行った後に、石室入口脇に祭祀土器を寄せ集めた廃棄遺構と考えられる。調査区際で検出されたため、調査区外にもさらに広がっているものと考えられる。

今回の調査によって、次のようなことが推測される。

- ・ 須恵器、土師器高坏は転落石より下で検出されたため、葺石の転落が起こる前にこれら祭祀土器は置かれていた。
 - ・ 円筒埴輪に接するように出土しているため、祭祀土器は円筒埴輪が設置された後に置かれた。
 - ・ 須恵器壺のみはテラス面よりかなり高い位置で確認され、さらに転落石より上で出土している。
- これらのことから、土師器高坏や須恵器の無蓋高坏は初葬時のもので、須恵器壺はそれらより時期がやや後の頃（追葬等）に置かれたもの。もしくは墳頂部を含めて、上位からの転落と考えられる。

(5) 埴輪

円筒埴輪

今回調査した円筒埴輪の全体として、次のようなことが観察できた。

- ・外面は一次調整にタテハケを施し、その後僅かにヨコハケを施すものもみられる。
 - ・内面調整はナデとハケを施す。
 - ・底部調整はみられない。
 - ・タガは殆ど台形を成すが、僅かに強いナデにより突出の強い方形状を成すものがみられる。
 - ・透かし孔の形状は円形を成し、タガ間の孔数は2個である。
 - ・有黒斑の埴輪はみられず、土師質である。
 - ・普通円筒埴輪は殆どが端部をヨコナデし、色調は黄灰色を呈し、焼成は普通もしくはやや軟質である。
 - ・朝顔形円筒埴輪の色調は殆どが茶色味を帯びた黄灰色を呈し、焼成が悪く軟質のものが多い。
- 以上の特徴から、埴輪の時期は川西編年Ⅳ期に位置づけられる¹¹⁾。

また、7分類した普通円筒埴輪の口縁部形態の内訳は1類7.5%、2類55%、3類7.5%、4類15%、5類5%、6類7.5%、7類2.5%であった。2類が半数を占めていることになり、この形態が成屋形古墳の特徴と云える。その2類と同形態の埴輪は神領1号墳に見られるが¹⁴⁾、その設置方法は孔を掘り埋める方法で成屋形古墳とは全く異なっている。

円筒埴輪の復元

埴輪の破損が著しく全体像が掴みにくいが、全体として1段タガ下の基底部が15cm前後、タガ間が9cm前後、タガ幅は2cm程である。そして、普通円筒埴輪の最上段タガから端部までも10cm前後である。最も残りが良いI段テラス埴輪列のnが2～3段間でも透かし孔が施されていることから、タガが3段以上はあるものと考えた。そこでタガが3段あると仮定した場合、普通円筒埴輪の高さは約50cmに復元できる。朝顔形円筒埴輪は口縁部の開き方で高さが異なってくるものの、約75cmの高さに復元できる。

円筒埴輪の配列

墳頂部埴輪列で明瞭に残るものは3基のみで、周囲の盗掘や盛土の流出によってその他の残存は期待できない。確認できた3基が心々距離約35cmの間隔で墳頂部平坦面の周囲約23.5mに巡っていると仮定すると、約67基の埴輪が並んでいたことになる。しかし、円筒埴輪の器種については全く分からない。また、墳頂から転落したと考えられる破片の中には、他地点出土の資料に比べて器壁が薄いのに対し、タガはほぼ同大の大きさであるものが多く含まれる。

I段テラス埴輪列は、Eトレンチ東側で確認された9基の間隔に統一性が見られなかったが、部分的に欠落している箇所があり、それを補うと心々距離でおおよそ50～55cmの間隔で規則的に並び、a～i間に12基は存在していたものと推測される。また、Eトレンチ北側で確認された5基も同様であるが間隔がやや長く60～64cmの間隔で並んでいる。しかし、石室前では密に並び心々距離35cmの間隔で並んでいることから、場所によってその密度を意図的に変化させている可能性が考えられる。よって、周囲約66.4mのI段テラス埴輪列は約103～190基(平均146基)の埴輪

が円を描くように並んでいたと推定される。しかし、上述してきたように基底部付近が復元できるだけで上部構造は全く復元できなかった。周囲に散乱していた埴輪も出土地点ごとに細かく取り上げていったものの、同一箇所朝顔形円筒埴輪と普通円筒埴輪の口縁部が出土するなど埴輪の散乱状況から推測するには極めて困難な状況であった。また、現存の範囲では透かし孔やへら記号の向きはまちまちで、正面を意識した行為は全く確認できなかった。

円筒埴輪の設置方法

上述したように現状では葦石との間に厚さ5~10cmの赤茶褐色土を入れ、テラスを作り円筒埴輪を押さえている。平均的に地山から高さ約20cmのレベル上に葦石の転落石が一面に広がり、転落石の下約10cmでは少量の埴輪片を含んでいるが、葦石の転落が全く見られない。このことから、土の流出もあったとすると、当初は約15cm程土を盛り、埴輪を安定させたと考えられる。しかし、1段目のタガまで埋めるといった目安は設置段階で底部を欠損しているため、存在しなかったはずである。埴輪列の外側については埴輪底部付近まで崩壊した埴輪片が散在し、土が流失していることは明らかである。したがって、盛土は不明確であったが、内側と同じく15cm前後の盛土で押さえた程度だったと考えたい。

円筒埴輪の底部欠損について

原位置を保っていた円筒埴輪14基のうち、底部を全く残さず欠損しているものが8基、底部を一部残し、その他が剥離欠損しているものが4基、欠損が見られないものは1基のみであった。しかし、その1基も大部分が欠落しているため、完全に残っていたとは言い切れない。

朝顔形円筒埴輪や盾形埴輪など特殊な埴輪で底部を欠損し、レベルを調整する例はみられるが⁽¹⁵⁾、このように器種に限らず殆ど全ての円筒埴輪において底部を欠損させている例はみられない。仮にレベルを調整すると考えた場合においても、底部の一部を残していることについては、打ち欠いているにも関わらずレベルが変化していないという矛盾が生じている。帆立貝式前方後

円墳ということで何らかの規制を受けた結果なのだろうか。しかし、他の帆立貝式前方後円墳ではこのような例はみられない。極めて異例であり今後の類例を待たざるを得ない。

同心円の文様について

この同心円の文様は外円が径4.5~4.9cm、幅0.3~0.85cm、深さ0.2~0.4cm、中央孔が径0.7~0.85cm、深さ0.4~0.7cmを測る。若

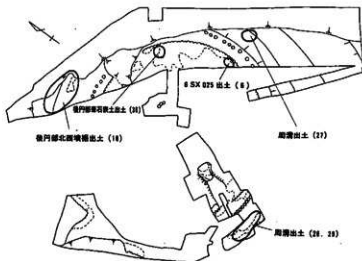


Fig. 65 同心円文様出土地点図

干のばらつきはみられるが、ほぼ統一された形であることが理解できる。つまり、普通のヘラ記号と異なり、わざわざコンパス又はスタンプ状の工具を作り、施文していることから特殊な意味を持つ文様であることが考えられる。埴輪の形態についてはわからないが、出土地点は大きく5カ所で、原位置を保つⅠ段テラス埴輪列には全く見られない。数は少ないが分布状況から、同心円の文様が出土するのは6SX025や石室前面など他とは異なる特別な場所であることから、古墳の中でも特別な場所に設置する埴輪のみに施された文様である可能性も考えられる。これに近い文様を施している埴輪は、諸田塚1号墳¹⁰⁴や老司古墳¹⁰⁵の埴輪に径1cm前後のスタンプ状のヘラ描き円弧文を胴部上部に施しているものがみられる程度で、このような同心円状の整った形をした文様を有する埴輪は他に例がない。塚堂古墳¹⁰⁶などに見られるような渦巻き状のヘラ記号を文様として意識した結果なのだろうか。類例の増加を待ちたい。

(6) 須恵器

第3次調査で前方部から出土した大小の甕や今回調査の6SX030の祭祀土器群の無蓋高坏などは、陶邑のTK208¹⁰⁷に比定される。周溝から出土した高坏の脚部については、それらよりやや後出するものと考えられる。無蓋高坏については、成屋形遺跡第4次調査で胎土、厚さ、焼成具合などは異なるものの同一形態のものが出土している¹⁰⁸。直口甕については、近隣地域で類似する形態の資料を求めると、井河古墳群第1号墳出土の短頸甕などが見られるが¹⁰⁹、大きさ、胎土、色調、焼成の全てに関して全く異なり、形も微妙に異なっている。胴部形態から検討を加えたい所であるが、今回取り上げてきたのは口縁部のみであるため全体像がつかめない。また、陶邑にも類例が見られないため今後の検討課題として資料の増加を待ちたい。

(7) 古墳の築造年代と位置づけ

今回調査の出土遺物などから成屋形古墳の築造年代は5世紀後半でも古い時期と推定され、6SX030と石室前面部分のⅡ段斜面葺石の崩壊状況の前後関係から追葬があったことも窺える。そして、今回の調査によって成屋形古墳が築造時の状況をよく残した帆立貝式前方後円墳であり、その構造や出土遺物などに特異な点が多い古墳であることがわかった。また、この御笠川流域で横穴式石室を採用した初期の頃に位置づけられ、この時期の古墳の動向を知る上で極めて重要な古墳であることも明らかになった。

そこで、この古墳の被葬者像について簡単に検討してみたい。周辺地域を含めて首長墳の系譜を辿っていくと、初期の前方後円墳として那珂川中流域に那珂八幡古墳¹¹⁰が、その後にその上流域に安徳塚古墳¹¹¹が築造されている。そして、5世紀初めになると横穴式石室を最初に採用した老司古墳が登場する。その後に続く前方後円墳についてはやや離れた那珂川下流に博多1号墳¹¹²がみられる程度である。また、5世紀前半の円墳で注意すべきものに、成屋形古墳と谷を挟んだ対岸に位置し、成屋形古墳とほぼ同規模の笹原古墳がある¹¹³。しかし、笹原古墳は内部主体が竪穴式石室であることや円筒埴輪が1片もなく甕型埴輪が出土していることなど時期的、構造的にも成屋形古墳に直接系譜を辿ることは困難であり、一代もしくは二代の開きがある。その後の5世紀中頃になっても那珂川上流域には目立った前方後円墳は見られず、やや離れた那珂川下

流域に剣塚北古墳⁹⁰が見られる程度である。同じ頃、那珂川上流域に井河古墳群1号墳⁹¹やカクチガ浦遺跡群⁹²など盟主的な円墳の分布が目立っている。また、今年報告される筑紫野市所在の5世紀中頃の諸田仮塚1号墳⁹³という円墳では、埴輪等が出土しているが、埴輪には須恵質と土師質の両方があり、成屋形古墳とは焼成方法が異なるため、直接の系譜を辿ることは無理であろう。また、成屋形古墳築造後の系譜を考えた場合は、5世紀末～6世紀初めの貝徳寺古墳⁹⁴まで下ることになる。そして、その後6世紀になって日拝塚古墳⁹⁵や東光寺剣塚古墳⁹⁶などが築造されていく。また、太宰府市周辺に関しては、宮ノ本遺跡⁹⁷や高雄遺跡群⁹⁸で4世紀代と6世紀以降の古墳の分布を確認できるだけで、5世紀代のものは見当たらない。

以上のように簡単ではあるが5世紀代の首長墳の分布状況を見てみたが、那珂川流域では那珂八幡古墳→安徳大塚古墳→老司古墳→博多1号墳→剣塚北古墳→貝徳寺古墳→日拝塚古墳→東光寺剣塚古墳の順に築造されたと考えられ、およその系譜は辿れ、那珂川流域を中心に広く展開していることがわかる。これに対し御笠川東岸地域に関しては、御陵古墳から三角縁神獸鏡が出土し⁹⁹、6世紀後半から築造される群集墳が那珂川上流域と同様に御笠川東岸地域にも多く分布していることなどから那珂川流域とは政治的、社会的領域の差異があったことは不鮮明ながら認められる。しかし、現段階で御笠川東岸地域に成屋形古墳前後の系譜を辿ることはできない。その他の首長墳が消滅したと考えるべきか御陵古墳や成屋形古墳などが那珂川流域と同じ領域で、一時的にこの地を遷地し築造された古墳と考えるべきかは今後の課題であるが、本古墳の埴輪の製作やその設置方法などこの地域では特異な状況を示していることから、被葬者も単純に在地豪族というより、この地域では異質な存在であった人物だったと考えられる。また、上述したように墳形が御塚古墳⁹⁹に酷似していたことは、5世紀後半を前後する時期に、成屋形古墳に関わる人物が水沼君と何らかの共通点があったことも推測される。

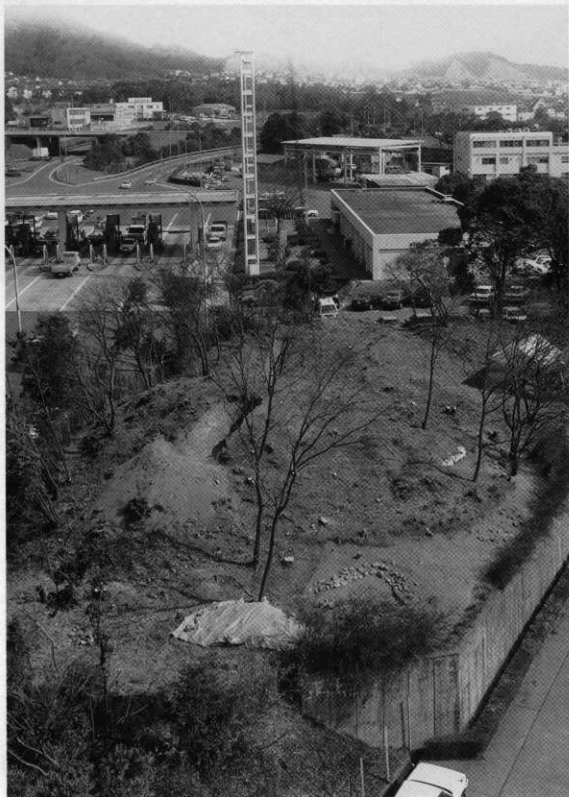
このように以前からの課題とされていた御笠川東岸地域における首長墳レベルの古墳の動向については、相変わらず資料的に乏しくより深く言及することは困難であり、今後周辺地域の内部主体を含めた古墳の調査を待たなければならない。また、本古墳も石室内部の状況、I段斜面葺石の巡り方、I段テラス埴輪列の配列状況、第3次調査の詳細な検討など古墳の保存を含め今後の課題は多い。

註

- (1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌第64巻第2号』日本考古学会 1978
- (2) 立石雅文「史跡 御塚・権現塚古墳」久留米市文化財調査報告書第101集 久留米市教育委員会 1995
- (3) 直販文化財を守る会「福岡県高野剣塚古墳の研究」『地域相研究第12号』地域相研究会 1983
- (4) 小田富士雄「福岡県・石並前方後円墳」『九州考古学研究 古墳時代編』学生社 1979
- (5) 下村智 横山邦経「福岡県穂波古墳遺跡」『日本考古学年報36』日本考古学協会 1986
- (6) 宮川修「前方後円墳の設計と尺度」『季刊考古学第3号』雄山閣出版 1983
- (7) 小田和利「鬼の枕古墳」甘木市文化財調査報告書第19集 甘木市教育委員会 1987

- (8) 宇野慎敏『高山古墳・島山遺跡(B-1地点)』北九州市埋蔵文化財調査報告書第35集 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1984
- (9) 柳沢一男『壱穴系横穴式石室再考』『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1981
- (10) 柳沢一男『丸腰山古墳Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告第146集 福岡市教育委員会 1986
- (11) 渡辺正気『関行九古墳』佐賀県教育委員会 1958
- (12) 宮原千佳子『カクチガ浦遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第23集 那珂川町教育委員会 1990
- (13) 石山勲『釜塚』前原町文化財調査報告第4集 前原町教育委員会 1981
- (14) 平ノ内幸治『神領古墳群Ⅱ』宇美町文化財調査報告書第6集 宇美町教育委員会 1987
- (15) 伊達宗泰『黄金塚2号墳の研究』花大研究報告10 花園大学黄金塚2号墳発掘調査団 1997
- (16) 福岡県教育委員会 岸本圭氏より御教示。詳細は、報告書を参考にされたい。
- (17) 山口謙治 吉留秀敏 渡辺芳郎『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集 福岡市教育委員会1989
- (18) 石山勲ほか『塚堂遺跡』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会 1983
- (19) 田辺昭三『陶邑古窯跡群I』平安学園考古学クラブ 1966
- (20) 酒井仁夫ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XVII』福岡県教育委員会1977
- (21) 沢田康夫『井河古墳群』那珂川町文化財調査報告第10集 那珂川町教育委員会 1983
- (22) 近藤義郎『前方後円墳集』九州編 山川出版社 1992
- (23) 舟山良一『笹原古墳』大野城市文化財調査報告第15集 大野城市教育委員会 1985
- (24) 吉留秀敏『東光寺銅塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第267集 福岡市教育委員会1991
- (25) 佐藤昭則『貝徳寺古墳』那珂川町文化財調査報告第16集 那珂川町教育委員会 1987
- (26) 狭川真一『太宰府・佐野地区遺跡群IV』太宰府市の文化財第21集 太宰府市教育委員会 1993
- (27) 森田勉『高浦浦古墳群の調査』太宰府町の文化財第1集 太宰府町教育委員会 1976
- 中島恒次郎『高雄地区遺跡群』太宰府市の文化財第22集 太宰府市教育委員会 1994
- (28) 舟山良一『御殿古墳群』大野城市文化財調査報告第13集 大野城市教育委員会 1984

写 真 图 版



第6-1次調査全景（空中写真・北西から）

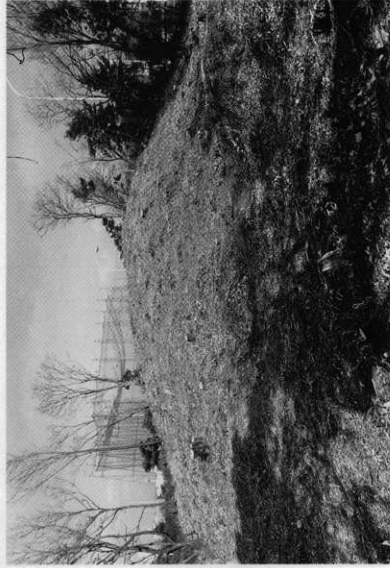


第6-1次調査前状況（空中写真・上が西）



第6-1次調査全景（空中写真・上が西）

Pla. 3



第6-1次調査前状況(南から)



第6-1次調査前状況(北から)



第6-1次調査前方部検出状況（空中写真・上が東）



第6-1次調査北側くびれ部検出状況（北西から）



第6-1次調査北側くびれ部検出状況(南から)



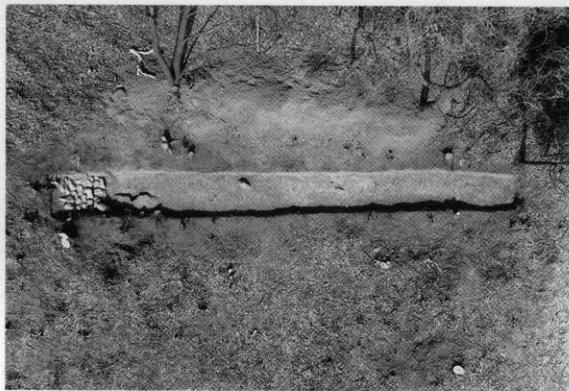
第6-1次調査南側くびれ部検出状況(北西から)



盗掘坑 (Dトレンチ) 完掘状況 (空中写真・上が南西)



盗掘坑 (Dトレンチ) 土層観察 (北東から)



Cトレンチ完掘状況 (空中写真・上が北東)



CトレンチⅡ段斜面葺石崩壊状況 (南東から)



CトレンチⅡ段斜面葺石検出状況（南東から）



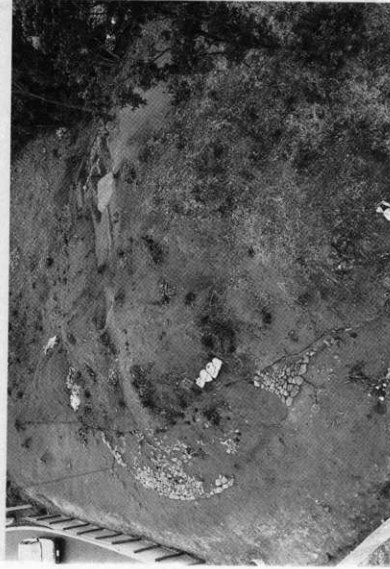
Cトレンチ粘質土検出状況（北東から）



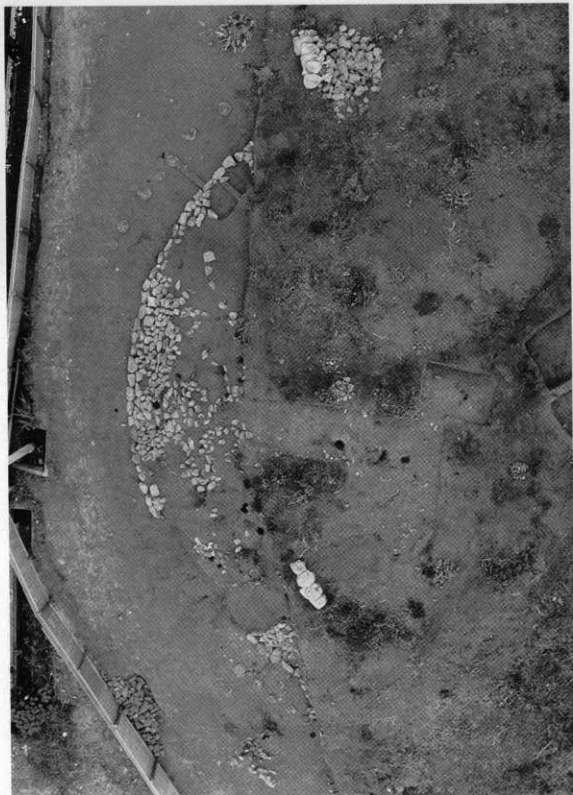
第6-2次調査全景（空中写真・上が北西）



第6-2次調査全景 (空中写真・上が北西)



第6-2次調査全景 (空中写真・上が南東)



EトレンチⅡ段斜面葺石及びⅠ段テラス壇輪列検出状況（空中写真・上が南東）



EトレンチⅡ段斜面葺石（南東から）



EトレンチⅡ段斜面葺石（北東から）

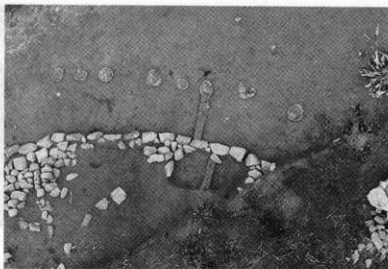


EトレンチⅡ段斜面葺石（1区、北東から）



EトレンチⅡ段斜面葺石区割り境界石列（4～5区）

東側 I 段テラス壇輪列 (上が東)



北側 I 段テラス壇輪列 (上が北)



I 段テラス壇輪列 a



I 段テラス壇輪列 b



I段テラス埴輪列 c



I段テラス埴輪列 d



I段テラス埴輪列 e



I段テラス埴輪列 f



I段テラス埴輪列 g



I段テラス埴輪列 h



I段テラス埴輪列 i



I段テラス埴輪列 j



I段テラス埴輪列 k



I段テラス埴輪列 l



I段テラス埴輪列 m



I段テラス埴輪列 n



I段テラス壇輪列表土除去後 a～c



I段テラス壇輪列 a～c



I段テラス壇輪列表土除去後 d～f



I段テラス壇輪列 d～f



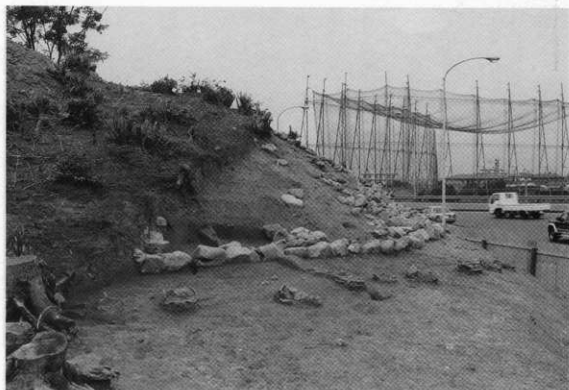
I段テラス壇輪列表土除去後 g～i



I段テラス壇輪列 g～i



東側Ⅱ段斜面葎石崩壊状況（南東から）



東側Ⅱ段斜面葎石及びⅠ段テラス植輪列検出状況（南東から）



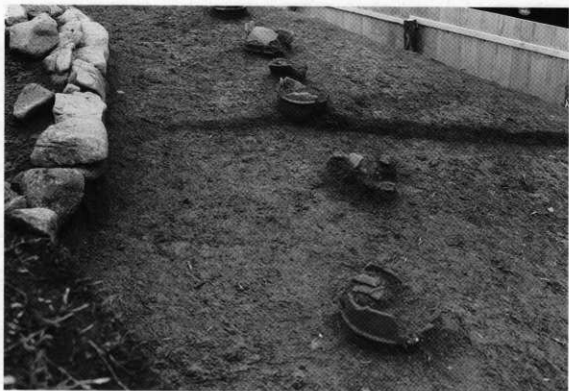
東側Ⅱ段斜面葺石崩壊状況（北西から）



東側Ⅱ段斜面葺石及びⅠ段テラス壇輪列検出状況（北西から）



東側Ⅰ段テラス壇輪列（北から）



東側Ⅰ段テラス壇輪列（南から）



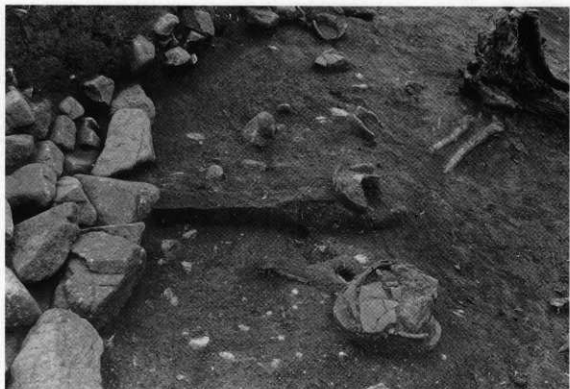
北側Ⅱ段斜面葺石崩壊状況（北から）



北側Ⅱ段斜面葺石崩壊状況（側面、東から）



北側Ⅱ段斜面葺石及びⅠ段テラス地輪列（北から）



北側Ⅱ段斜面葺石及びⅠ段テラス地輪列（東から）



北側Ⅱ段斜面葺石及びⅠ段テラス壇輪列（北西から）



墳丘北西掘検出状況（北西から）



東側Ⅰ段テラス壇輪列設置状況土層観察（南から）



北側Ⅰ段テラス壇輪列設置状況土層観察（西から）



Gトレンチ I 段テラス壇輪列検出状況（北西から）



Gトレンチ I 段テラス壇輪列検出状況（南東から）



墳頂部検出状況（南から）



墳頂部埴輪検出状況（南から）



6SX025埴輪検出状況（東から）



6SX025埴輪除去後状況（東から）



石室入口（空中写真・南西から）



石室前庭部及び閉塞部（南西から）



GトレンチⅡ段斜面葺石（南西から）



石室前庭部左壁（南東から）



石室前庭部右壁（西から）



石室墓道土層観察1 (北西から)



石室墓道土層観察2 (北西から)



6SX030検出状況（西から）



6SX030検出状況（北東から）



後円部盛土土層観察（南東から）



後円部盛土土層観察（南から）



後円部盛土土層観察1 (北東から)



後円部盛土土層観察2 (北東から)



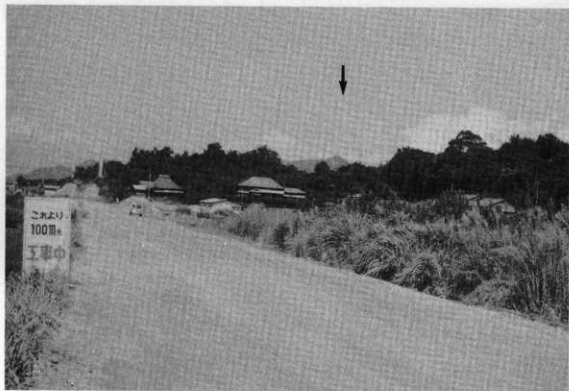
後円部盛土土層観察3 (北東から)



成屋形古墳遠景（南から、1969年）



成屋形古墳遠景（南から、1997年）



成屋形古墳遠景 (南から、1968年)



成屋形古墳遠景 (南から、1997年)



成屋形古墳遠景（南西から、1969年）



成屋形古墳遠景（南西から、1997年）

第3次調査古墳全景
(西から)



第3次調査古墳全景
(南から)



第3次調査
古墳前方部検出状況
(西から)



第3次調査
古墳前方部検出状況
(後円部から)



第3次調査古墳くびれ部
南側付近検出状況 (西から)



第3次調査
古墳石室前面付近I段斜面葺石
検出状況 (南から)



第3次調査
古墳石室前庭部（南西から）



第3次調査 古墳石室前庭部
ベンガラ入り坏検出状況
（東から）



第3次調査 古墳石室前庭部
ベンガラ入り坏検出状況
（東から）



第3次調査
方形周溝墓及び堅穴式石室墳
(東から)



第3次調査
第1号方形周溝墓 (北東から)



第3次調査
第2号方形周溝墓 (東から)

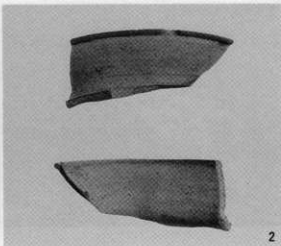




第3次調査検出堅穴式石室



1



2



3



4



5



6

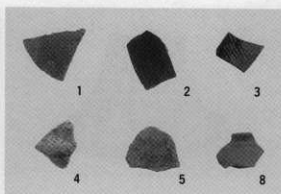


7



8

6SX030出土土器

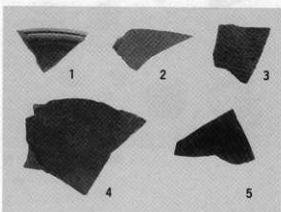


6

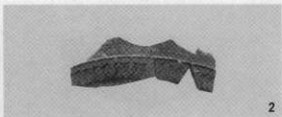


7

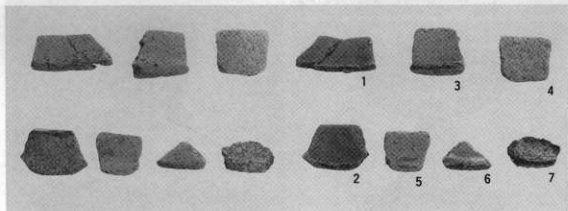
後円部表土出土土器



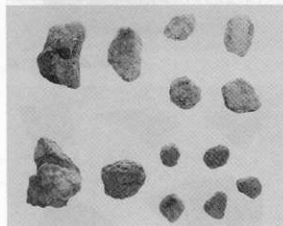
前方部・くびれ部出土土器



周溝出土土器

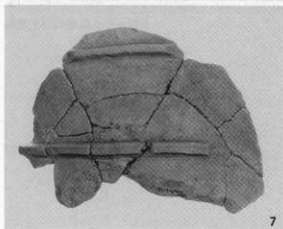
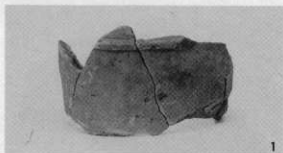


後円部盛土出土土器

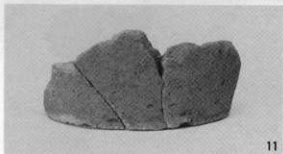


後円部盛土出土焼土塊

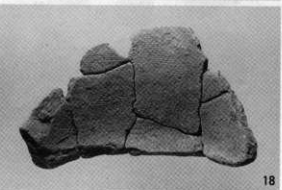
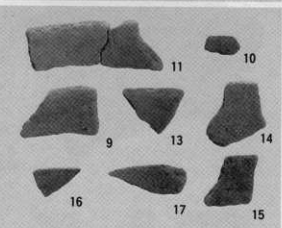
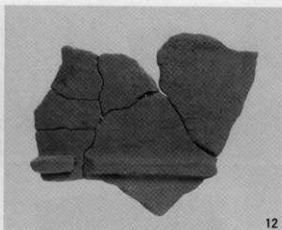
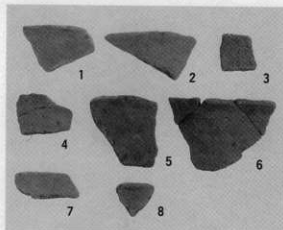




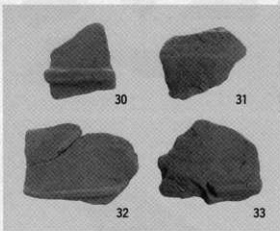
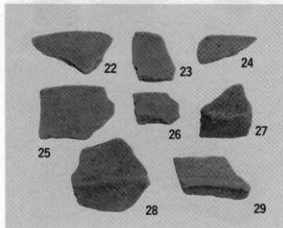
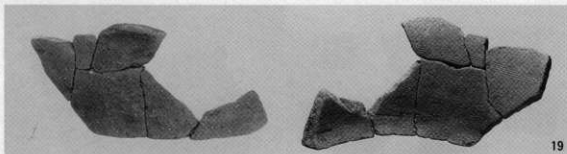
I段テラス壇輪出土壇輪



I段テラス埴輪列出土埴輪

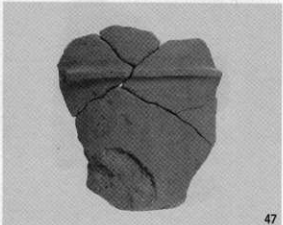
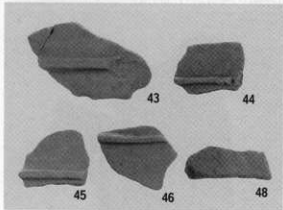
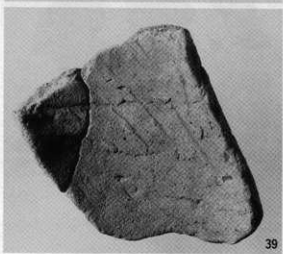
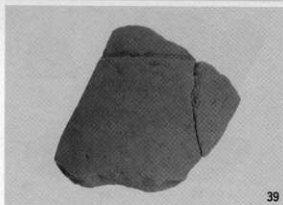
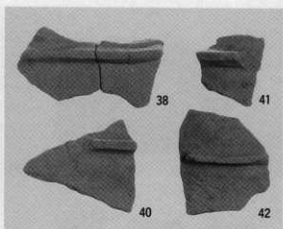
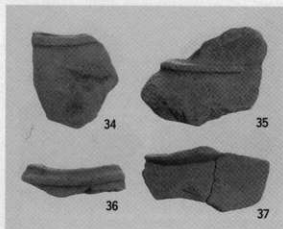


I段テラス壇輪列周辺出土壇輪

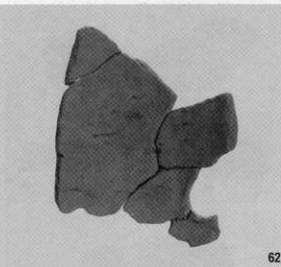
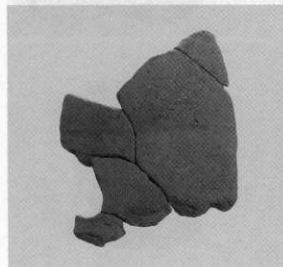
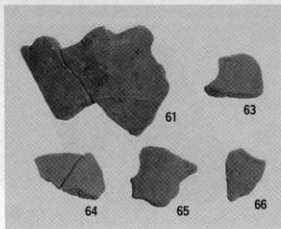
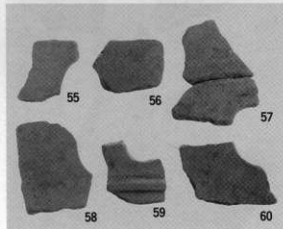
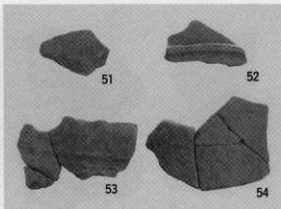


I段テラス埴輪列周辺出土埴輪

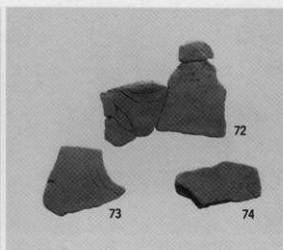
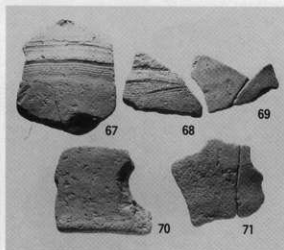




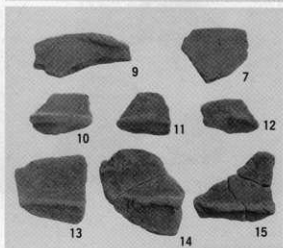
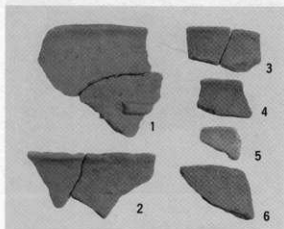
I段テラス壇輪列周辺出土壇輪



I段テラス埴輪列周辺出土埴輪



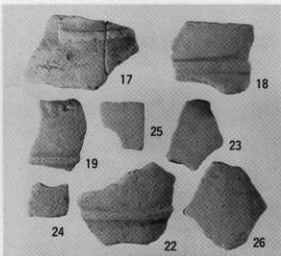
I段テラス壇輪列周辺出土土壇輪



周溝出土土壇輪



16



17

18

25

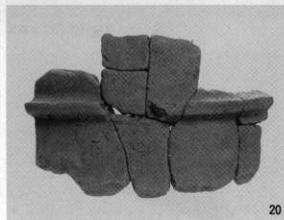
23

19

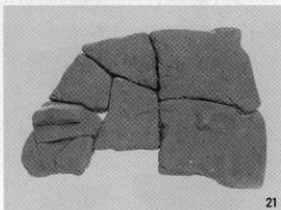
24

22

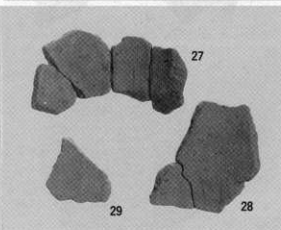
26



20



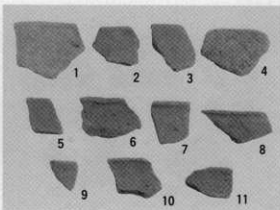
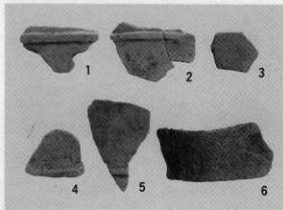
21



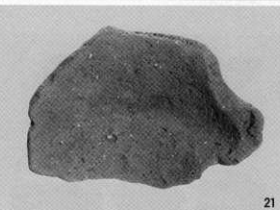
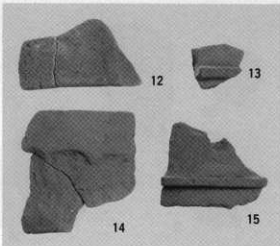
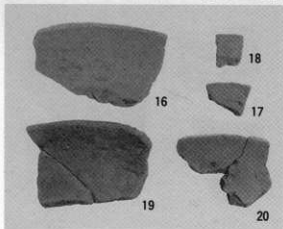
27

29

28

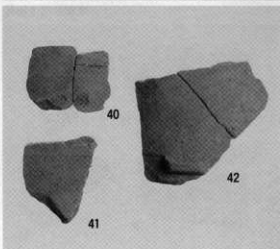
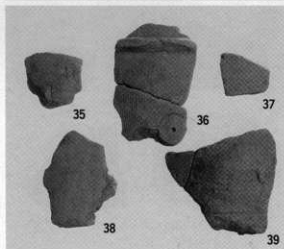
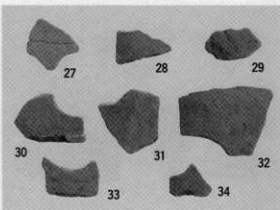
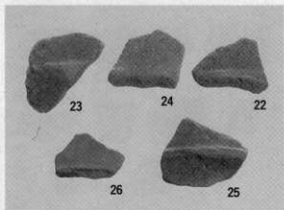


墳頂部出土埴輪

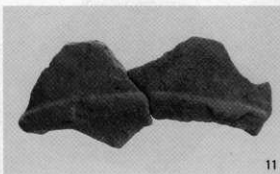
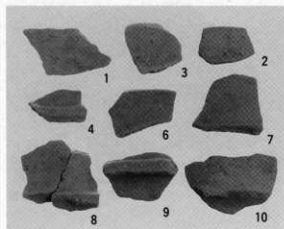


21

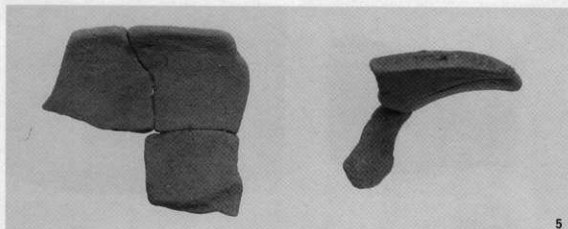
後円部葺石表土出土埴輪



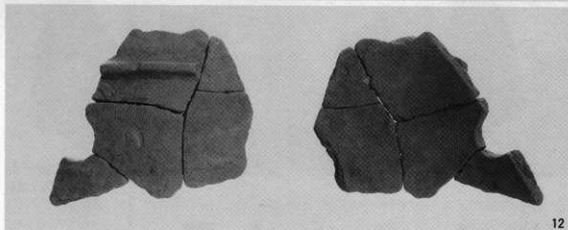
後円部葺石表土出土埴輪



後円部北西掘出土埴輪

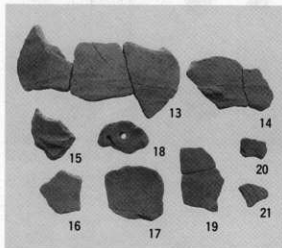


5

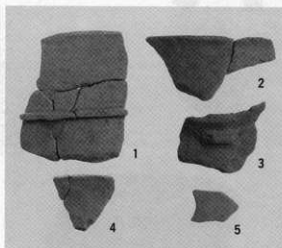


12

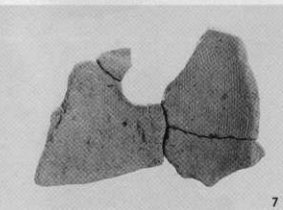
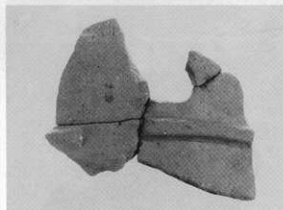
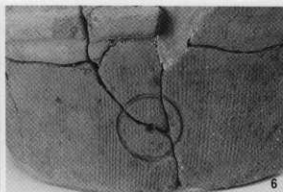
後円部北西裾出土埴輪



後円部北西裾出土埴輪



6SX025出土埴輪



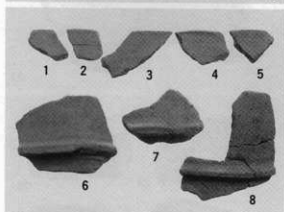
6SX025出土埴輪



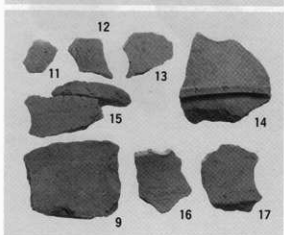
第6次調査出土石器



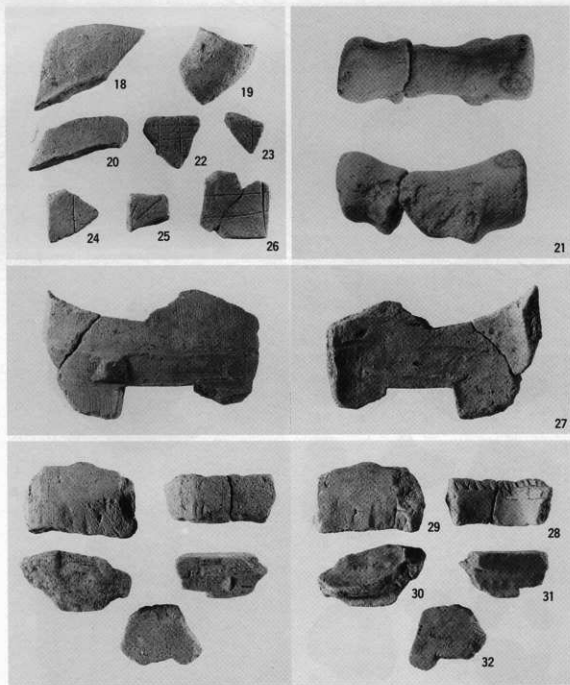
第6次調査出土瓦



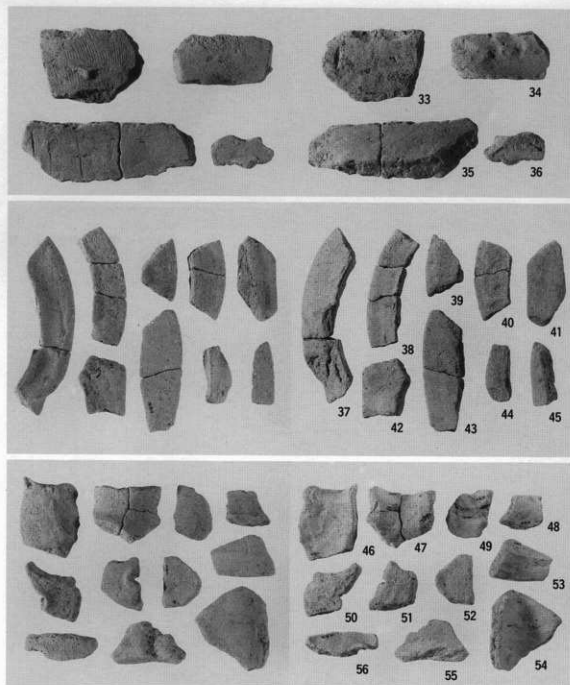
第3次調査出土土器



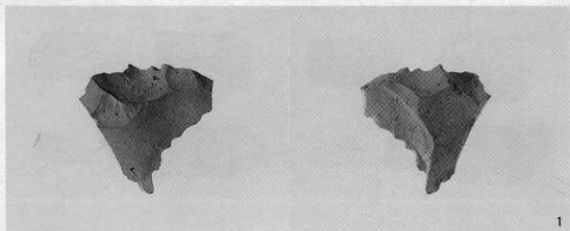
第3次調査出土埴輪



第3次調査出土埴輪



第3次調査出土埴輪



1

第3次調査出土石器



編集後記

今回の報告書作成に当たり、第3次調査を担当された松岡史氏には多くの御教示を受け、当時の様子をお聞きすることができた。当時は、文化財に対する意識が低い時代に加え、時間と費用が満足しない中での発掘調査、そして保存するための駆け引きなどいろいろ大変だったと苦笑されておられた。先人のおかげで今日まで保存されていた古墳を惜しくも一部削平せざる得なかったことは誠に残念であったが、今日の私たちは残った部分を後世に伝えられるよう努力し、ご理解を求めていきたいと考えております。

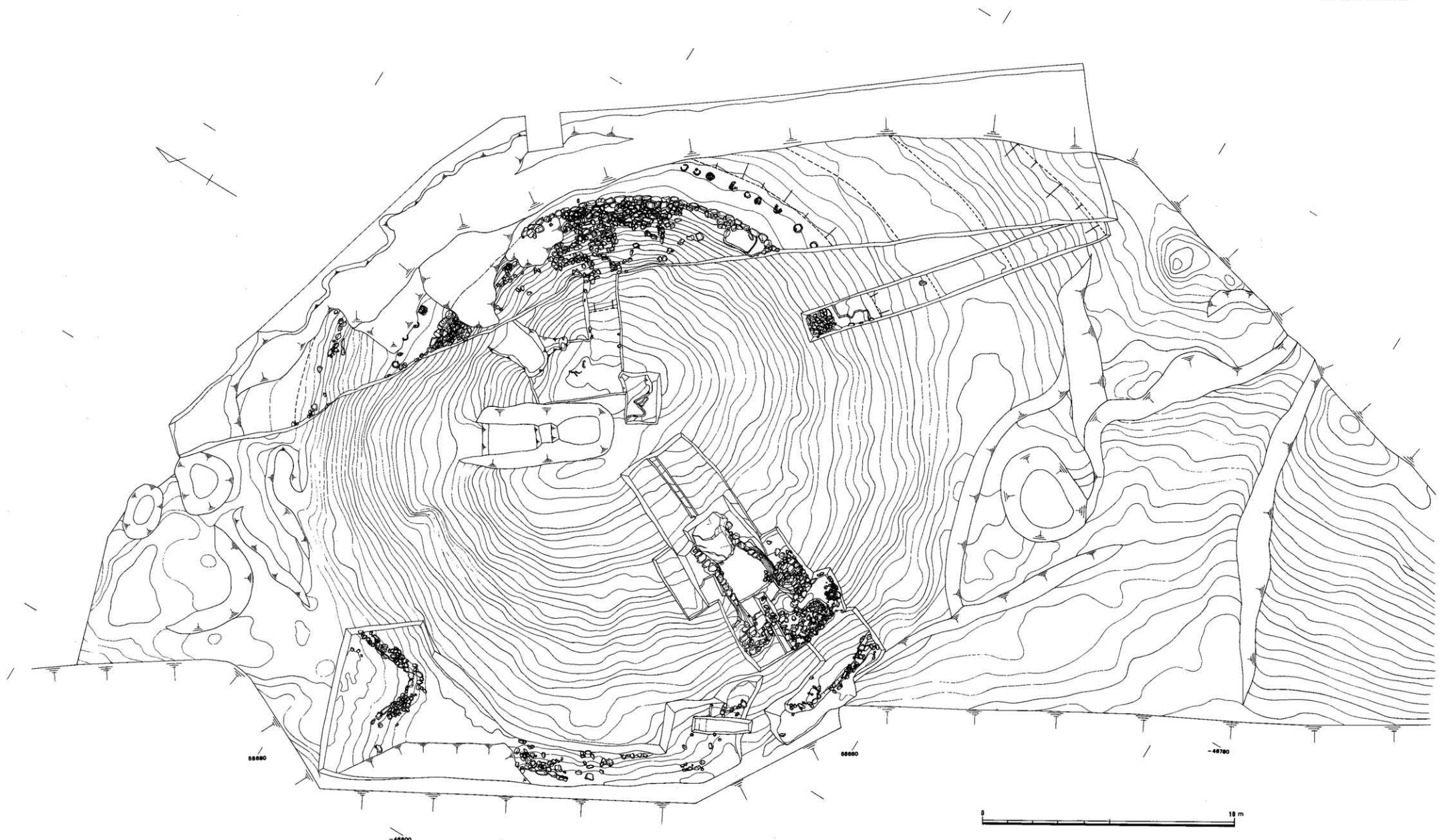
太宰府市の文化財 第38集

成屋形古墳

—成屋形遺跡第6次調査—

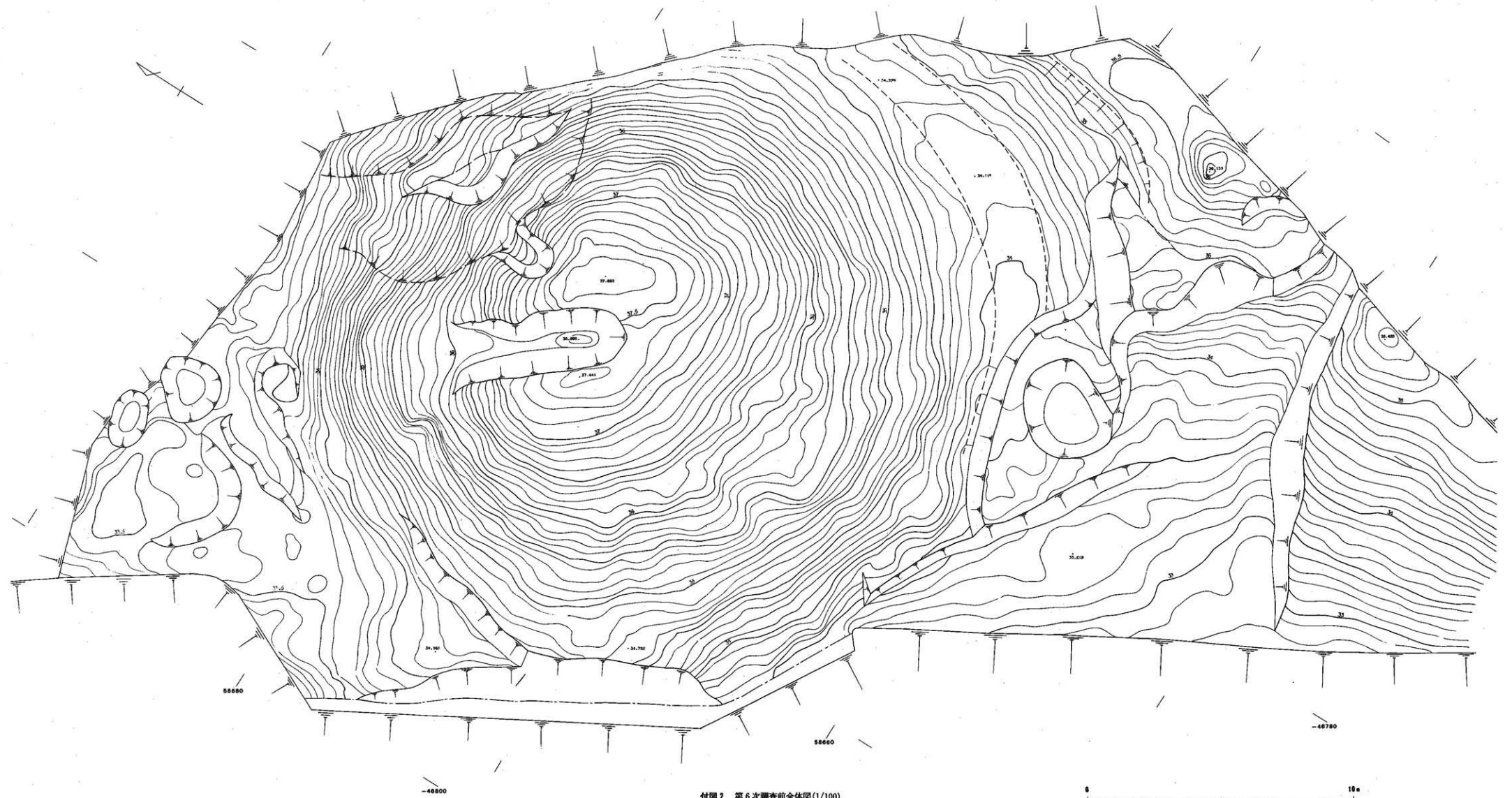
平成10年3月

編集 太宰府市教育委員会
発行 太宰府市観世音寺1-1-1
印刷 株式会社昭和堂印刷
福岡市博多区榎田2-2-52徳重ビル



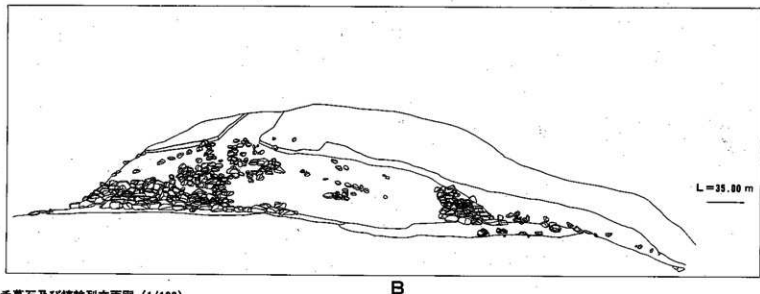
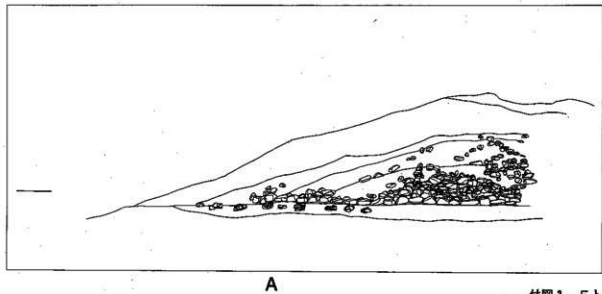
付図1 第6次調査全体図 (1/100)

「成屋形古墳」付図
(太宰府市の文化財第38集)
1998 太宰府市教育委員会



付図 2 第6次調査前全体図(1/100)





付図3 Eトレンチ葦石及び埴輪列立面図 (1/100)